

虚堂智愚の嗣法門人について

南宋末元初の江南禅林における虚堂門下の動向

佐藤秀孝

はじめに

南宋末期の江南禅林を代表する臨濟禅者といえば、破庵派の無準師範（仏鑑禅師、一一七七—一二四九）の名が第一に挙げられよう。師範は杭州（浙江省）余杭県西北五〇里に位置する径山興聖万寿禅寺（古くは能仁禅寺）などを中心に化導をなして多くの嗣法門人を育成しており、その門流は後代に受け継がれて中国禅林の主流を形成して後世に継承されている。一方、師範の門下には京都東福寺開山の円爾（辨円、聖一國師、一一〇二—一一八〇）をはじめ鎌倉初期に入宋した日本僧で嗣法あるいは参学して帰国した禅者がかなりの数に及んでおり、また兀庵普寧（宗覺禅師、一一九七—一二七六）と無学祖元（子元、仏光国師、一一二六—一一八六）のごときはその高弟として日本に渡来し、鎌倉禅林を中心に活躍したことで名高い。このように師範の存在は単に中国江南禅林のみならず、京都・鎌倉などの日本禅林の草創期にも多大の影響を与えているわけである。

そんな当代の重鎮であった師範が淳祐九年（一二四九）三月に世寿七三歳（一説に七二歳）で示寂した後、南宋最末期の中国禅林に在って同じ径山などに住持して古風かつ孤高な禅風を振った臨濟禅者として、松源派の虚堂智愚（息耕叟、一一八五—一二六九）という人の名が知られている。智愚の存在は後代の中国禅林にはほとんど影響を及ぼさなかったものの、その後の日本禅林の形成発展に師範にも匹敵する重要な役割を演じている。

智愚は明州（浙江省）象山県の陳氏の出身で、松源下の運庵普巖（字は少瞻、？—一二三三？、または一一五六—一二三五）

に参じてその法を嗣いでおり、ほぼ浙江の大刹を中心に化導を敷き、門下に日本から入宋求法した南浦紹明（円通大応国師 一一三三—一一三〇八）を輩出したことで、現今の日本臨済宗に連なる直系の祖師としてきわめて高い位置に置かれている。後世の日本臨済宗において智愚に対する評価が高まるのは、紹明の法嗣に京都の龍宝山大徳寺の開山である宗峰妙超（大燈国師、一一八一—一一三三七）が出、妙超の法嗣に同じく京都の正法山妙心寺の開山である関山慧玄（関山国師、一一七七—一三六）が出て、大応派とくに大徳寺派と妙心寺派が形成され、やがて応燈関の流れが大きく展開したことに依る。このため後世の日本臨済宗の源流に当たたる祖師として、いきおい智愚は紹明との関わりでのみ論せられてきた感がある。

ところが、これに対して中国における虚堂門下の禅者たちについては存外にその足跡は曖昧なままに放置されている。その主な理由は智愚の門流が中国においては法孫の代でほぼ断絶し、その後の中国禅林の展開に何らの影響を与えずに終わったことにあり、また智愚の法統が紹明によって日本禅林に移植されてしまったと解されることにも起因しよう。確かに中国禅林において智愚の系統は継承されず、後世に何らの痕跡も残し得なかったことは認めざるを得ないが、諸史料を詳細に考察していくと、当代の江南禅林において虚堂門下の人々がそれなりに貴重な事跡を記しているのも事実である。

そこで以下、南宋末期から元代初中期にかけて中国禅林に化導を敷いた虚堂門下の人々がどのような事跡を残したのか、その消息をでき得るかぎり詳細に整理検討して論じてみることにしたい。

虚堂門下を伝える史料

智愚の生涯を明確に知り得る唯一の伝記史料といえ、その高弟のひとりである開極法雲（間叟、一一二五—？）が本師智愚の示寂した後、咸淳一〇年（一二七四）一〇月一日に撰した「行状」（おそらく単独には「虚堂和尚行状」の表題であったか）であるが、その中で法雲は智愚の嗣法門人に関しては簡略に「嗣法十数人」と伝えているにすぎない。「行状」では具体的に法嗣の名を列挙してはいないが、少なくとも智愚が示寂してより満五年を経て法雲が「行状」を撰述した咸淳一〇年の時点で、智愚に嗣承香を注いで諸刹に住持していたか、あるいは智愚の法嗣として叢林の要職を歴任していた禅者が、すでに一〇数人は存していたことになろう。おそらく「行状」が撰述されて以降にも靈石如芝（仏鑑禅師、一一四六—？）のごとく開堂出世して智愚よりの嗣法を公表した禅者もかなり存したはずであろうから、およそ二〇人前後に及ぶ嗣法門

人があったとしても不思議ではない。

では、具体的に智愚の法を嗣いだ門人に關して、諸史料はどのように伝えているのであろうか。以下、智愚の法嗣を伝えている中国と日本の燈史・僧伝および系譜（宗派図）などを列記し、そこに載せられた法嗣たちについて整理検討を試みることにしたい。

中国の禅宗燈史で智愚の法嗣について最初に伝えているのは、明代初期に松源派の南石文琇（一三四五—一四一八）によって編集された『増集統伝燈録』の記載である。すなわち、『増集統伝燈録』巻五には「径山虚堂愚禅师法嗣」として、

蘇州虎丘開極雲禅师・四明定水宝葉源禅师・杭州淨慈靈石如芝禅师・靈巖竹窓喜禅师・四明雪竇禹溪予禅师・葛廬覃禅师。

という六名の禅者を立伝見録している。もっとも、靈石如芝のほかはすべて道号に法諱の下の字一字という三字連称で示されており、法諱の字が明確に記されていない。ただし、その「目錄」においては、

虎丘開極法雲禅师・定水宝葉道源禅师・淨慈靈石如芝禅师・靈巖竹窓喜禅师・雪竇禹溪了禅师・葛廬覃禅师。

となっており、開極法雲・宝葉道源の二禅者の法諱が明確にされている上に、禹溪予ではなく禹溪了と記されている。ともあれ、智愚の法嗣をこれだけ掲載する中国燈史はほかになく、時代も智愚の法嗣らが示寂してわずか一世紀前後しか隔たっていないだけに貴重なものがある。

これに対して、明末以降に陸統として編集された燈史および世譜などになると、智愚の法嗣はかなり限られた人しか載せられない状況になっている。中国禅宗の総合的な宗派図である『禅燈世譜』巻六では、智愚の法嗣として「間極雲」「靈石芝」「宝葉源」という三禅者の名を系図に挙げています。また『五燈会元統略』巻三上（巻五）や『繼燈録』巻四においては「宝葉源禅师」「開極雲禅师」としてわずか二禅者を挙げるにすぎず、『五燈嚴統』巻二においても「間極雲禅师」「宝葉源禅师」と順番こそ相違するものの、同じく二禅者を挙げるのみである。ただし、ここまでは何れも住持地は記されておらず、やはり道号に法諱の下の字を付した三字連称のみで表されている。

これが『祖燈大統』巻八三や『統燈正統』巻二に至ると、蘇州府虎丘間極雲禅师、「定水宝葉妙源禅师」「靈石芝禅师」と再び三禅者が挙げられており、しかもはじめの二禅者は住持地が再び記されるようになり、宝葉源については妙源の法諱が明記されるようになってくる。さらに、『五燈全書』巻四九と『統燈存彙』巻四と『統指月録』巻五においては、「定水

宝葉源禪師「蘇州虎丘間極雲禪師」として二禪者を挙げており、ここでもやはり住持地が明示されている。

いずれにせよ、後代の中国燈史や宗派図において、智愚の法嗣といえはわずかに二人ないし三人しか名が知られなかつたことになる。そうした背景には、『増集統伝燈録』の編纂者である南石文瑋が生きていた明代初期には史料も多く、かつ智愚の属した松源派がいまだ勢力を維持していたが、明末清初に至ると、臨済宗の主流は完全に破庵派の無準派下に戻し、それも雪巖祖欽（慧朗禪師、？—一二八七）の系統と断橋妙倫（松山子、一二〇一—一二六一）の系統の二派のみによって維持されるようになっており、松源派の法統は地を払って断絶したかの状況となっている。こうした当代の宗勢面での状態が多分に影響し、明末清初においては松源派の系統の禪者に対する関心はきわめて薄れていたと見ることができよう。

禅宗燈史のほかに智愚の法嗣について触れるものとして、南末末期から元代初中期にかけて活躍した破庵派無準下の松坡宗懋らが編集したとされる『江湖風月集』には、智愚の法嗣として、

叙南寂菴相和尚（偃溪広闡の法嗣か）・東洲瑞蔵主・四明開極雲和尚・越禹溪了首座・四明虚菴実和尚。

という五禪者（あるいは四禪者）の偈頌をそれぞれ数首づつ収録している。宗懋は無準師範の法嗣のひとりであって、虚堂門下の人々とは同時代の禪者であるだけに、『江湖風月集』の記載は時代的にも貴重な資料といつてよい。楊岐派の千峯如琬が至元二五年（一二八八）の夏に『江湖風月集』に跋文を寄せていることから、この前後の頃に活躍していた禪者たちの偈頌を収録しているものと見られ、それ以降に本格的な活動を開始した靈石如芝などはこれに含まれていない。

同じく元代初中期に越州（浙江省）山陰県南の天衣万寿禅寺（もと法華山天衣禅寺）の住持であった魯庵普会（嗣承は未詳）が編集した『禅宗頌古聯珠通集』全四巻の増収部分において、智愚の法嗣として「開極雲」「宝葉源」「葛蘆罩」という三禪者の頌古をかなり収録しており、これもやはり虚堂門下の人々が示寂してまもない頃の増補であるだけに、彼らに関する貴重な資料を提供している。普会は南末末期から元代初期に活躍した禪者の頌古を収集増補しているが、その最後を飾るのが虚堂門下の三禪者の頌古なのである。普会が如何なる嗣承の禪者であったのかは定かでないが、状況的にはこれら虚堂門下の三禪者と何らかの関わりが存した人ではなかつたかとも推測される。しかも、清代初期に臨済正宗の迦陵性音（集雲堂・円通妙智禪師、？—一七二六）が『禅宗頌古聯珠通集』を再編してその後の禪者の古則と頌古なども付加してまとめた『宗鑑法林』全七二巻の中にも、先の三禪者の頌古が載せられている。ただ、いまは『禅宗頌古聯珠通集』と重

なるために後代の『宗鑑法林』に載る各々の箇所については触れないこととする。

一方、日本の撰述史料として最も早く智愚の法嗣を伝えるのは、『円通大応国師語録』巻下の末尾に、渡来して鎌倉の巨福山建長寺の住持となつた松源派（焰慧派祖）の明極楚俊（仏日焰慧禪師、一一六一—一三三六）が寄せた跋文であつて、その全文を示すならつぎのようである。

楊岐之道、四葉而得「円悟」、大其門起「其宗」。六葉而得「応庵」、法益光道益盛。密庵之道、亦四葉而得「虚堂」。堂之道、若「大震之震」浮世、如「碧潭之璧」秋月。堂之下、葉葉有「光」。如「宝葉源公」・「竹窓喜公」・「閑極雲公」・「葛廬曇公」・「靈石芝公」、皆有「語行」於世者。日本南浦明公禪師、遊「歴」宋大叢林、參「虚堂」得「正伝」、帰「本國」行「道」。今觀「其四会語上堂」・「小參」・「拈古」・「頌古」・「法語及胎贈之作」、如「折旂檀」・「片片皆香」。伏誦不「忍」去「手」。信知、得「的」旨者「迥然殊別也」。余於「日本」宿「縁起」、故來獲「觀」此録、亦不「枉」東海之一行也。

時元徳庚午孟夏結制前五日、建長住山法徑比丘楚俊、敬跋。

楚俊は明州（浙江省）昌国県の人で、松源派の横川如珙（行珙、一一三二—一一八九）の法を嗣いでおり、鎌倉最末期に当たる元徳元年（嘉暦四年、一一三九）すなわち元天暦二年に六七歳という高齡に達して来日を果たしている。楚俊がこの跋文を撰したのは来日した翌年の元徳二年（一一三〇）四月一〇日のことであり、楚俊は智愚の法嗣として宝葉妙源・竹窓浄喜・閑極法雲・葛廬浄寧（曇公）・靈石如芝という五人の中国禪者と日本の南浦紹明を加えた六人の名を挙げている。しかも紹明の『円通大応国師語録』のほかに、他の五人にもそれぞれ語録が存して世に行われていた事実を伝えており、おそらくそれぞれ『宝葉和尚語録』『竹窓和尚語録』『閑極和尚語録』『葛廬和尚語録』『靈石和尚語録』といった表題であつたものと推測される。これら諸禪者の語録はいずれも現今に伝えられていないわけであるが、後に詳しく触れるごとく楚俊は智愚の法嗣のひとりである竹窓浄喜のもとで出家得度した因縁が存しているだけに、その記述にはかなりの信憑性を有するものと見られる。

さらに日本でまとめられた中国・日本の禅宗の宗派図の中にも、やはり智愚の法を嗣いだ門人たちの名が載せられている。室町初期に臨済宗夢窓派の古冢周印（無礙）がまとめた『仏祖宗派図』（単に『古冢宗派図』とも）においては、「径山虚堂智愚」の法嗣として、

報恩宝業法源・承天開極法雲・淨慈靈石芝・雪竇禹溪一了・建長南浦紹明。

という五禅者の名が挙げられており、しかも靈石芝のほかは何れも住持地に道号と法諱の四字連称で表記されている。これに対して江戸初期の慶安元年（一六五〇）に臨濟宗妙心寺派の桂芳全久が編集した『正誤宗派図』四においては「径山虚堂智愚」の法嗣として、

報恩晋芝妙源・資福象先可觀・靈岩竹窓宗喜・妙相字菴・定州宝業道源・日本建長南浦紹明・虎丘開極法雲・雪竇禹溪一了・淨慈靈石如芝・東山葛盧淨暉・淨源友常禮會・南明秋岩徳新・万年東州惟俊・翠巖此軒如足・四明虚菴実・万寿潜溪妙広・仰山海叟法光・明州無示可宣・平山本立・東洲瑞蔵主。

という実に二〇人にも及ぶ禅者の名が載せられている。かなり後代のしかも日本での編集になる『正誤宗派図』の信憑性にはかなりの疑点も存するものの、ほぼ『正誤宗派図』に記される程度の嗣法門人が智愚の席下に存したことは、先の「行状」の記載からして窺われるから、それなりの伝承を経た事実に近い記述であろう。ただし、『正誤宗派図』はあくまで法嗣の名を列記したのみであって、嗣法次第までは意味していないことから、法の兄弟関係などは各禅者の事跡をもとに説明していかななくてはならない。

そもそも、『仏祖宗派図』や『正誤宗派図』に伝えるところは、あくまで日本禅林に伝承されていた説に基づくものであって、たとえば本来は「定水宝葉妙源（晋之）」とあるべきは「ずの」人が「報恩宝業法源」とか「報恩晋芝妙源」「定州宝業道源」として別個に誤って載せられている場合もあり、取り扱うには厳密な検討も必要となる。もちろん日本でもとられた宗派図に載せられていない隠れた法嗣が別に存したとしても何ら不思議ではない。

一方、江戸期に大応派（妙心寺派）の正元師璽（独師、一六二六—一七一〇）によってまとめられた日本禅僧に関する禅宗燈史である『延宝伝燈録』卷三には「宋杭州径山虚堂智愚禅师法嗣」として「相州建長南浦紹明国師」の章と「相州禅興二世巨山志源禅师」の章が存しており、智愚の法を嗣いだ二人の日本僧が明確に立伝せられている。とりわけ、紹明のほかに巨山志源という法嗣の存在を伝えているのは注目される。

また大応派（妙心寺派）の景聰興助（一四七六—？）は『虚堂和尚語録』に注釈をほどこして『虚堂録假名鈔』一〇巻をまとめ、天文三年（一五三四）の小青日（一〇月）に自ら奥書きを記しており、一般に『虚堂録鈔』ないし『虚堂録景聰應

断」とも称されているが、そこにも智愚の法嗣に関する記載が断片的に見い出せる。

さらに江戸中期の臨濟宗妙心寺派の学匠である大応派（妙心寺派）の無著道忠（照水堂・葆雨堂、一六五三—一七四四）は『虚堂和尚語録』の註釈書として『虚堂和尚語録梨耕』三〇巻を著しているが、巻三「行状」の「嗣法十数人」にて、

嗣法十数人。忠曰、正誤宗派所載、総二十人。報恩晋芝妙源・資福象先可観・豊岩竹窓宗喜・妙相字菴・定州宝業道源・日本建長南浦紹明・虎丘開極法雲・雪竇禹深一了・浄慈曇石如芝・東山葛盧浄軍・慈源友常禧会・南明秋巖徳新・万年東州惟俊・翠巖此軒如足・四明虚菴実・万寿潜溪妙広・仰山晦叟法光・明州無示可宣・平山本立・東洲瑞蔵主。今依此録旧解、更加者四人。石門無隱 偈頌解・壞衲無補 同上・日本禅興二世巨山源侍者 同・天寧雪簾慧明 法語解。

という註記をなしている。ここでは「正誤宗派図」を挙げて智愚の法嗣一人を列記した後に、『虚堂和尚語録』の旧解（古い註釈書）に基づくとして、さらに石門無隱・壞衲無補・日本禅興二世巨山源侍者・天寧雪簾慧明という四禅者をも法嗣の列に加えており、併せて二四名の名が挙げられている。この道忠の『虚堂和尚語録梨耕』にも随所に智愚の法嗣に関するそれぞれの考証が見い出せる。

このほか、江戸後期の茶人であった藤野宗郁（松陰亭）が文化年間（一八〇四—一八一八）に撰じた『墨蹟祖師伝書記』（単に『墨蹟祖師伝』とも）にも、巻上に「径山虚堂愚禅师法嗣」として「蘇州虎丘開極法雲禅师」の章と「杭州浄慈曇石如芝禅师」の章が存し、巻下に「宋杭州径山虚堂愚禅师法嗣」として「相州建長南浦紹明国師」の章が存しており、三禅者の事跡が簡略にまとめられている。

そこで以下、これら智愚の嗣法門人とされる禅者たちについて、中国と日本の禅宗燈史や宗派図をもとにその他の史料を加味しつつ、その事跡を詳しく論じてみることにしたい。ただ、すでに述べたように中国燈史などにおける虚堂門下の扱いは簡略にすぎ、ほかには史料が限られているため、彼らの活動を正確にとらえるのはきわめて困難である。本稿はあくまで現時点における一応の整理を試みた結果であって、今後に残された課題も多いことを断っておきたい。

なお、本稿において『虚堂和尚語録』を引用する際には、便宜上、『大正新脩大蔵経』巻四七「諸宗部」に収録される五山版の一〇巻本によって示すものとする。

(1) 『仏祖宗派図』と『正誤宗派図』については、諸本によって若干の異同が見られるが、本稿では駒澤大学図書館所蔵本によって示しておきたい。

(2) このほか、高麗国の無学自超（妙嚴尊者、溪月軒、一三二七—一四〇五）が所伝した『仏祖宗派之図』（『韓国仏教全書』第七冊に所収）は、元末明初の江南禅林の趨勢を知る上で貴重な宗派図であるが、そこにも「虚堂愚禅師」の法嗣として「閑極雲禅師」「宝葉源禅師」「靈石芝禅師」という三禅者の名が記されている。ちなみに自超は無準師範より雪巖祖欽（慧朗禅師、？—一二八七）・及庵宗信・平山処林（普慧性悟禅師、一二七九—一三六一）・懶翁慧勤（普濟尊者、江月軒、一三二〇—一三七六）・無学自超と次第する破庵派無準下の禅者であり、師の慧勤は入元して処林の法を嗣いで高麗に帰国している。また興味深いのは自超の『仏祖宗派之図』には「千光西禅師」「日本文（大）日禅師」「法燈心禅師」として明庵采西（千光房、一一四一—一一五五）・能忍（大日房）・無本覺心（心地房、法燈国師、一一〇七—一一九八）という三人の日本僧の名が記されていることであり、また「無学元禅師」「元菴寧禅師」として日本に渡来した無学祖元（子元、仏光国師、一一二六—一一八六）と元庵普寧（宗覚禅師、一一九七—一二七六）という無準下の二禅者の名も記されている。

『増集統伝燈録』に載る法嗣

はじめに明確に智愚の法嗣を伝えていると見られる『増集統伝燈録』巻四に載せられている閑極法雲・宝葉妙源・靈石如芝・竹窓浄喜・禹溪一了・葛廬浄軍という六人の禅者について、その事跡を他の諸史料などとの関連から整理しつつ、もっとも妥当と見られる表記によって論じてみることにしたい。如芝が智愚のもっとも晩年の法嗣であることから、この六人の記載も嗣法次第に沿って配列されているわけではないことが知られるが、便宜上、『増集統伝燈録』に示されている順序に従って、法嗣の事跡について考察を試みるものである。

(1) 閑極法雲

閑極法雲（問叟、一一二五？）の章を載せる燈史としては、『増集統伝燈録』巻五「蘇州虎丘閑極雲禅師」の章、『五燈会元統略』巻三上（巻五）「閑極雲禅師」の章、『繼燈録』巻四「閑極雲禅師」の章、『五燈嚴統』巻二一「問極雲禅師」の章、『祖燈大統』巻八三「蘇州府虎丘問極雲禅師」の章、『統燈正統』巻二二「蘇州府虎丘問極雲禅師」の章、『五燈全書』

卷五〇「蘇州虎丘間極雲禪師」の章、『統燈存裏』卷六「蘇州虎丘間極雲禪師」の章、『統指月錄』卷五「蘇州虎丘間極雲禪師」の章、さらに『措黒豆集』卷二「蘇州府邸徑間極雲禪師」の章などが存しており、何れも智愚の法嗣として立伝・見録されている。このように法雲の名は一樣に中国禪宗燈史に見い出されるのであって、まさに中国における虚堂門下を代表する嗣法門人であったと見ることが出来る。ただし、中国の禪宗燈史では何れも「間極雲」または「間極雲」と記すのみで、法諱の具名を欠いている。法諱の上字が「法」であったことは伝えられておらず、行実についても何ら詳しくは記していない。ただ、後に述べるごとく幸いにも法雲は師の智愚の「行状」を撰していること、その自筆の墨蹟が日本国内に現存していることなどから、法諱が法雲であったことが確認されるのである。

一方、日本撰述史料としては、室町期の『仏祖宗派図』には「承天開極法雲」とあるが、江戸初期の『正誤宗派図』四には「虎丘開極法雲」と記されており、住持地が別ながら法雲の名が載せられている。また景聰興島は『虚堂録假名鈔』卷二「婺州雲黄山宝林寺語録」で法雲について、

法雲八、号「無衣」、開極末上也、住「承天」(中略)法雲八、法嗣ト八見ヘズ。

と簡略に記しており、無著道忠も『虚堂和尚語録梨耕』卷五「宝林語録一」において、

法雲。溪曰、承天開極法雲、嗣「虚堂」。増統伝燈五 九丈。

と法雲について簡略な記載を残している。おそらく興島も道忠も限られた見聞の中では法雲の事跡を詳しく辿れなかったものと見られる。さらに『墨蹟祖師伝書記』卷上にも「蘇州虎丘開極法雲禪師」の章が存しているが、法雲その人の伝記としては詳しい情報は記されていない。このように法雲の道号なし字は開極と間叟であったことが知られるが、『虚堂録假名鈔』のみが伝えている無衣という別号が何に基づいているのかは定かでない。

この人の法諱が法雲であったことは確かであるが、道号については『増統伝燈録』や日本に残る墨蹟などが「開極」と記しているのに対し、後代の中国燈史になると「間極」と記されるようになっていく。字義からすると道号と法諱の關係は開雲に由来するものであるうから、道号は間極ではなく開極とすべきであろう。したがって、ここでは間極というのは開極の誤りで、後世に誤写されたものと見ておきたい。また別に日本に伝えられた法雲の墨蹟には「間叟」という表記や落款も存していることから、ここでは一応より古い史料や法雲自身の墨蹟に多く記された開極を道号として統一しつつ

も、別号として間叟とも称したと解しておきたい。

法雲の生年についても禅宗燈史などではまったく知られないが、幸いに後に示すごとく日本に伝存する墨蹟に記された年時と世寿の逆算によつて、南宋の嘉定八年（一二二五）の出生であつた事実が判明するから、師の智愚よりは三〇歳ほど年少であつたことにならう。また郷関についても『江湖風月集』に「四明開極雲和尚」として法雲の偶頌が収められており、「四明」の地名が付されていることから、四明すなわち明州（浙江省）の出身であつたことが知られるが、明州内の何れの県の出身なのか、俗姓は何であつたのか、など諸般の事情については残念ながら諸資料を通してても定かでない。師の智愚も同じ明州の象山県の出身であるから、おそらく法雲は同郷の智愚を慕つてその門に投じていることにならう。

法雲が最初に誰に就いて出家得度したのか、また具足戒を受けたのが何時であつたのか、智愚に参学するまで如何なる参学をなしたのか、その研鑽の過程についても定かでない。ただ、法雲が智愚に参随したのは比較的早かつたものらしく、『虚堂和尚語録』巻二「婺州雲黄山宝林禅寺語録」は「侍者惟俊・法雲編」とあるから、智愚が淳祐五年（一二四五）に婺州（浙江省）金華府義烏県南二五里の雲黄山宝林禅寺（双林寺）に住持していた頃には、すでにその門に在つて上堂語録を同門の東州惟俊とともに編集していることが知られ、淳祐五年には法雲は三一歳に当たつてゐる。また『虚堂和尚語録』巻四の「双林夏前告香普説」も「侍者法雲編」とあるから、これもやはり法雲が同じ宝林寺において侍者として聴聞編集したものである。中国における虚堂門下としては、法雲は法兄の宝葉妙源や無示可宣らに継ぐ初期の高弟であり、もっとも知られた禅者であつたといえよう。

その後法雲は智愚の席下で参学を深めるとともに、叢林の要職を歴任して智愚の接化を補助していたものと見られる。『虚堂和尚語録』巻四「真贊」には、

法雲首座請。

啣_レ嗚_レ啣_レ那得_レ知、寒酸看_レ不_レ上_レ眼、手面移_レ東_レ換_レ西、拱_レ良_レ工_レ手、破_レ衲_レ僧_レ疑。行_レ到_レ水_レ窮_レ处、坐_レ看_レ雲_レ起_レ時。

という首座（第一座）の法雲が智愚に請うた真贊が伝えられている。師が門人に頂相の贊を付するのがすべて嗣法を意味するとはいえないものの、この真贊は首座として立僧した法雲を法嗣として認めた際の作である。それが何時のことであつたのかは明確ではないが、法雲は智愚の席下で首座の要職を勤め、その接化を助けて重要な立場に立つたことが知ら

れ、智愚は法雲の法諱に因んで「行いて到る水の窮まる處、坐して看る雲の起る時」の語を示している。

そして、この間、杭州（浙江省）余杭県西北五〇里の径山興聖万寿禅寺においてか、首座として同門の宝葉妙源の徹底に助力しており、晩年の智愚にとって主要な高弟として重きをなしていたことが窺われる。その法雲が智愚とともに妙源を育成している消息については、妙源について述べる際に詳しく触れることにしたい。

ところで、大慧派の蔵叟善珍（一一九四—一二七七）の詩文集である『蔵叟摘菓』巻下「傍疏」には、

延福請_レ雲老_二疏。

三百年復遇_二会_レ禅刺史、鸞膠統_レ絃、十八人輪_レ不_レ識_レ字阿師、錐囊出_レ穎。吾宗宋甚、此事今無。某人、品題比_レ優曇花、爛熟如_二梨憚子。人前無_レ転智、還_レ罔象得_レ珠、紙上画_レ空圓、一_レ任画_レ蛇添_レ足。冷灰豆爆、寒谷春回。坡詩著_二紗籠_一掃_レ壁、直教_二神守_一護_レ姜峰。難_二席卷_一携_レ節、且看_二玉屏_一顏。

という疏文が存しており、年時は不明ながら延福寺に住持した雲老の消息を伝えている。延福寺とはおそらく智愚がかつて住持した明州昌国県東四〇里の方松山延福禅寺のことではないかと見られ、ここにいう雲老が法雲のことを指している可能性が高い。もし延福寺の雲老が明確に法雲のことであるとすれば、法雲は智愚との縁故から昌国県の延福寺に開堂住持し、入寺に際して善珍が諸山疏を撰していることになり、法雲が善珍とも何らかの関わりが存したらしい消息を窺わしめる。おそらく法雲が延福寺に開堂出世したのは智愚の生前のことと見られ、径山で首座の任を終えた直後のことが、あるいは径山で首座を勤める以前であったとも推測される。

咸淳五年（一二六九）一〇月に智愚がその生涯を終えているが、法雲は数年を経て師の一代の事跡をまとめて「行状」(単独には「虚堂和尚行状」か)を撰している。法雲は「行状」の末尾において、

咸淳十年十月十一日、新劄差住持慶元府清涼禅寺嗣法小師法雲謹状。

と自ら記している。法雲が智愚の「行状」を撰したのは、智愚が示寂して五年を経た咸淳一〇年（一二七四）一〇月二一日であったことが知られ、その当時、法雲は新劄差すなわち郡帖によって新たに明州慶元府城の清涼禅寺に住持していたことが判明する。『延祐四明志』巻一六「釈道攷上」の「在城寺院 禅院五」によれば、

万寿寺、在「東北隅大梁街」。唐咸通十三年、史君周景、遇捨「解字」以建、仍捨「田以贖」、賜「額慧燈」。宋開宝間重建。太平興国七年改崇寿。政和八年、改「広慧」。建炎四年燬、重建。嘉定十三年燬、即復。或謂「慧字從「心從「慧」、於「星皆火譏也」。改「万寿」。是日火環寺。而寺獨存。人咸異「之。皇朝至元十九年火、至大二年又火。

と記されている万寿寺が清凉寺のことである。清凉寺は一に清凉広慧禅寺と称し、明州府城の東北隅あるいは子城東南一里に存したとされ、法雲が住持していた頃は正式には万寿禅寺という名称で呼ばれていたとされる。いずれにせよ、清凉寺は明州の中心地に存した名刹の一つであり、郷里が明州であった法雲にとって住持として化導を敷くにはきわめて相応しい禅寺であったといえよう。智愚の「行状」において法雲は自ら「嗣法小師」と記しており、智愚の法を嗣いだ門人であったことを表明しており、若干ながら記載年時に問題となる箇所も存するものの、久しく智愚に随侍した参学眼をもつて纏め上げられた内容には貴重なものがある。

したがって、法雲の記した智愚の「行状」は咸淳五年（二月八日（成仏道日））に同門の宝葉妙源が後録を増補して「虚堂和尚語録」を編集刊行した時点ではいまだ撰せられていなかったわけであるから、当然、語録中には収められていなかったことになる。その後、日本で京都の京城山（九重山）万寿禅寺の住持であった大応派の絶崖宗卓（広智禅師？（一三三四））が「虚堂和尚新添」を追加して「虚堂和尚語録」を刊行した際に編入されている。現今、法雲が撰じた「行状」は智愚の足跡を知る上で唯一の伝記史料となつていふことを思えば、この史料が散逸することなく語録に編入された意義はきわめて大きなものがある。

ついで福岡市博多の石城山妙楽寺に所蔵される『石城遺宝』と京都東福寺の靈雲院に所蔵される『集古録』には、智愚の「虎丘十詠」の内容が全文にわたり記されているが、そこには法雲が記したものとて、

跋「虎丘十詠」。法雲。

先師虎丘十詠、往年司「蔵日」、禅悦遊戯耳。倒「指六十余載」、想「見當時」、笑翁会中、勝集如「雲」、廣唱者多矣。胡為此紙獨存。礼蔵主得「之。装背示「余。余炷「香拜誦、不「覺墮「淚。侍僧曰、老和尚順世、已二十年、師亦七十四矣、何憤情之如「是。遂謂「之曰、汝不「聞「孝子諱「節名「耶。礼師從「旁、研「墨蘸「筆、請「書「于軸後、以記「往事。余不「復辭。

至元戊子長至後十日、中吳蕭巖不肖法雲。「法雲」(方印)

という跋文が残されている。この法雲の撰した跋文は、田山方南編『禅林墨蹟拾遺』八六に影印が載せられており、大徳七年（一三三三）一〇月に前智門すなわち明州象山県の智門寺前住の肩書きて曹洞宗宏智派の雲外雲岫（妙悟禅师、一二四二—一三三四）が記した跋文とともに、実際に三昧居の所蔵とされて原本が現今に伝えられている。『禅林墨蹟拾遺』八六に載せられているものに基づいて判読して載せてみると、

先師虎丘十詠、往年司_レ藏日、禅悦遊戲耳。倒_レ指六十余載、想_レ見當時、笑翁会中、勝集如_レ雲、廣唱者多矣。胡為此紙獨存。礼藏主得_レ之、装背示_レ余。余炷_レ香拜読、不_レ覺墮_レ涙。侍僧曰、老和尚順世、已二十年、師亦七十四矣、何惨情之若_レ是。遂謂_レ之曰、汝不_レ聞_レ孝子諱_レ爺名耶。礼師從_レ旁、研墨離_レ筆、請_レ書_レ于軸後、以記_レ往事。余不_レ復辭。

至元戊子長至後十日、中吳蕭巖不肖法雲。「法雲」(方印)

といふことになる。法雲が智愚の「虎丘十詠」に跋文を撰したのは至元戊子すなわち至元二五年（二二八八）夏至（または冬至）の一日後のことである。法雲は自ら「先師の虎丘十詠は、往年、藏を司る日、禅悦遊戲するのみ。指を倒せば六十余載、当時を想い見るに、笑翁の会中、勝集すること雲の如く、廣唱する者多からん」と記しており、師の智愚が蘇州の虎丘山雲巖禅寺において十詠を残した年時を六〇余年前とほぼ正確に伝えている。さらに注目すべきは侍僧のことばとして「老和尚順世して、已に二十歳、師亦た七十四なり」といふ表現が見られることである。至元二五年は智愚（老和尚）が咸淳五年（一二六九）に示寂して丁度一年目に当たっており、その時点で法雲は七四歳であったことが知られるのである。これを逆算すると、法雲が出生したのは南宋の嘉定八年（一二二五）であったことが判明し、法雲は師の智愚より三〇歳あまり年少であったことになる。

ところで、このとき法雲は自ら「中吳蕭巖、不肖法雲」と署名しており、中吳すなわち蘇州の蕭巖寺の住持を勤めていたものらしい。一に「蕭巖」ないし「蕭敬」とも判読されているが、法雲の墨蹟そのものは明らかに「蕭巖」と記されているから、蕭巖寺と解するのが正しいであろう。そこで法雲が住持した中吳すなわち蘇州の蕭巖寺について調べてみると、『蘇州府志』卷四三「寺觀五」の「新陽泉」に、

蕭巖資福禅寺、在_レ東治東三百步。唐天祐三年、吳越鎮遏使劉瑋捨_レ宅建。後梁開平三年、改_レ崑福禅院。貞明五年重修。宋大中祥符元年、敕_レ改_レ慧巖禅院。元豐元年、建_レ法堂。紹興中、高宗御題曰_レ普照。乾道元年、賜_レ今寺額。以_レ奉_レ成穆皇后香火。元泰定二

年燬、後至元四年重建、至正末燬、明永楽九年重修。（後略）

と記されており、蘇州（江蘇省）新陽県治東三歩に存した薦殿資福禅寺がそれに該当しているものと見られる。新陽県の薦殿寺は蘇州でもかなりの大伽藍を有した名刹であったものらしく、法雲の住持する以前には同門に当たる宝葉妙源もこの寺に住持している。その後、元代中期に至って泰定二年（一三三五）に薦殿寺は火災に遭っており、その後も火災と重修を繰り返した消息が知られる。

ちなみにこのとき法雲を薦殿寺に訪ねた礼蔵主とは約翁礼という禅者であり、如何なる素性の人かは定かでないが、その後もこの人は多くの禅者の間を巡って「虎丘十詠」に跋文を得ており、大徳八年（一三〇四）一二月初めには法雲の法弟に当たる靈石如芝や静翁法塞からも跋文を得ている。法雲が「礼蔵主、之れを得て、装背して余に示す。余、香を炷きて拝読し、覚えず涙を墮す」と述べているところに、「虎丘十詠」を目の当たりにして先師智愚に対する法乳の恩を新たに感じて覚えず涙した法雲の感慨が窺われよう。

ところで、『増集続伝燈録』など禅宗燈史によれば、法雲は同じ蘇州（平江府）にある虎丘山（虎邱山）の雲巖禅寺に住持していることが知られる。ただ、法雲がこのとき明州の清涼寺や蘇州の薦殿寺から直ちに十刹位の虎丘山にまで陞住したとは見がたい。この点、『仏祖宗派図』においては「承天閑極法雲」として承天寺を法雲の住持地として挙げてゐる。十刹位の虎丘山に住持する前に、同じ蘇州呉県西北にある甲刹の一である承天能仁禅寺（双義寺）に住持したとすることは、おそらく史実であろう。ちなみに「虎丘十詠」とその跋文を載せる「石城遺宝」に所収される「遺宝集中諸師略伝」には「法雲、字閑極、嗣法虚堂愚、住虎丘・承天諸刹」という簡略な法雲の足跡を伝えており、やはり法雲が虎丘山のほかに承天寺に住持した消息を記している。蘇州の承天寺については『呉郡図經統記』巻中「寺院」に、

承天寺、在長洲県西北二里。故愚是梁時陸僧瓊故宅、因親祥雲重所覆、請捨宅為重雲寺。中誤書為重玄、遂名之。章蘇州登寺閣詩云、時暇陟雲、古候切一字、晨霽澄、景光始見、吳都大、十里鬱蒼蒼山川、表明麗湖海吞大荒。即此寺也。錢氏時、又加二繕畫、殿閣崇麗、前列怪石。中有別院五、曰永安、曰淨土、禅院也、曰宝幢、曰龍華、曰円通、教院也。所謂宝幢者、旧曰薬師院。昔有錢唐僧道賢者、作紫壇香百宝幢、覆以殿宇、翰林吳承旨、与当時諸公凡二十三人、為之贊云。又有聖姑廟、梁時陸氏之女吳人、於此祈有子頗驗。

永安禪院、在承天寺垣中、旧号弥陀院。初太宗朝以藏經鑲本、有餘杭道原禪師者、詣闕借版印造、景德中又以太宗御製四表、併賜之。道原既歸藏于此院、大中祥符八年、又編修景德僧錄以進、勅賜今額、每歲度一僧。今為禪院。と記されており、また『蘇州府志』卷三九「寺觀」の「吳県」にも、

承天能仁禪寺、在臯橋東。相伝、梁衛尉卿陸僧瑒宅。因觀祥雲重屋所覆、請捨宅為重雲寺。嘉省誤書為重玄、遂名之。唐為広徳重玄寺。錢氏時、又加繕葺、殿閣崇麗、前列怪石。宋初改承天、宣和中禁寺觀、橋梁名不得用天聖皇王等字、又改能仁。元並存旧額、稱承天能仁。以寺前有土阜、亦名双義寺。寺有無量壽仏銅像、高丈餘。盤灣大聖祠・靈姑廟・万仏閣・經樓・鐘樓。至順間悉燬於火、至三元閣復新之。至正末、張士誠擄為宮。明初復為寺、僧綱司在焉。(下略)

としていくぶん詳しい変遷が記されている。これらによれば承天寺は無量壽仏(阿弥陀仏)を本尊とし、寺の前に二つの土阜が存していたことから双義寺の俗称でも親しまれていたとされ、寺内には大聖祠・靈姑廟・万仏閣・經樓・鐘樓など諸堂が乱立していたさまが窺われる。また承天寺の寺域(垣中)には永安院(古くは弥陀院)と浄土院という二禅院と宝幢院・龍華院・円通院という三教院が存したとされ、とくに永安禪院は大藏經の印版をもって知られ、杭州余杭県出身の永安道原が法眼宗の禪者として、『景德伝燈録』三〇巻を編集刊行した地として名高い。おそらく法雲は状況的に十刹位の虎丘山に住持する以前に同じ蘇州に存した甲刹の承天寺に住持しているものであろう。

一方、『扶桑五山記』一「大宋国諸寺位次」の「甲刹」には、

承天。蘇州。平江長州県。能仁寺。開山伝宗禪師。双峨峯・碧玉盤・万仏閣。

と載せられており、南宋末期から元代には承天寺が甲刹の一つに列していること、禪刹開山が北宋後期に雲門宗の雪竇重顯(明覚禪師、九八〇—一〇五二)の法嗣として活躍した承天伝宗であったこと、寺域に双峨峯・碧玉盤・万仏閣が存したことなどを伝えている。法雲が承天寺に住持していたのが何時なのかは明確ではないが、かつて智愚の法弟で法雲の法叔に当たる石帆惟衍も住持しており、また同じ松源派の石林行肇(一一二〇—一一八〇)なども住持している。法雲が承天寺に住持したとすると、おそらく元朝によって国が統一されて以降のことと見られるが、それが薦蔽寺より先であったのか後であったのかは定かでない。

ついで法雲は晩年に同じ蘇州の虎丘山雲巖禪寺に住持しているわけであるが、『吳郡図経統記』巻中「寺院」によれば、

雲巖寺、在長洲西北九里虎丘山。即晋東亭、獻穆公王珣及其弟珉之宅。咸和二年、捨建精廬、於劍池、分爲東西二寺、寺皆在山下。蓋自會昌廢毀後、人乃移寺山上。今東寺皆爲民囑、西寺半爲檜蕪矣。寺中有御書閣、官厅、白雲堂、五聖堂、登覽勝絕、又有陳談議、省華、王翰林、禹偁、葉少列、參、蔣密直、堂、真堂。寺前有生公講堂、乃高僧竺道生談法之所。旧伝生公立、片石以作聽徒、折松枝而爲談柄。其虎跑泉、陸羽并見存。比歲、琢石爲觀音像刻經石壁、東嶺草堂、亦爲佳致。惜已廢壞。

と記されており、また『吳郡志』卷三十一「郭外寺」にも、

雲巖寺、即虎丘山寺。晋司徒王珣及弟司空王珉之別業也。咸和二年、捨以爲寺。即劍池、而分東西。今合爲一寺之勝、聞天下。四方遊客過吳者、未有不訪焉。余見虎丘山門。

と簡略な記事が存している。『扶桑五山記』一「大宋國諸寺位次」の「十刹」には、

虎丘、蘇州平江府雲岩禪寺。開山明教大師。劍池、海涌峯、生公臺、看經室、千人岩、試劍石、點頭石、致爽閣、方丈。

と伝えられている。虎丘山は蘇州吳県（古くは長洲縣）西北七里に存し、山中には雲巖禪寺（虎丘寺）が建立されており、法統の遠祖である虎丘紹隆（瞌睡虎、一七七—一三六）が住持したことで名高い。南宋末期から元代において雲巖寺は禪宗十刹の第九位に列せられており、蘇州でももっとも知られた名刹であったといつてよい。

ところで、田山方南編『統禪林墨蹟』三〇には、京都花園の正法山妙心寺の塔頭である桂春院に所藏される墨蹟として、

來問云、久求真此道、爲知解所障、未有多少分會得、欲知入道方便。早錯了也。求悟入底、便是障道知解了也。更別有甚麼知解。知解從何處而來。被障者亦是阿誰。向遮裏看取去。生死即涅槃。無迷可破、煩惱即菩提、無悟可得。万法唯一心、內無解脫可得、心外無別法、亦無知解可障。故古德云、学道人、一念計生死、即落魔道、一念起諸見、即落外道。是此古人、以知解爲僞侶、以知解爲方便。於知解上行平等慈、於知解上作諸仏事、底様子也。只爲他向語路上討法、向文字中求証、故未到遮箇田地。夫解脫者、行住坐臥無非是道、悟法者、縱橫自在無非是法。要知此事、不得作有無會、不得作道理會、不得向意根下思量卜度、不得向揚眉瞬目處採根。但向十二時中四威儀内、時々提撕、時々覺。如何是本來面目。如是行也提撕、坐也提撕、提撕來提撕去沒滋味。那時便是好處。羃地打破疑團、如在羅網中跳出、所有諸仏心法、諸祖公案、古今差別因緣、無不了了々。有不動一絲毫、便攬長河作酥酪、底活三昧。

虎丘比丘法雲書。「法雲」(朱方印) 「開極」(朱方印)

という法雲が書いた法語が伝えられている。これは法雲が蘇州虎丘山の住持として門人に示したものであることが知られ、撰述した年時こそ不明ながら、晩年に至って記したものでないかと推測される。この墨蹟はかなり長文の法語であり、法雲の禅風を知る上でも貴重なものがあるうから、以下、本文の内容のみを書き下して示しておきたい。

来たりて問うて云く、「久しく此の道を求覓むるも、知解の爲めに障えられて未だ少分の会得有らず、入道の方便を知らんと欲す」と。早や錯まり了れり。悟入を求むる底、便ち是れ障道知解し了れり。更に別に甚麼の知解が有らん。知解は何処より来たる。障らるる者は亦た是れ阿誰ぞ。遮裏に向かつて看取し去らば、生死は即ち涅槃にして、迷いの破るべき無く、煩惱は即ち菩提にして、悟りの得るべき無し。万法唯一心にして、内に解脱の得べき無く、心外無別法にして、亦た知解の障るべき無し。故に古徳云く、「学道の入、一念に生死を計らば、即ち魔道に落ち、一念に諸見を起さば、即ち外道に落つ」と。是れ此の古人、知解を以て僞侶と爲し、知解を以て方便と爲す。知解上に於いて平等の慈を行じ、知解上に於いて諸の仏事を作す底の様子なり。只だ他の爲めに語路上に向かつて法を討ね、文字中に向かつて証を求む、故に未だ遮箇の田地に到らず。夫れ解法とは、行住坐臥、是の道に非ざる無く、悟法とは、縦横自在、是の法に非ざる無し。此の事を知らんと要せば、有無の会を作すことを得ざれ、道理の会を作すことを得ざれ、意根下に向かつて思量卜度することを得ざれ、揚眉瞬目の処に向かつて採根するを得ざれ。但だ十二時中・四威儀内に向かつて、時々提擲し、時々拳覺せよ。如何なるか是れ本来の面目。是の如く行きても也た提擲し、坐しても也た提擲し、提擲し来たり提擲し去りて滋味没し。那時便ち是れ好処。羶地に疑团を打破し、如し羅網中に在りて跳出せば、所有る諸仏の心法・諸祖の公案・古今の差別因縁、了々ならざるは無し。一絲毫を動かさざること有らば、便ち長河を攪して酥酪と作す底の活三昧なり。

おおよそ、以上のように訳されようが、この墨蹟は前半が欠落しているものと見られ、誰に付与した法語なのかも定かでない。その中で法雲は知解分別や文字概念によっては悟道に到ることはできないことを強調しており、十二時中に行住坐臥において有無の会をなすことなく、常に「如何なるか是れ本来の面目」と工夫すべきことを説いている。

このほかに『墨蹟之写』一一「元和第三丁巳、四冊之内下」によれば、前虎丘の肩書きで法雲が賢知客に付与した「四睡図画賛」として、

千銅公境、万鉄奉化。無_レ如_二陸詔村、所_三以家醜不放出。乳峰道、人斑虎斑、是_レ許_二父尙_一耶。用_二家伝印、賢知客試書_一一隻眼。

前虎丘問叟法雲。「金仁」〔方印〕「法雲」〔小方印〕「閑極」〔方印〕

という賛語が伝えられている。「四睡図」というのが如何なるものであったのかは定かでないが、法雲の賛語からすると、明州奉化県の雪竇山資聖禪寺（乳峰）に関わる画題であったものと見られる。ここでは、法雲は方印では閑極の道号を用いているが、自筆の箇所では「問叟」と著名している。また法雲はこのとき虎丘山の住持職を退いて前住位（東堂）の肩書きで山内に居していたものと見られ、賢知客が日本僧なのか否かも定かでないが、求めに応じてなした作であるから、まさに最晩年の遺墨ということになる。

同じく『墨蹟之写』一九「元和六、二冊之内下」には、やはり法雲の「寒山図画賛」として、

空王仏会出如定、国清寺拈菜担喫、五蔵仏亡慈慧多、有口只堪高挂壁。

問叟法雲。「法雲」〔方印〕（小方印）（方印）

という賛語も伝えられている。これは台州天台県の天台山国清禪寺において国清三賢として名高い寒山を題材とした図に付した仏祖賛であり、この墨蹟が何れの寺院で書されたものかは定かでないが、ここでも法雲は「問叟」を使用しているから、やはり虎丘山に住持中か退住して後に書した墨蹟であったものと見られ、おそらく方印のいま一つは閑極であったものと推測される。これらによって、法雲が閑極のほか問叟とも称していたことが知られ、後代の史料が法雲の道号を閑極と伝えているのもまったく根拠のないものでもなかったことになるうか。これらはともに法雲の墨蹟として日本に伝来していたものであり、少なくとも江戸初期までは何れかに所蔵されていたらしいことが知られる。

さらにいま一つ『新編江湖風月集略註』巻下の「四明閑極雲和尚」の註記には「虎丘閑極法雲、嗣虚堂。又住越之東山」という記載が存しており、法雲が虎丘山などのほかに越州（紹興府）の東山に住持したことを伝えている。一に東山とは虎丘山の別称としての東山の意ではないかとも見られるが、蘇州の虎丘山と越州の東山を別に記していることから、『新編江湖風月集略註』の編者は法雲が虎丘山の住持を勤めた後かに別に越州の東山にも住持したと解しているわけである。ここにいつ越州の東山とはかつて楊岐派の圓悟克勤（仏果禪師 一〇六三—一一三五）の法嗣である東山覺が住持した禅刹であり、あるいは法雲が晩年に虎丘山などの大刹の住持を辞し、越州の東山に退住した消息をいうものであるうか。『嘉泰会稽志』巻八「寺院」の「上虞県」には、

国慶禅院、在「東西南五十四里」。唐元和四年、安禅師建。咸通九年、賜「今額」。即謝太傅故宅也。とあり、同じく卷九「山」の「上虞県」には、

東山、在「東西南四十五里」。晋太傅謝安所居也。一名謝安山。歸然特立於衆峯間。

と記されている。これによれば、越州上虞県西南四五里に東山（謝安山）が存し、晋代に太傅の謝安（字は安石、諡は文靖、三二〇—三八五）が居住していた地とされ、その東山の一角と見られる上虞県西南五十四里の地に古く唐の元和四年（八〇九）より国慶禅院が建立されていたことを伝えている。

ところで、元代中期に日本に渡來した松源派の明極楚俊は、『仏日焰慧明極禪師語録』卷一、「仏日焰慧明極禪師建長禪寺語録」の「解夏小參」において、

復拳、南嶽大蘇於「終夏」時發嘆曰、「一夏已過、並無所得、放身之間、忽然大悟。這箇公按、古今多少人定當不得。惟東山開極老叔着語云、山色雨中、見「泉色秋」。後聞道得一半、建長這裏不然。但道、開池不待月、池成月自來。二人着語、還有「優劣」也無。具眼者辨取。

と述べており、南嶽大蘇の、「一夏已に過ぎて、並びに所得無し、放身の間、忽然として大悟す」のことは、対する法雲の「山色雨中、泉を見るに色秋なり」という着語を引用している。ここで楚俊は法雲を「東山開極法叔」と尊称しており、法雲の住持地を東山と記すとともに、法叔として位置付けている。東山が虎丘山を指すのであれば、「虎丘開極法叔」と記したはずであり、ここでも法雲が虎丘山とは別に東山にも住持したことを表現した内容と見られる。また、「開極老叔」と尊称したのは、楚俊が法雲と同門に当たる竹窓淨喜のもとで得度を受け、同じ松源派の虎巖淨伏（天瑞老人、仏慧定智禪師、？—一三〇三）の法を嗣いだ因縁にちなむものであり、実際には法雲の方が淨喜より法兄に当たることから、「開極老伯」と称すべきなのかも知れないが、一般的に通用する老叔の尊称を用いたものであろう。

ところで、楚俊は、『仏日焰慧明極禪師語録』卷二、「仏日焰慧明極禪師建長禪寺語録」の「普說類」の「告香三転語」（告香普說）において、

山僧初參「木禪彬和尚於九峰吉祥」。彼処号「小天童」、叢林極整齊。在那裏「住三年、不「出」僧堂「坐禪時」、每見「火塊」在「函櫃」上「擺去」、又見「白光滿」虚空、「眼前不「見」有「屋」、不「見」有「虚空」。瀟々地開「眼也見」、合「眼也見」。即上「方丈」、問「其所由」。老和尚曰、

非好境也、此魔境也、你若認真、即落魔見。從此不顧他。一日問和尚、如何是仏。和尚勸声一喝。直得、魔消膽喪、虚空大地如二团火。自此已後、但覺身体輕安、日逐履踐处、与尋常迥別。雖然如是、依旧未明。未後句、見山不是山、見水不是水、見一切物、不是一切物、坐在法塵裏、不能透脱。又一日、法堂前見和尚、乃指窓日問云、日照窓耶、窓照日耶。罔不知所答、信口道曰、本不明窓本無照。和尚深肯之。後同法普教常叟上天童、參月坡和尚、与常叟連單。此人孤硬人也、夜禪不例、吾亦如之。一日看虚堂師公語、普說中有云、兄弟參禪無進作者、病在於何、病在自大小不得处、病在一師一友处。從此發心、遍參知識。凡有所得、不敢証耀於人。如雪山曇和尚・竜石敏和尚・絶照鑑和尚・閑極雲和尚・栢堂益和尚・梅間福和尚・千峰苑和尚、皆有語句機緣相契者、出湘西北山住。

と述べて、自らの参学の過程を振り返っている。木禪彬和尚とは無準師範の高弟のひとり木禪彬のことであり、蘇州呉県の承天能仁禅寺に住持したことが知られているが、楚俊が木禪彬に参じたのは明州昌国東北六〇里の九峰山吉祥院（小天童）であったとされ、両者の間で交わされた機縁の問答が記されている。その後、法普の常叟・舜とともに明州鄞県東六〇里の天童山景德禅寺に上り、破庵派無準下の月坡普明に就いて参禅している。普明は無準師範の高弟の一人であり、法兄の環溪惟一（一一〇二—一一八〇）の後席を継いで天童山の第四五世となった禅者であるから、普明が天童山で活躍していたのは元朝が南宋を滅ぼした直後のことである。しかも天童山で参学する傍ら、楚俊は虚堂智愚の普説のことは見て遍参を志したとされ、雪山曇・竜石敏・絶照鑑・閑極雲・栢堂益・梅間福・千峰苑ら多くの禅者のもとを歴参したことを伝えており、その中に法雲の名も載せられている。

この中で雪山曇とは無準下の断橋妙倫（松山子、一一〇一—一一六一）の法嗣で『禅門宗要』一〇巻を残したとされる雪山祖曇のことであり、明州象山東南八〇里（または西南五〇里）の新安寺に住持したことが知られている。竜石敏については嗣承が定かでないが、絶照鑑とは大慧派の物初大観（一一〇一—一一六八）の法嗣である絶照国鑑（絶像とも）のことであり、万寿寺（明州府城東南隅の万寿禅寺か）に住持したことが知られている。また栢堂益とは大慧派の東叟仲穎（？—一一七六）の法を嗣いだ栢堂元益のことであり、明州華化県東北五里の岳林崇福禅寺（布袋道場・大中禅寺）に住持したことが知られている。梅間福については嗣承が定かでないが、千峰苑和尚とはおそらく楊岐派の癡鈍智穎から伊巖懷玉とつづく千峰如琬のことと見られ、如琬は福州（福建省）侯官県西一八〇里の雪峰山崇聖禅寺に住持したことが知られている。

ちなみに『江湖風月集』巻下には、「四明閑極雲和尚」とともに、「雪山曇和尚」「絶像鑑和尚」「杭州千峯琬和尚」「温州楫堂益和尚」の偶頌が収められており、末尾には戊子夏すなわち元の至元二年（一二八八）の夏に千峯如琬が記した跋文が付されている。楚俊が参学した諸禪者は南宋最末期から元代初期かけての動乱期に活躍した臨濟禪者であつて、法雲を含めていづれも偶頌の名手としても江南叢林に名を成した人であつたものと見られる。

法雲がいつ示寂したのかは定かでないが、至元二年（一二八八）には蘇州の薦蔽寺の住持を勤めており、その後と同じ蘇州の承天寺や虎丘山に遷住し、さらに住持職を退いて隠閑していた期間も存したとすると、およそ至元年間（一二六四—一二九四）の末頃から大徳年間（一二九七—一三〇七）の初め頃までは存命であつたものと見られる。

つぎに法雲が後世に残した上堂および頌古・偈頌などを整理しておきたい。はじめに問題とすべきは禪宗燈史に載せられている法雲のことばであるが、明代初期の『増集統伝燈録』巻五「蘇州虎丘閑極雲禪師」の章には、法雲のものとして、

上堂。一茎草上明_レ宗、面壁老_レ髻、多_レ虚少_レ実。三転語中定_レ旨、鷲峰贖_レ祖、暗展明_レ収。全身奉_レ重底、無_レ一点仏法身心、撥_レ無因果_レ底。具_レ無量殊勝妙義。者裏_レ転得_レ一步、便見皇都城裏、人物_レ駢闐、管弦_レ雜_レ迷、落星石畔、山明水秀、漁唱_レ樵歌。可_レ謂、羲皇上人成_レ仏子住。然_レ雖如_レ是、猶_レ墮_レ功_レ助。量外_レ一機、如何_レ拈_レ唱。擊_レ私子。徹底潮_レ収_レ青海尾好、看月上長珊瑚上_レ崑。多岐亡_レ羊多言喪_レ道、薰_レ刹相逢何曾欠_レ少。豈不_レ見、天台桐柏、宮廬道士、年一百二十歲、撰_レ召行法極好。若也不_レ信、問_レ取洞庭山水仙太保。

上堂。南薰涼_レ菴_レ葡萄香、日長無_レ事_レ聾_レ胡床、乾坤_レ穉_レ穉、身世_レ糟_レ糠、蒼苔_レ滿地無_レ人到、付_レ与_レ蟬_レ聲、送_レ夕陽。

上堂。拳_レ菜山久不_レ上_レ堂、院主_レ白_レ云、大衆久思_レ和尚示_レ誨_レ公案。師云、當時若_レ道_レ得_レ箇_レ起_レ動_レ和尚_レ管_レ取、菜山_レ婦_レ方丈_レ不_レ得。

というわずかに三上堂が載せられているにすぎない。最初の上堂は法統の祖である虎丘派（松源派祖）の松源崇嶽（鷲峰贖祖、一一三三—一二〇二）の三転語すなわち「松源三転語」に因んでなされた示衆であり、「洞庭山の水仙太保に問取せよ」とあるから、蘇州の洞庭山の情報に詠じられている。つぎの上堂は初夏の心地よい夕暮れに禅床に坐して蟬の聲に悠然としてゐるさまが詠われている。最後のものは青原下の菜山惟儼（弘道大師、七四五—八二八）の「菜山陞座」の古則に対して示した見解である。

一方、明代後期に編纂された『五燈会元統略』巻三上「閑極雲禪師」の章では、

閑極雲禪師、拳_レ莊_レ宗_レ酬_レ価_レ因_レ縁_レ頌_レ曰、君王_レ宝_レ自_レ難_レ酬_レ価、興化_レ何_レ曾_レ敢_レ借_レ看、天地_レ既_レ無_レ私_レ蓋_レ載、至_レ今_レ留_レ得_レ鎮_レ中_レ原。

という「莊宗酬価」の古則に対する頌古一則のみが載せられており、『統指月録』巻五「蘇州虎丘間極雲禪師」の章もこの頌古を載せている。さらに『繼燈録』巻四「閑極雲禪師」の章においては、『五燈会元統略』と同じ頌古のほかに、

又頌下黄檗在塩官殿上礼仏、唐宣宗問不著レ仏求レ曰、轟雷掣電雷全機、正是潜龍熟睡時、忽地夢回春恨断、曉風吹雨過前谿。

という「黄檗在塩官殿上礼仏、唐宣宗問不著仏求」の古則に対する頌古が載せられている。

一方、『五燈厳統』巻二「間極雲禪師」の章には、

間極雲禪師、拳レ虚堂三転語、頌曰、縫却虚空算尽沙、針頭画地是生涯、改頭換面無人見、幾度春風吹落花。

として師の智愚の「虚堂三転語」に対する頌古が載せられており、法雲が智愚の機関を積極的に使用していたらしい消息を窺わしめる。

また『統燈正統』巻二「蘇州府虎丘間極雲禪師」の章と『祖燈大統』巻八三「蘇州府虎丘間極雲禪師」の章と『五燈全書』巻五〇「蘇州虎丘間極雲禪師」の章と『統燈存彙』巻六「蘇州虎丘間極雲禪師」の章には、先の「莊宗酬価」の古則に対する頌古とともに、

拳陸巨問南泉、弟子家中一片石、也曾坐也曾臥、擬鑄作仏得麼。泉曰、得。巨曰、莫不得麼。泉曰、不得因縁。頌曰、坐臥曾經幾度春、半封苔蘚半籠雲、無レ稜無レ縫難レ提レ掇、空把肝腸說向人。

という「陸巨坐臥」の古則に対する頌古をも載せている。これらを通して窺うに、法雲は偈頌が得意で、頌古を多く残したらしい消息が知られる。

しかも実際に宋・元代の禅僧たちの頌古を集大成した『禅宗頌古聯珠通集』には、元代に紹興路（浙江省）山陰県南三〇里の天衣万寿禅寺（法華山天衣寺）の住持であった魯庵普会が増収した部分に「閑極雲」として法雲がなした頌古がかなり収められている。以下、それらを順次に列記しておきたい。はじめに巻一「世尊機縁」には釈尊（世尊）に関するものとして、

世尊初於臘月八日明星出時、忽云、奇哉一切衆生、具レ有如來智慧德相、但以妄想執着、不能証得。

輕_レ金輪位_二重_一草座、金彈換_レ人泥彈丸、末世衆生心眼巧、明星空照雪山寒。

といふ二月八日(仏成道日)の「世尊成道」にちなむ頌古が存している。

つぎに巻五「大乘経偈之余」には大乘經典に関するものとして、

法華経 如来如実知見三界之相、無_レ有_レ生死若退若出、亦無_レ在世及滅度者。非_レ実非_レ虚非_レ如非_レ異、不_レ如_二三界見_一於_二三界_一。如_レ斯之事、如来明見無_レ有_二錯謬_一。

火盧風鬻水漬根、石辺尚有_二旧苔痕_一、化工肯未_レ随_二寒暑_一、又_レ蒙_二清香_一為_二返魂_一。

と鳩摩羅什訳「妙法蓮華経」巻五「如来寿量品」の「不如三界」に対する頌古が存している。同じく巻五「大乘経偈之余」には、

金剛般若経。一切有_レ為_レ法、如_レ夢幻泡影、如_レ露亦如_レ電、心_レ作_レ如_レ是觀。

作_レ事存_レ心實要_レ精、不_レ精終是不_レ通_二雲_一、棋逢_二絶処_一著_レ方妙、梅到_二寒時_一香愈清。

といふ鳩摩羅什訳「金剛般若波羅蜜経」の末尾に載る「一切有_レ為_レ法」に対する頌古も残されている。

さらに巻六「祖師機縁」の「西天諸祖」には、

迦葉、因阿難問、世尊伝_二金襴_一外、別伝_二何物_一。迦葉召_二阿難_一。難応諾。迦葉曰、倒_二却門前刹竿_一著。

龍弟常常在_二待辺_一、伝_二金襴_一外問_二何伝_一、自家兄弟無_二多事_一、只道門前倒_二刹竿_一著。

として摩訶迦葉と阿難の「迦葉倒却刹竿」の古則に対する頌古が載せられている。

ついで巻八「祖師機縁」の「東土旁出諸祖」には、

国_一、因唐代宗詔至_二闕下_一、親加_二礼敬_一。一日師在_二大内_一、見_二帝来_一乃起立。帝云、師何以起。師云、檀越何得_レ向_二四威儀中_一見_二貧道_一。万乘君王_一国師、尋常不_レ離_二四威儀_一、山長水遠空相憶、黄葉吹_レ風人未_レ帰。

として牛頭宗の径山法欽(道欽、国一大師、七二四—七九二)と唐の代宗(在位は七六二—七七九)による問答にちなむ頌古が残されている。

また巻九「祖師機縁」の「北宗」には、

終南山惟政禪師、因唐文宗大和中嗜蛤蜊。一日御饌中有擊不_レ張者、帝以為異、焚香禱之。俄變為菩薩形、梵相具足。即貯以金粟檀香合、覆以美錦、賜興善寺、令衆僧瞻禮。因問羣臣、斯何祥也。或言、太一山有惟政禪師、深明佛法、博聞強識。帝即令召至、問其事。師曰、臣聞物無_レ虛心、此乃啓陛下信心耳。契經曰、心以_レ此身、得度者、即現_レ此身、而為說法。帝曰、菩薩身已現、且未聞說法。師曰、陛下觀_レ此、為常耶、非常耶、為信耶、非信耶。帝曰、希奇之事、朕深信焉。師曰、陛下已聞說法、竟。皇情大悅、詔天下寺院、各立觀音像、以答殊休。

蚌蛤之中有_レ応身、更言說法亦非_レ真、補陀大士唐天子、橫眼人無_レ隔_レ宿恩。

として北宗の終南山惟政（七五七 八四三）と唐の文宗（在位は八二七 八四〇）にちなむ古則に対する頌古が存している。

また卷一三「祖師機縁」の「六祖下第三世之四」には、

亮座主講_レ經論、因參_レ馬祖。祖問、見說座主大講_レ得_レ經論、是否。師曰、不敢。曰、將_レ甚麼講。師曰、將_レ心講。曰、心如_レ工伎兒、意如_レ和伎者、爭解講得。師抗声曰、心既講不_レ得、虚空莫_レ講得。磨曰、却是虚空講得。師不肯便去、將_レ下_レ階。祖召曰、座主。師回首、祖曰、是甚麼。師豁然大悟、便禮拜。曰、這鈍根阿師、禮拜作麼。師曰、某甲所講經論、將_レ謂無_レ人及得、今日被_レ大師一問、平生功業一時冰積。礼謝而退、乃隱_レ於洪州西山、更無_レ消息。

却是虚空講_レ得_レ經、雨花狼藉曉風清、賺_レ人深入_レ西山後、多少闍梨又錯聽。

として西山亮座主と南嶽下の馬祖道一（大寂禪師、七〇九 七八八）の「亮座主參馬祖」（「亮隱西山」とも）の古則にちなむ頌古が存している。

卷一四「祖師機縁」の「六祖下第三世之五」には、

居士（龐蘊）有_レ偈曰、有_レ男不_レ婚、有_レ女不_レ嫁、大家團樂頭、共說_レ無_レ生話。
男兒懶墮女無_レ良、多口翁翁快口娘、討_レ尽便宜不_レ知_レ足、何曾有_レ箇會_レ無_レ生。
丹靄一日訪_レ龐公、見_レ女子取_レ菜次、師曰、居士在否。女放下_レ菜籃、飲_レ手立。師又問、居士在否。女便提_レ籃去。師回、須臾公帰。
女拳_レ前話。公曰、丹靄在麼。曰、去也。公曰、赤土塗_レ牛迹。

唠嘈口着是丹靄、飲_レ袂携_レ籃已答_レ他、要_レ得_レ家私無_レ漏泄、帰来莫_レ說_レ与_レ爺爺。

として龐蘊（道玄、？ 八〇八）にちなむ「龐居士偈」と、青原下の丹靄天然（智通禪師、七三九 八二四）と龐蘊およびそ

の娘の靈照の問答にちなむ「靈照菜籃」の古則に対する頌古が存している。

卷一五「袒師機縁」の「六袒下第四世之一」に、

瀉山上堂云、仲冬嚴寒年年事、覺運推移事若何。仰山進前叉手而立。師曰、我情知、汝答這話不得。却顧香巖。巖曰、某甲偏答得這話。師躡前問。巖亦進前叉手而立。師曰、類遇寂子不令。

一箭暗穿紅日影、双鷗已落碧雲端、不知李広無玄妙、多向弓弦發処看。

として南嶽下（瀉仰宗）の瀉山靈祐（大円禪師、七七一—八五三）とその法嗣の仰山慧寂（智通禪師、八〇三—八八七）・香巖智閑（慶燈禪師、？—八九八）にちなむ「仰山進前叉手」の古則に対する頌古が存している。

卷一六「袒師機縁」の「六袒下第四世之二」には、

黄蘗一日在塩官、殿上礼仏次、時唐宣宗為沙弥。問曰、不著仏求、不著法求、不著僧求、長老礼拝、当何所求。師曰、不著仏求、不著法求、不著僧求、常礼如是事。弥曰、用礼何為。師便掌。弥曰、太廳生。師曰、這裏是甚麼所在説應説。綱隨後叉掌。

轟雷掣電奮全機、正是潜龍熟睡時、忽地夢回春恨斷、曉風吹雨過前溪。

黄蘗因裴相国鎮宛陵、建大禅苑、請師說法、以師酷愛旧山、還以黄蘗名之。公一日拓一尊仏於師前、跪曰、請師安名。師召曰、裴休。公応諾。師曰、与汝安名竟。公礼拝。

土木形骸權号仏、呼来喚去強名誰、要知箇裏難安立、相国須当大姓裴。

宣州刺史陸巨大夫、或称侍御、或称中丞、問南泉、弟子家中有二片石、有時或坐或臥、如今擬鑄作一尊仏、還得麼。泉云、得。大夫云、莫不得麼。泉云、不得不得。

坐臥曾經幾度看、半封苔蘚半籠雲、無稜無縫難提掇、空把肝腸説向人。

として三古則に対する頌古が存している。最初の二則は南嶽下の黄蘗希運にちなむものであり、唐の宣宗（在位は八四六—八五九）が沙弥であったときに交わした「宣宗礼仏」の古則に対する頌古と、宰相の裴休との間で交わした「裴休安名」の古則に対する頌古である。また陸巨（景山）と南嶽下の南泉普願（王老師、七四八—八三四）にちなむ「陸巨坐臥」の古則に対する頌古が存している。

卷一九「祖師機縁」の「六祖下第四世之六」には、

趙州問「婆子、甚麼処去。曰、偷「趙州筍」去。師曰、忽遇「趙州」又作麼生。婆便与「一掌」。師休去。

相見又無「相触忤」、攔「腮」便掌不「相饒」、思「量」箇様「無滋味」、莫「是」趙州「身命」招「。

として南嶽下の趙州從諗（實際大師、七七八—八九七）にちなむ「趙州筍」の古則に対する頌古が存している。同じく卷二〇「祖師機縁」の「六祖下第四世之七」にも、

趙州因真定師王公、携「諸子」入院。師坐而問曰、大王会麼。王曰、不「会」。師曰、自小持「齋身」已老、見「人無力」下「禅床」。王尤加「礼重」。翌日令「客将伝」語。師下「禅床」受「之」。侍者曰、和尚見「大王来」不「下」禅床、今日將軍来、為「甚麼」却下「禅床」。師曰、非汝所「知」、第一等人来「禅床上」接、中等人来下「禅床」接、末等人来「三門外」接。

禅床不「下」不「擡身」、自小持「齋到」老人、只有「箇牙」堪「喫飯」、那知「世有」大王「尊」。

として趙州從諗と真定師の王鑄（八七三—九二一）との間で交わされた「趙州三等人」の古則に対する頌古が存している。卷二三「祖師機縁」の「六祖下第五世之四」には、

徳山因廓侍者問、從上諸聖向「什麼」処去。師曰、作麼作麼。曰、敕点「飛龍馬」、跛躄出頭来。師休去。明日師浴出。廓過「茶」与「師」。師撫「廓背」曰、昨日公案作麼生。曰、這老漢今日方始「警地」。師又休去。

昨日罵「曹」一番了、老倒疎慵不「解」曉。今日又来由「你罵」、饒人些子「当看經」。

として青原下の徳山宣鑑（周金剛、見性大師、七八〇—八六五）と守廓侍者にちなむ「廓侍過茶」の古則に対する頌古が存している。

卷二六「祖師機縁」の「六祖下第六世之一」に、

興化因後唐莊宗幸「河北」、回「魏府」行宮、詔師問曰、朕取「中原」獲得「一宝」、未「曾有」人酬「之」價。師曰、請「陛下」宝「看」。帝以「兩手」舒「幘頭脚」。師曰、君王之宝誰敢酬「之」價。

君王宝自難「酬」價、興化何曾敢「借看」、天地既無「私」蓋載、至今留得鎮「中原」。

として臨濟下の興化存獎（広濟大師、八三〇—八八八）の「莊宗酬價」の古則にちなむ頌古が存している。これは先に述べ

た『統燈正統』などに載るものと同じであり、この頌古が何らかのかたちで伝承されて『統燈正統』などに収録されていることが確かめられる。

卷三五「祖師機縁」の「六祖下第八世之一」には、

汝州穎橋安禪師、号「鉄湖」、向「火次」、因「鐘司徒問」、三界焚焼、如何出得。師以「香匙」撥「開火」。鐘擬講。師召曰、司徒司徒。鐘忽有省。

三界焚焼要「出離」、見「春来了見」春帰、是他不見「春来去」、日出「東方」夜落「西」。

として臨済宗の穎橋安（鉄湖）と門下の鐘司徒にちなむ古則に対する頌古が存している。

卷四〇「祖師機縁」の「六祖下第二十一世」には、

臨安府径山虚堂智愚禪師、垂「語曰」、己「眼未」明底、因「甚麼」將「虚空」作「布袴」著。画「地為」牢、因「甚透」者箇「不過」。入「海算」沙底、因「甚向」針鋒頭上「翹」足。

縫「却」虚空「算」尽「沙」、針頭画「地是」生涯、改「頭換」面無「人見」、幾度「春風」吹落「花」。

という師の智愚の「虚堂三転語」に対する頌古が存している。これは『五燈厳統』に収められているものと同じ頌古であり、この頌古も何らかのかたちで伝承されて『五燈厳統』に収録されていることが確かめられる。

同じく卷四〇「未詳承嗣」に、

昔有「一婆」、供「養」一「菴主」、經「二十」余年、嘗「令」二「八」女子送「飯」給侍。一日「令」女子抱定「云」、正当「与」麼時如何。庵主曰、枯木倚「寒」巖、「三春」無「暖氣」。女婦「拳」似「婆」。婆曰、我「二十」年只「供」養得箇「俗漢」。遂「趁」出「放」火「燒」却「菴」。

貧人常「妬」富、富者不「欺」貧、莫「信」直中直、須「防」人「不」仁。

という「婆子焼庵」の古則に対する頌古が伝えられており、この古則は師の智愚もその「頌古百則」に取り上げている。このように『禪宗頌古聯珠通集』には法雲の頌古が実に二〇則も収められており、比較的南嶽系の祖師に因む古則が多いものの、この人が師の智愚と同じように頌古を得意としていたことが窺われる。

一方、南宋末元初に無準下の松坡宗慧らによって編纂された『江湖風月集』巻下にも「四明閑極雲和尚」の作として、

虚堂智愚の嗣法門人について（佐藤）

松窓術士。

涛声細々月生寒、六戸虚凝夜未闌、撥_二転卦盤_一重点過、子宮却在_二午宮_一看

賀_二南山侍者_一。

大王来也主礼薄、万福声中客意長、仏口蛇心俱捉敗、六橋煙雨鎖_二垂楊_一。

といつ二首の偈頌が載せられている。最初の「松窓術士」の偈頌は術士に松窓の道号を書き与えた際のものであり、つぎの「南山の侍者を賀す」の偈頌は南山すなわち杭州錢塘東の南屏山淨慈報恩光孝寺の侍者を勤めていた禅者に与えた賀偈であらう。

さらに注目すべきは日本で夢窓派の義堂周信（空華道人、一三三五—一三八八）によってまとめられた『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』ないし『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』にも法雲に関するものがいくつか載せられている。すなわち、『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻上の「讚仏祖 名賢附」には、

釈迦 誕生。 閑極雲 元人、嗣_二虚堂愚_一。

四月常宜三分雨、相伝野老_二豊年_一、若言_二浴仏初生日_一、掘地深深更覓_二天_一。

として仏降誕会（仏生日）の偈頌が載せられており、これは『禅宗頌古聯珠通集』に所収のものとは別である。同じく巻上の「侍者」に、

南山請客。 閑極。

大王来也主礼薄、万福声中客意長、仏口蛇心俱投敗、六橋煙雨鎖_二垂楊_一。

という偈頌が収められており、『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻五の「侍者 禅客附」にも同内容の偈頌が見い出されるが、これは先の『江湖風月集』に載る「賀_二南山侍者_一」の偈頌と同じであり、表題が相違しているが、請客とは五侍者のひとりである請客侍者のことであるから、同じ意と解してよいであらう。また『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻中の「送行」には、

礼維那遊方。 閑極。

斜玉峯前苦水荒、紫黄_二不_レ紫菊無_レ黄、那边土鼓敲_二霜月_一、応是糲米秋更香。

という偈頌が存しており、これは席下で維那を動めていた礼という名の禪者が諸方に歴遊するのを送る内容である。ここにいう礼維那が先に示した法雲の「虎丘十詠跋」に登場した約翁礼藏主と同一人物なのか否かは定かでない。

陳生淨髮。 極雲。

頭上青灰三五斗 耳中糞糠兩三升、好將一寸鉄類磨淨、識取深山古寺僧。

という偈頌が存し、これは『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻四の「伎芸」にも「閑極雲」の作として収められている。おそらく門下に投じた一俗人（陳氏）を剃度淨髮して僧と成した際に示したものであろう。また同じ『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻中の「伎術」には、

松窓術士。 極雲。

涛声細々月生寒 六戸虚凝夜未闌、撥一転卦盤一重点過、子宮却在二午宮看

という偈頌が存しており、この偈頌は先の『江湖風月集』に載るものと同じであることから、いずれも法雲の作であることが判明する。したがって、ほかに「極雲」とある偈頌もすべて「閑極雲」の誤りであって、同じく法雲の作と解してよいであらう。

さらに『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻下の「図画」には、

濁港図。 極雲。

三更月下自揺船 慚愧衣盂得正伝、七百高人無口笑、至今江水拍天寒。

という濁港の図に寄せた偈頌（図贊）が存しており、『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻九の「図画」にも「閑極」の作として同じ偈頌が収められている。おそらく水墨画ないし淡彩画で描かれた長江の図であって、五祖弘忍と六祖慧能の伝法にちなむ画題に付した贊であらう。また『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻下の「飛走」には、

姑悪鳥。 閑極。

永夜哀鳴烟水郷 血凝烟水子方生、当时休結哀傷恨、姑不多時七嫁郎。

箭姑怨。 閑極。

為 笋蕨竟忘時、失顧防家大不唄、千古姑心胡不_レ忍、遠山猶聽喚_レ驢。

という偈頌が収められている。飛走とは飛鳥と走獸すなわち鳥獸（禽獸）のことであり、ここでは動物を題材にした偈頌を指している。同じく、『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻下の「飛走」には、

促織。 閑極。

断続頻催不_レ識_レ音、夜深渾不_レ露_レ機心、夢中不_レ道_レ無_レ人聽、霜重草枯空恨深。

蛩。 閑極。

夜坐無_レ燈坐結跏、蛩光時復見_レ些々、一声鷄唱乾坤曉、滅却從前眼底花。

蛩。 閑極。

草裏転_レ身出、乾坤自在飛、風吹亦不_レ滅、雨打転_レ光輝。

という三首の偈頌も収められており、これら三首も『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻九の「飛走」に「閑極」の作として収められている。促織とは機織り虫すなわちコオロギのことであり、法雲は晩秋のコオロギや夏の夜のホタルなど昆虫や小動物を折りに触れて偈頌に残しているわけである。

このように中国禅林でまとめられた『江湖風月集』、『禅宗頌古聯珠通集』や、日本禅林で編集された『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』、『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』などを通して法雲には多くの頌古や偈頌が伝えられているわけであり、詩僧としてかなり詩文に長けた禅者であったものと推測される。日本にこの人の遺墨がいくつか伝存しているのは、単に智愚の法を嗣いでいることや、紹明の法兄であったためというだけでなく、法雲自身が偈頌に巧みであったことがその理由の一つに挙げられよう。

ちなみに、『円通大応国師語録』に載る松源派の明極楚俊が撰した跋文に、

堂之下、葉葉有_レ光、如_レ宝葉源公・竹窓喜公・閑極雲公・葛蘆曇公・曇石芝公、皆有_レ語行_レ於世者。

という記事が見られるから、法雲には他の虚堂門下の主だった法嗣らと同様にそのことはをまとめた語録が存したことが知られる。おそらく法雲の語録は『閑極和尚語録』といった表題であったものと推測されるが、残念ながら現今に伝えられていない。先に示したごとく法雲のことは諸資料を通して数多く伝えられているが、それらほともに『閑極和尚語録』

に収録されていたものであろうし、あるいは法雲に参じた経験のある楚俊などもその語録を目的にしていたのかも知れない¹⁴⁾。

- ① 早く南宋中期に曹洞宗宏智派に明極慧祚（法祚とも）があり、法雲の活躍していた南宋末期には破庵派の愚極智恵や曹源派の頑極行弥があり、元代にも日本に渡来した松源派の明極楚俊があり、明代初期にも『増集統伝燈録』の編者である松源派の円極居頂（円庵、？ 一四〇四）などが存していることから、道号の下字に極の字を用いる風が広く認められる。
- ② 『虚堂和尚語録』巻一に「慶元府万松山延福禅寺語録」が収められている。また大慧派の用潜覚明が大徳二年（一一九八）に撰した「無学禅师行状」によれば、破庵派無準下の無学祖元の俗兄である仲拳懷徳も昌国県の延福寺に住持している。法雲が住持した明州府城の万寿寺（清涼広慧寺）は小天童と称され、南宋末期に破庵派の無準師範や大慧派の偃溪広闡（仏智禅師、一一八九—一二六三）が住持しており、『仏鑑禅师語録』巻一に「仏鑑禅师初住慶元府清涼禅寺語録」が存し、『仏智禅師偃溪和尚語録』巻上に「慶元府万寿禅寺語録」が収められている。また松源派の石溪心月（仏海禅師、？ 一二五六）の法嗣である南叟宗茂もこの寺に住持しているものらしい。一方、法雲に遅れて元代には松源派の虚舟普度（一一九九—一二八〇）の法嗣である庸叟時中や普度の法孫に当たる華国子文（一二六九—一三五一）などが住持しており、松源派の古林清茂（仏性禅師、一二六一—一三二九）の法嗣である実庵茂（松隱小茂）も住持している。
- ④ 妙楽寺所蔵『石城遺宝』については廣渡正利編『石城遺宝』という註釈・研究書が平成三年（一九九一）一〇月に妙楽寺から発行されている。また『集古録』については『五山文学新集』別巻一の「詩軸集成解題」の「虎丘十詠」の解題を参照。丹波（京都府）瑞巖寺の幹山師貞（一六七六—一七四五）が享保五年（一七三〇）に写した大冊の雜録である。
- ⑤ 『禅林墨蹟拾遺』に収められる田山方南「禅林墨蹟拾遺解説」においても「中呉蕭巖」を「中呉蕭巖」と判読しているが、蕭巖に関する説明は何ら記されていない。
- ⑥ 『増集統伝燈録』巻六「杭州径山悦堂希顔禅師」の章によれば、松源派の東嶽徳海の法嗣である悦堂希顔が蘇州崑山東禅に開堂しており、『増集統伝燈録』巻六「崑山蕭巖蘭江清澗禅師」の章によれば、元代には松源派の曇芳守忠の法嗣である曇江清澗が崑山蕭巖寺に住持している。
- ⑦ 成實堂文庫所蔵『石林和尚語録』巻上の侍者自模・介然・紹安編「平江府承天能仁禅寺語録」によれば、「師於徳祐元年正月二十一日入院」とあるから、行輩は南宋最末期の徳祐元年（一二七五）正月二〇日に承天能仁禅寺に入院していることが知られ、至元一四年（南宋の景炎二年、一二七七）に浄慈寺に勅住している。明確ではないが、おそらく状況からして法雲は行輩が浄慈寺に遷住して以降に承天寺に住持として迎えられているものと見られる。

(8) 今枝愛眞『新訂図説 墨蹟祖師伝』の「蘇州虎丘開極法雲禪師」の箇所には「現存目録」と「所蔵者」として、

法語 妙心寺桂春院 法語 妙心寺聖沢院

とあり、妙心寺山内の桂春院と聖沢院という二塔頭に所蔵される法雲の法語の法語の存在を伝えている。聖沢院に所蔵される法雲の法語についてはまだ確認していないが、あるいは桂春院所蔵の法語の前半に当たるものではないかと推測され、法語を与えた人物の名も記されているのであろうか。

(9) 竹内尚次『江月宗玩 墨蹟之写 禅林墨蹟鑑定日録』の研究』では、「元和第三丁己、四冊之内下」の箇所（四六一頁）に開極法雲「付与賢知客四睡図画賛」として載せられている。

(10) 『江月宗玩 墨蹟之写 禅林墨蹟鑑定日録』の研究』では、「元和六、二冊之内下」の箇所（八五七頁）に開極法雲「寒山図画賛」として載せられている。

(11) 『嘉泰普燈録』卷二〇「紹興府東山覺禪師」の章によれば、楊岐派の圓悟克勤（仏果禪師）の法嗣である東山覺が南宋初期に越州の東山に住持している。南宋末期に越州の東山に住持した禪者としては破庵派無準下の断溪妙用（老樵）があり、『仏祖宗派図』には「径山無準師範」の法嗣として「東山断溪妙用」とあり、実際に『禅林墨蹟』四九には常盤山文庫に所蔵される重要文化財の妙用の墨蹟が載せられている。これは日本から入宋した聖一派の白雲慧暎（仏照禪師、一一二八—一二九七）に与えた道号領であるが、そこに妙用は「右為日本曉禪翁、題白雲雅号。咸淳己巳、住越東山断溪老樵妙用揅手。越閩妙用」(方印)「東山老樵」(方印)と記しており、咸淳五年（一二六九）に著わされたものである。また『元亨釈書』卷八「釈順空」の章によれば、入宋した聖一派の蔵山順空（無量房、円鑑禪師、一一三三—一一〇八）が越の東山にて同じく妙用に参学している。『増集統伝燈録』卷四「杭州径山復原福報禪師」の章によれば、大愚派の復原福報が元代末期に越の東山に住持している。

(12) 破庵派無準下の環溪惟一（一一〇二—一一二八）の『環溪和尚語録』卷末に載る普明の跋文には「至元癸未元正、住天童弟普明跋」と記されているから、普明は至元二〇年（一二八三）の頃には天童山の住持として活動していたことが知られる。また松源派の横川如珙（一一三二—一一八九）の『横川和尚語録』卷上「明州阿育王山弘利禪寺語録」によれば、至元二年（一二八五）と見られる箇所に「天童止泓和尚至上堂」が存し、至元五年（一二八八）と見られる箇所に「天童月坡和尚遺書至上堂」が収められている。

楚俊が天童山で閲覽した智愚の普説とは、『虚堂和尚語録』卷四に載る侍者法雲編「双林夏前告香普説」のことはであって、その中で智愚は当代の学仏道者が妙を得ない原因として、

今之学者、不得其妙、病在「自信不及处」、病在「得失是非处」、病在「我見偏執处」、病在「限量窠臼处」、病在「機境不脱处」、病

(13)

在得_レ少為_レ足処、病在_二一師一友処、病在_二旁宗別派処、病在_二位貌拘束処、病在_二自大了一生小不得処。

と述べており、厳しい批判を浴びせている。楚俊は智愚の批判の中でとくに、「病在_二自大了一生小不得処」と、「病在_二一師一友処」のことはに発奮して遍参を志しているわけであり、かなり強烈な印象をもって智愚の普説を受け止めていたことが知られる。この普説を聴聞編集しているのが法雲であることから、楚俊は法雲のもとを訪れて实地に参禅辨道に努めているものである。

(14) 玉村竹二『日本禅宗史論集』下之二に所収される、「日本禅僧の渡海参学関係を表示する宗派図」によれば、開種法雲に参じた日本僧として機嶽、断という禅者の名を挙げてゐる。機嶽断が法雲に参じたことが何に記されているのか、機嶽断とは如何なる系統の禅者なのか、いつ入宋ないし入元して法雲に参じたのか、また果たして法雲の法を嗣いだ門人であるのかなど、諸般の事情はいまだ明確にしていけない。

(2) 宝葉妙源

宝葉妙源(晋之、一一二七—一一八一)は中国の虚堂門下でただ一人だけ塔銘その他の伝記史料が残されている禅者であるが、その反面、いくつかの疑点が存する人でもある。妙源については元代の文人として名高い袁桷(字は伯長、清容居士、一一六六—一三三七)の『清容居士集』巻三一「墓誌銘 塔銘附」に「定水源禅师塔銘」が載せられており、しかもその内容をほぼ踏襲するかたちで『補続高僧伝』巻一二にも「妙源伝」が存していることから、その行実の詳細を窺うことができる。ただ、妙源の事跡はかなり煩瑣にわたるため、別個に取り上げてこれを論じたい。

(3) 靈石如芝

靈石如芝(仏鑑禅师、一二四五または一二四六?)は虚堂門下ではただ一人だけ禅宗五山にまで陞住した禅者であり、また日本禅林ないし入元した日本禅僧との関わりにおいてもきわめて重要な足跡を残していることが知られている。ただ、如芝については日本国内にかなりの墨蹟が存しており、きわめて煩瑣にわたることから、別に稿を改めて論じたものである。ただ、その補足として、お茶の水図書館の成實堂文庫に所蔵される元版『明覚禅师語録』の冒頭に開禧元年(一二〇五)に曹洞宗宏智派の海印徳雲が記した序文について、

明覚大師語録 板行久矣。然奥旨微言、峻機妙用、匪陋聞淺識者所可_レ得、而管窺蠡酌也。雪竇熾変、板亦就燻。方外円蔵主、募縁重刊。連城之璧、照乘之珠。復為趙廷之隔。合浦之還、俾_レ後学有所_レ崇拜。其於_レ吾教、豈少補哉。

泰定甲子仏成道日、禾城本覚末字比丘如芝_レ拜書。

という如芝がなした序文が載せられている。北宋代に活躍した雲門宗の雪竇重顕（隠之、明覚禪師、九八〇—一〇五二）の語録が元代に重刊される際、如芝は本覚寺の住持として泰定元年（一三三四）の仏成道日（二月八日）に序文を寄せていることが知られる。ここにいう明州奉化県（元代は奉化路）の雪竇山資聖禪寺の熾変とは至元五年（一二八八）四月に大慧派の石門善来が住持であったとき起こった火災のことである。火災によって重顕の語録の版木も焼失したため、方外円蔵主という禪者が施財を募つて重刊したというのであり、如芝が請われて序文を拜書しているわけである。ここにいう方外円蔵主とは、『増集続伝燈録』巻五「目錄」に破庵派無準下の希叟紹曇の法嗣として載る「方外円禪師」のことである。如芝が如何なる理由で『明覚禪師語録』の重刊に際して序文を撰することになったのかは定かでないが、当時、重顕の語録に選ばれて序文を寄せているわけであるから、本覚寺における如芝の評価がかなり高まっていたことが知られる。

(1) 拙稿「靈石如芝の活動とその功績 入元日本僧と鎌倉末期の日本禅林の動向を踏まえて」（『駒澤大学仏教学部論集』第三六号）を参照。

(2) この点についてはすでに椎名宏雄『明覚禪師語録』諸本の系統（『駒澤大学仏教学部論集』第二六号）に紹介されている。

(3) ただし、『仏祖宗派図』や『正誤宗派図』四によれば「天童環深惟一」の法嗣として「隆教方外行円」とあり、同じ無準下の環深惟一（一一二〇—一一二八）の高弟として明州昌国県（元代は昌国州）富都郷の隆教寺に住持した方外行円の存在を伝えている。行円が惟一の法嗣であるとする、無準下の無学祖元（子元、仏光国師、一一二六—一一八六）とともに日本に渡来した鏡堂覚円（大円禪師、一一四四—一三〇六）とは同門に当たることになる。

(4) 竹窓浄喜

竹窓浄喜（宗喜）については、わずかに『増集続伝燈録』巻五「靈巖竹窓喜禪師」の章が存するにすぎず、表記も単に竹窓 喜とのみ記されており、道号を竹窓ないし竹窓とするが、法諱は下字の喜しか記されていない。また江戸初期の『正誤宗派図』四や『虚堂和尚語録梨耕』の法嗣の註では「靈岩竹窓宗喜」とあって、宗喜という法諱で名が載せられてい

るところが、『虚堂和尚語録』巻九「臨安府徑山興聖万寿禅寺後録」には、「参学正一・浄喜・尚賢編」とあり、その編者の一人に参学浄喜の名が見られる。無著道忠は『虚堂和尚語録裂耕』巻二六「徑山後録上」において「正一・浄喜・尚賢、三人共不詳」と記しているから、浄喜については明確にし得なかつたことになる。ほかに『虚堂和尚語録』にはそれと思しき禅者の名は見当たらず、一応ここでは宗喜と浄喜は同一人と解するのが妥当なようである。しかも宗喜というのが『正誤宗派図』にしか見られないことから、状況的に宗喜とあるのは誤りで、正しくは浄喜と称すべきであろうか。

浄喜というのがこの人の正しい法諱であつたとすれば、南浦明が咸淳三年（一二六七）の秋に日本に帰国せんとする際、中国の道友らが餞別に贈つた詩偈をまとめた『一帆風』に、

又（送南浦明公還本國）。古洪浄喜

風前冷笑錯参方、知識何曾在大唐、巨舶連櫓輕撥舳、兔馭渾帶雨前香。

という浄喜が贈つた作が伝えられているのが注目される。これによれば、古洪の浄喜とあるが、古洪とは洪州（江西省）隆興府のことを指していると思われるから、浄喜は洪州すなわち現今の南昌市内の出身であつたことが判明する。おそらく浄喜は江西から浙江に赴き、杭州の浄慈寺か径山において智愚の席下に投じた人と見られ、径山の智愚のもとで侍者として上堂・小参など語録の編集に尽力し、日本僧の紹明とも親しい交友を持っていたことになる。したがって、浄喜は日本僧の紹明などと同じく智愚の門下でもかなり晩学後進に属する法嗣であつたものと見られ、出世開堂したのも智愚の示寂して後のことであつたものと推測される。

さらに日本で夢窓派の義堂周信が宋・元の禅者の偈頌をまとめた『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻七「簡奇」に、

竹窓 松岩

徹骨貧来只一身、不_レ禁秋暑尚如_レ焚、坐看玉立窓前竹、时有_二清風来_一故人。

という作が載せられている。簡奇とは友人などに書簡（書牘）を寄せることであり、ここにいう松岩とは時期的に破庵派無準下の別山祖智（智天王、一一〇〇—一二六〇）の法を嗣いだ松巖永秀のことを指していると推測されるから、これが浄喜に寄せた偈頌であるならば、浄喜は永秀とも交遊が存したことになる。竹窓の偈頌では秋の残書の中で、しばし窓の前の竹を見て旧時の友である竹窓浄喜を思いやる永秀の心情が述べられている。

浄喜の住持地として、『増集統伝燈録』や『正誤宗派図』は「靈巖」ないし「靈岩」と記しているが、靈巖寺が具体的にいずれの地に存したのかは明記されていない。靈巖といえは一般には蘇州呉県の靈巖山崇報禪寺（靈巖寺・秀峰寺）のことが想起され、また温州（浙江省）瑞安府樂清県の雁蕩山靈巖禪寺など有名であるが、つきに示すごとく浄喜が明州地で活動していたとすると、その行動範囲からして、靈巖寺とは明州象山県西南四〇里の靈巖広福禪寺を指しているのをもっとも妥当なようである。象山県の靈巖寺については『宝慶四明志』卷二二「象山県志」の「寺院 禪院」に、

靈巖広福院、県西南四十里。皇朝太平興國二年、僧智瑤建、進士俞讓記。熙寧元年、加賜壽聖二字。紹興三十二年、改賜今額。常住田八十五畝、山六百十畝。

とあり、『至正四明統志』卷一〇「釈道」の「寺院 象山県」の「靈巖広福寺」にも同様の記載が見られる。寺は太平興國二年（九七七）に智瑤によって建立され、熙寧元年（一〇六八）に寿聖の二字を加賜され、紹興三十二年（一一六二）に靈巖広福院の額を賜っていることが知られる。^②

注目すべきは松源派の虎巖浄伏の法嗣で日本に渡来した明極楚俊（仏日焰慧禪師、一一六二—一三三六）が若くして出家得度した際の受業師として、浄喜の名が存していることである。すなわち、元末に大慧派の夢堂曇噩（無夢、仏真文懿大師、一一八五—一三七三）が撰じた「仏日焰慧禪師明極俊大和尚塔銘」によれば、

師諱楚俊、字明極。慶元昌國之黃氏子。父某。母李感。神光香氣。而嬌。幼入塾。以強記冠。課論群童。性姿恬靜。孤潔不_レ好_レ弄。雖_レ如_レ貴産之家。益_レ厭惡。丞欲_レ棄去。即礼_レ竹_レ臆_レ喜和尚於_レ回峰里刹。菴築。久之。獲_レ坐_レ夏_レ玉_レ几。而叢_レ林_レ巖_レ講。横川_レ珙_レ公提唱高古云々。

という記事が存しており、ここにいう竹臆喜が時期的にも竹窓浄喜のことを指していることは疑いなくろう。楚俊は明州慶元府昌國県（元代は昌國州）の黄氏の出身であるが、「仏日焰慧禪師明極俊大和尚塔銘」によると、幼くして郷里明州内に存した禪刹に投じて浄喜に就いて得度剃髪したとされている。一方、『延宝伝燈録』によれば、十二歳のとき本郡すなわち明州内で浄喜に就いて剃髪して出世の法（仏法）を学んだとされている。「仏日焰慧禪師明極俊大和尚塔銘」と『延宝伝燈録』においては具体的にいずれの禪刹で楚俊が浄喜に参学したのかは明確に示していないが、『本朝高僧伝』では「年甫めて十二にして、靈巖の竹臆喜和尚に投じ、髪を剃りて受具し、出世の法を学ぶ」とあり、靈巖は靈巖の誤りであるが、十

二歳のとき明州内の靈巖寺において浄喜に参じたことを明記している。ちなみに『増集統伝燈録』卷六「婺州宝林明極楚俊禅师」の章では、簡略な記述のため浄喜との関わりは記されていない。

『延宝伝燈録』と『本朝高僧伝』では楚俊が浄喜に随侍したのを十二歳のときからとしており、これによれば楚俊は咸淳九年（一二七三）には浄喜のもとに投じたことになり、ときあたかも智愚が示寂して五年近い歳月が経過している。また楚俊が幼くして浄喜のもとに投じて剃髪得度し、さらに受戒して後も浄喜のもとで仏法を学んでいたとすれば、浄喜に参随していた期間は久しかったものらしい。いずれにせよ、浄喜は智愚が示寂して数年後には明州内の禅寺ないし靈巖寺に開堂出世し、幼き明極楚俊を愛弟子として剃髪得度せしめていることになろう。

その後、楚俊は玉几すなわち明州鄞東の阿育王山広利禅寺に上山掛搭し、松源派の横山如珙（行珙とも、一一三二—二八九）に参学しているが、『横川和尚語録』卷上「明州阿育王山広利禅寺語録」によれば、如珙が阿育王山に住持したの
は元の至元二〇年（一二八三）八月三日のことであるから、楚俊がそれまで浄喜のもとに在って指導を受けていたものと見られ、その期間は一〇年あまりに及んだ計算になる。その後、楚俊はすでに述べたごとく浄喜と同門に当たる開極法雲などに参学しており、最後に杭州余杭県の径山興聖万寿禅寺に赴いて松源派の虎巖淨伏（天瑞老人、仏慧定智禅师、？—一三〇三）に参じてその法を嗣いでいる。

『増集統伝燈録』卷五「靈巖竹窓喜禅师」の章には浄喜のことばとして、

上堂。諸人毎日行住坐臥、聞見覺知、俯行折旋、攀附承接、頭頭妙用円融、处处神光具足。為甚聞鐘声披衣、聞鼓声上堂。向這裏見得、明白許你七穿八穴。不然、万紫千紅零落尽、一年春事又成休。

というわずか一上堂が載せられているにすぎない。この上堂では叢林において行住坐臥の日常生活の中に真理を見ていく禅者の生き方が説かれており、靈巖寺住持となした浄喜の貴重な語句を伝えていることになろう。

ところで浄喜に参学した楚俊は後に南浦紹明の『円通大応国師語録』の末尾に跋文を寄せているが、その跋文の中で、

堂之下、葉葉有光、如宝葉源公・竹窓喜公・開極雲公・萬巖曇公・靈石芝公、皆有語行於世者。と述べている。この記述によれば、妙源や法雲らとともに浄喜にもそのことばをまとめた語録が存したらしいことが知られ、おそらく『竹窓和尚語録』といった表題であったものと見られる。現今に知られる浄喜のことばはわずかであるが、

おそらく『竹窓和尚語録』には上堂・小参・偈頌その他のことは収録されていたものであろう。当然のことながら楚俊も受業師である浄喜の語録を目的にしたりしてははずであらうし、あるいは楚俊によって『竹窓和尚語録』が日本禅林に将来されていた可能性も存しよう。

この点、注目すべきは江戸中期に編集された宋・元の禅者の仏事法語集である『禅林諸祖甲靈語數』に浄喜の作が収められていることであらう。『禅林諸祖甲靈語數』「諸祖略伝」の「元朝」には「竹窓、諱喜、嗣法虚堂愚」として浄喜の作が収められている旨が示されており、実際に巻三「秉炬」に「竹窓喜二章」として、

為機首座。

香煙尽処、脱去死歎、果然有準。雖然、那裏輪機、却來這裏、按本翻得本。擲下火云、紙尽綉毬火裏輓。

という門下で首座（第一座）を勤めていた機首座の逝去を悼む引導法語が存し、つづいて同じく、

為椀首座。

道在忘機、洞徹離微、応真不借、視死如帰。臘尽葉空、無影樹、春來花発、不萌枝。如猶是某人尋常行履処、且末後一句、如何分付。火裏大虫吞却虎。

という椀首座の逝去を悼む引導法語が載せられている。これら二首の秉炬の法語はおそらくもと『竹窓和尚語録』に所収されていたものであろうと見られ、江戸中期まではその語録がいずれかに所蔵されていたのではないかと推測される。この二首の法語は浄喜が門下で示寂した機首座と椀首座のためになした貴重な秉炬仏事の香語であるとともに、浄喜のもとに機と椀という二首座が存していた消息を伝えるものでもある。

(1) 松巖永秀については『増集統伝燈録』巻五に「西林松巖秀禪師」の章があり、別山祖智の法嗣であることが知られる。また『仏

祖宗派図』に「天童別山祖智」の法嗣として「西林松岩永秀」とあり、『正誤宗派図』四にも「天童別山祖智」の法嗣として「西林松巖永秀」と記されている。永秀が住持した西林とはおそらく江西の廬山に存した西林禪寺のことであらう。

(2) 『兀菴和尚語録』巻上に「兀菴和尚初住慶元府象山靈巖広福禪院語録」が収められており、日本に渡来する遙か以前に無準下の

兀庵普寧（宗覚禪師、一一九七—一二七六）が象山県の靈巖寺に初住していることが知られる。『怒中和尚語録』巻一にも「住象山靈巖広福禪寺語録」が収められており、元末明初に松源派の怒中無慍（空室、一一三〇—一一八六）も初住している。

(3) この点は『延宝伝燈録』巻四「京兆南禅明極楚俊禅师」の章においても、

元国明州慶元府黄氏子。母李氏感神光香气有娠而媿。十二投本郡竹窓喜剃髮、学出世法。参横川珙于玉几峯、有所省。

とあり、ここでは一二歳で郡内(明州内)の寺で竹窓喜に投じて出家したことになる。これに対して『本朝高僧伝』巻二六「京兆南禅寺沙門楚俊伝」においては、

釈楚俊、字明極。元明州慶元府黄氏子。母李氏感神光香气而媿。性姿閑雅不好戲弄。幼入郷岸、誦課強記殆冠倫輩。雖、处富貴之宅、厭汨塵俗。年甫十二、投靈巖竹窓喜和尚、剃髮受具、学出世法。久之辞去、参横川珙禅师於玉几峰。

(4) といくぶん詳しい記載が見られ、ここでは明確に靈巖寺(正しくは靈巖寺)の竹窓喜に投じて出家受具したことになる。ただし、国立国会図書館の内閣文庫に所蔵される『仏日焰慧明極禅师語録』五巻五冊の中には、「仏日焰慧禅师明極俊大和尚塔銘」の記載のほかには淨喜に関する消息を伝える記事は見い出されない。

(5) 『禅林諸祖弔靈語數』一〇巻は湖隱鑑という人の編纂なるもので、宝永元年(一七〇四)に刊行されており、別に『禅林引導集』とも称される。宋代の禅者七二人と、元代の禅者四一人の法語が収まり、の中には鎌倉・南北朝・室町期の日本僧も含まれている。また法系不明の禅者二名の作も存しており、合わせて一〇四人の作が存する。冒頭には元禄十六年(一七〇三)秋に湖隱鑑が自らなした「序」を載せ、「凡例」「目錄」「諸祖略伝」宋朝「祖伝未考」を載せた後、巻一より巻六の途中まで「秉炬」を、巻六の後半に「掩土」「入龕」「附移龕」「転龕」を、巻七に「鎖龕」「掛眞」「拏茶」「奠湯」を、巻八に「起龕」を、巻九に「安骨」「附転骨」「提衣」「起骨」「入骨」「附骸骨」「入塔」を、巻一〇に「入塔」「入壙」「入祖堂」「附入祠堂」「撒骨」「附撒灰」を収めており、末尾に宝永元年仲冬に湘月祖皎が記した跋文を載せている。湖隱鑑は自ら「序」において、

故暇日拾取諸録之所載、且拋百家之所藏、網羅本録遺逸、遂成一十巻、因曰弔靈語數。

と述べており、多くの語録を閲覧して本書を編纂したことを伝えているから、その中に淨喜の『竹窓和尚語録』も含まれていたのではなからうか。

(5) 禹溪一了

禹溪一了(一予とも)については『増集統伝燈録』巻五「四明雪竇禹溪予禅师」の章が存するのみであり、しかも「目錄」

で「禹溪了」とあるのに対して、本文では「禹溪予」となっていて、法諱の下字が了なのか予なのか定かでない。しかしながら、日本撰述史料では室町期の『仏祖宗派図』においても「雪竇禹溪了」とあり、また江戸初期の『正誤宗派図』四においても「雪竇禹溪了」とあって、いずれも了として名が載せられているから、法諱としては了が正しいであろう。さらに『江湖風月集』には「越禹溪了首座」として、この人の偶頌が載せられていることから、了が越すなわち越州（浙江省）紹興府の出身であったことが判明する。道号の禹溪とはおそらく越州の山陰県東南の会稽山に存する禹陵にちなむ命名であったものと推測され、了の郷里が山陰県の会稽山にほど近い地に存したことを示すものである。

越州出身の了がいつ頃に智愚に参じたのか、また智愚のもとに在って参学していた期間がどれほどであったのかは定かでないが、『虚堂和尚語録』巻一〇の「偶頌」に、

送了侍者游台山。

暮 臘 高 拳 興 何 窮、 秋 在 黃 蘆 葉 裏 風、 己 事 未 明 如 蹈 火、 白 雲 深 處 見 巖 翁。

という偶頌が存している。ここにいう了侍者がこの人を指すのであれば、やはり了予ではなく了了が正しい法諱であったことになる。この偶頌は門下で侍者を勤めていた了了が台州天台県の天台山に雲遊するに際して、智愚が親しく与えたものである。

また『墨蹟之写』一七「元和五己未下」には、知客の南浦紹明が帰国するのに対して了了が銭別に贈ったと見られる送別偈として、

寄日本之明公知客。

遠 別 日 東 遊 万 里、 宗 猷 叢 処 太 嘉 哉、 工 夫 穿 向 上 巴 鼻、 一 喝 機 鋒 轉 怒 雷。

雪豆小苾芻禹溪了了挥手。 「禹溪」(方印) 「了了」(小方印)

という作が伝えられている。この偶頌はいわゆるの「一帆風」には収録されていないものであり、少なくとも江戸初期まではその原本が日本国内の何れかに所蔵されていたものである。この中で了了は自らの肩書きを「雪豆小苾芻」と記しているが、雪豆とは了了の住持地として知られる十刹第五位に当たる明州奉化県西北五〇里の雪竇山資聖禅寺のことにはかならない。ただ、紹明が帰国した当時、すでに了了が雪竇山に住持として入院していたか否かには問題もあり、あるい

は単に雪竇山に寓居する身（小比丘）であつただけなのかも知れない。紹明は帰国する直前に明州に赴いて金文山の可直を訪ねているが、咸淳三年（一二六七）の末か咸淳四年の春頃におそらく雪竇山にも上山して法兄の一了をも訪ねて旧交を温めたものと推測される。

ところで、『江湖風月集』巻下の「越禹溪了首座」の箇所には、

送_二人之_三南浦。

干戈誰展復誰收、雲歛千山月正秋、万里帰心如不昧、浪翻南浦又添愁。

遠峯。

青螺隱々隔_二輕煙、一翳才生落_二断辺、峭絶自忘空劫路、不須心外覓_二通玄。

という二題の偈頌が伝えられている。『新編江湖風月集略註』巻下の「越禹溪了首座」の註では「越禹溪了首座 嗣_二虚堂。諱一了。後住_二雪竇」と説明されている。これら二題の偈頌はともに一了がいまだ首座の位に在ったときの作であり、おそらく『江湖風月集』の巻下が編集されていた当時、一了はいまだ開堂出世しておらず、首座位にあつたものであるうか。最初の「人の南浦に之くを送る」の偈頌は南宋末元初の動乱期に学人が元（蒙古）の進撃で荒れた南浦すなわち鄂州（湖北省）江夏県の南に存した南浦に帰郷するのを送る内容である。つぎの「遠峯」の偈頌は門人ないし道友に与えた道号頌と見られ、台州の天台山中の通玄峰に因んで空劫の一路を示している。

一方、鎌倉末期の元応元年（元の延祐六年、一三一九）に來日した破庵派の靈山道隱（仏慧禪師、一二五五—一三三五）がいまだ在元中になした偈頌を集めた『業識団』一卷にも一了の消息を伝える貴重な記事が存している。『業識団』によれば、

和_二承天禹溪和尚臘月三十日言韵。

歲月交結頭底月、着然於_レ此不_レ瞞_レ預、撒_二開両手_三臨_二風靄、刹海三千玉一団。

という偈頌が伝えられている。時期こそ不明ながら、この偈頌によって一了が雪竇山のみでなく蘇州平江府吳県西北の承天能仁禅寺にも住持していたことが判明する。道隱は無準下の雪巖祖欽（慧朗禪師、一二八七）の法嗣であり、おそらく祖欽の法を嗣いで後に承天寺の一了のもとにも投じているものであるう。また状況からして、一了は十刹位の雪竇山に陞住する以前に甲刹のひとつであつた承天寺に遷住しているものと見られ、道隱は承天寺の一了に直に接し、一了が示し

た「臘月三十日雪韻」という偈頌に和韻しているわけである。すでに述べたごとく蘇州の承天寺には同門の開極法雲も住持していることから、虚堂門下では法雲と一了の二禅者が承天寺に入院していることが判明する。なお、蘇州の承天寺についてはすでに開極法雲の項で触れたのでここでは再説しない。

ちなみに『清容居士集』巻一一「律詩 七言」に、

昌上人、游京師、欲言禅林弊事、甫入国門、若使之去者。昌余里人、幼歲留吳東郡、遭老及穎秀自異者、多処其地。以余所識聞、若承天了・天平恩・穹隆林・開元茂、皆可依止、遂各一詩以問訊。虎丘永、從游尤久。聞其謝世、末為一章以悼。

と題する七首の七言古詩が伝えられている。これは袁楠（字は伯長、清容居士、一一六六—一一三七）と同郷の明州慶元府（慶元路）鄞県の出身であった昌上人が事半ばにして逝去したことに對する哀悼の詩文である。昌上人は幼くして仏門に投じて蘇州に赴き、多くの禅者に参学したもので、歴参した禅者の一人に承天了の名が存しているが、これが承天寺の一了のことを指しているものと推測される。また天平恩とは蘇州吳県西二〇里の天平山白雲寺に住持していた断江覚恩のことであり、穹隆林とは蘇州吳県西南四五里の穹隆山福臻禅院に住持していた独木処林（祖林とも）のことであり、開元茂とは蘇州吳県西南三里半の開元寺に住持していた古林清茂（金剛幢、仏性禅師、一一六一—一一三九）のことにほかならない。また昌上人がもっとも久しく参随した虎丘永とは蘇州の虎丘山雲巖禅寺に住持していた東州寿永のことである。これらの諸禅者はいずれも松源派に属する人々であつて、一了のほかはともに松源下の滅翁文礼（天目樵者、一一六七—一一五〇）の法孫に当たつている。昌上人が最初に参学した一了が年齢的に最年長であつたものと見られ、元代初期に一了が覚恩・処林・清茂・寿永らと伍するかたちで蘇州に松源派の法燈を掲げていた消息が知られる。また七首の古詩の第一首には、

人説江湖少旧僧、懸崖深掛一枝藤。探苓欲取千年魄、擊石曾烹六月氷。天上星辰端歴歴、胸中樓閣自層層。相逢止説前朝事、知是松源第四燈。

として昌上人が承天寺の一了のもとに参学したときのさまを詠じた作が載せられている。「懸崖に深く掛る一枝の藤」とは一了の孤高な禅風を表現したものと見られ、袁楠は一了を明確に南宋末期（前朝）に松源崇嶽の第四燈を嗣いだ禅匠であつたことを讀んでいる。

ともあれ、『増集統伝燈録』には「四明雪竇禹溪予禪師」とあることから、その後、一了は実際に明州奉化県（元代は奉化州）の雪竇山資聖禪寺に住持したことは確実と見られ、雪竇山（乳峰）といえは禪宗十刹の一つに列せられる名刹であるだけに、一了が虚堂門下でもかなり勝れた禪者であったことが知られる。この点、雪竇山の寺志である『雪竇山資聖禪寺誌』一巻や『雪竇寺志略』一巻などに一了の名が存していないことは惜しまれる。『延祐四明志』巻一七「釈道攷中」の「奉化州寺院」には、

雪竇山資聖禪寺、州西北五十里。旧号「瀑布寺」、唐光啓中置。咸通八年重建、改「名瀑布觀音禪院」。宋咸平三年、請「今額」。至元戊子燬、住持僧善來重建。

とあるから、古くは雪竇山瀑布觀音禪院（瀑布寺）と称し、南嶽下の雪竇常通（八三四 九〇五）を開山としていたが、北宋の咸平三年（一〇〇〇）に雪竇山資聖禪寺の勅額を賜っており、雲門宗の雪竇重顕（隠之、明覚大師、九八〇 一〇五二）が化導を敷いたことで名高い。その後、元の至元二五年（一二八八）に伽藍が焼失し、ときの住持であった大慧派の石門善來によって重建されている。善來は大川普濟（一一七九 一二五三）の法嗣であるから、時期的に一了が雪竇山に住持したのは善來と前後する頃と見てよいであろう。

ところで、『増集統伝燈録』巻五「四明雪竇禹溪予禪師」の章には、わずかに一了がなしたものとして、

上堂。如何是仏、即心是仏。与麼会便不是。如何是仏、即心是仏。与麼会方始是。金不博金、水不洗水。両三行鷹冷雲辺、七八葉蘆秋色裏。

という一上堂が載せられているにすぎない。おそらく一了が雪竇山に住持していたときになした上堂であろうが、即心是仏の道理を如何にとらえるべきかを示したものであり、晩秋の風景を踏まえて境涯が詠われている。

いま一つ『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻上の「讚仏祖 名賢附」には一了のものとして、

釈迦 誕生。禹溪了。

雲門一棒不虛施、扶起瞿曇小厮兒、義出「尊年」重滌水、洗它四十九年非。

という釈尊の降誕会（誕生仏）になした偈頌が収められている。これは雲門宗祖の雲門文偃（匡真禪師、八六四 九四九）の古則を踏まえた頌古であって、一了に関する貴重な作ということになる。

- (1) 『業識団』一卷は国立国会図書館内閣文庫や京都大学図書館に所蔵されており、詳しくは拙稿「靈山道隱と『業識団』について」、『駒澤大学仏教学部論集』第二八号を参照されたい。
- (2) 当時、雪竇山に住持した禪者としては、南宋末期に破庵派の無準師範や松源派の大歇仲謙（一一七四—一二四四）があり、楊岐派の大夢徳因が知られており、また師範の高弟として希叟紹曇らも化導を敷いている。元代初期には一了や石門善來のほかに、善來と同門に当たる野翁炳同（少野、一一三三—一三〇二）なども住持しており、その消息は『牟氏陵陽集』卷二四「野翁禪師塔銘」によつて知られる。

(6) 葛廬浄軍

法諱は浄軍であり、道号は葛廬あるいは葛廬と称しているが、その郷関や俗姓および参学の過程などについては定かでない。ただし、その郷貫については後に述べるごとく杭州（浙江省）錢塘県の出身であったものらしい。江戸初期の『正誤宗派図』四においては「東山葛廬浄軍」とあつて、浄軍という法諱とともに東山という住持地が付されている。浄軍について立伝する燈史としては『増集統伝燈録』卷五「葛廬軍禪師」の章のみにすぎず、しかもその住持地が記されていない上、わずかに一頌が伝えられるのみである。

『虚堂和尚語録』卷四の「靈隱立僧普説」は侍者浄軍編とあるから、智愚が曹洞宗宏智派の東谷妙光（一一五三）に招かれて宝祐元年（一一五三）に杭州錢塘県の北山景德靈隱禪寺で立僧普説をなした際、浄軍は侍者として智愚に随侍していたことが知られる。このとき智愚は靈隱寺山内に存した法祖松源崇嶽の塔頭である鷲峰庵に閑居していた時期に当たるから、浄軍は智愚に随侍して鷲峰庵に在つて化導の助化をなしていたことになる。無著道忠は『虚堂和尚語録梨耕』卷一一「靈隱立僧普説」において、

浄軍。後六偈頌。廿七文。有浄軍蔵主遊方偈。又後七後録真贊。一文。有浄軍蔵主請真贊。

と記しており、浄軍に関する簡略な考察を加えている。同じく『虚堂和尚語録』卷一〇「後録」の「真贊」には、

浄軍蔵主請

容易肯人、難与共語。竹篋頭惜之如金、禅床角委之如土。浄軍知蔵善知機、電光影裏分實主。

という眞實が存している。その後、浄軍は智慧の席下で蔵主（知蔵）を典つていたことが知られ、この作は浄軍が智慧の頂相に贊を請うた際、智慧がこれに応じて示した自贊にほかならない。智慧は「浄軍知蔵、善く機を知り、電光影裏、實主を分かつ」と称えているから、浄軍の力量を高く評価していたことが知られる。ところで、大応派（大徳寺派）の一休宗純（狂雲子、暗驥、一三九四—一四八一）の年譜である『東海一休禪師年譜』の「長祿三年己卯」の条に、

師六十六歳。或人売虚堂祖翁唐本画像。上有自贊曰、容易肯人、難与共語。竹篋頭惜之如金、禅床角委之如土。浄軍知蔵善知識、電光影裏分實主。善知識、電光影裏分實主。休子 歌叟休子ト云也 率金購、以捨酬恩常住。時像猶在京。

という興味深い記事が残されている。この記述によると、長祿三年（一四五九）にある人が中国で画かれた虚堂祖翁の画像すなわち智慧の頂相を宗純のもとに売りに来たものらしく、宗純がこれを閲覽すると上部に智慧の自贊が付されていた。このため宗純は金銭を払ってこれを買求め、酬恩庵の常住物としたというのである。

この宗純所持の写しが現在も京都大徳寺山内の酬恩庵に所蔵されており、毎日新聞社刊『大徳寺墨蹟全集』第一巻によれば「酬恩庵常住」として、

容易肯人、難与共語。竹篋頭惜之如金、禅床角委之如土。浄軍知蔵善知識、電光影裏分實主。浄軍蔵主請贊。景定丁卯春、浄慈虚堂書之。「智慧」(方印)。「息叟」(長方印)。「虚堂」(方印)

という自贊頂相が伝えられている。ただし、景定年間（一二六〇—一二六四）に丁卯の年は存しておらず、干支に基づけば丁卯は咸淳三年（一二六七）に当たるが、智慧が杭州の浄慈寺に住持していたのは景定五年（一二六四）正月から咸淳元年（一二六五）八月までであるから、おそらくこの贊が著わされたのは景定五年の春であつたと解するのが自然である。ただし、現存する頂相はかつて一休宗純が入手した原本ではなく、その複写本と見られることから、書写の段階で若干の誤写や補筆が存している可能性もある。いずれにせよ、この頂相によって浄軍が浄慈寺の智慧のもとで蔵主の職を勤めていたことが判明し、しかも智慧の信認を得てその境界を深く認められていた消息も知られる。智慧が蔵主の浄軍に付与した自贊頂相は、おそらく浄軍が示寂した後、持ち主が転々とし、何らかの因縁で日本に伝来され、いつしか宗純のもとに齎されたものである。また、まさに希有にしてその頂相贊が現今に知られるわけである。

また『無象照公夢遊天台偈軸并序』によれば、景定三年（一二六二）九月に台州（浙江省）天台山の石橋（石梁瀑布）に

登った日本僧の無象静照（法海禅师、二二三四—二三〇六）がなした詩偈に寄せた作として、

銭塘、浄軍。

方広堂前煮石茶、今開夢眼、傲晨霞、機先拈起玻璃盞、满面春風爛漫花。

倒携霜竹上天台、万壑雲山一卓開、扶起半千沈寂者、竿頭進步轉身來。

という二首の偈頌が伝えられている。静照は鎌倉の出身で京都東福寺の円爾に参じた後、建長四年（南宋の淳祐二年、一二五二）に一九歳で入宋しており、松源派の石溪心月（仏海禅师、？—二五六）について法を嗣いだ禅者であり、その後は久しく智愚のもとに参随している。先の偈頌によれば、浄軍は在宋中の静照と道交を持っていたことが知られるとともに、その出身が銭塘すなわち杭州銭塘県であったことも判明する。偈頌では花が咲き乱れる春の風光に満ちた天台山の方広寺で石橋の五百羅漢（半千の沈寂者）に献する茶を煎じて供養する静照の消息が詠じられている。

さらに『虚堂和尚語録』卷七「偈頌」には、やはり浄軍が蔵主として智愚の席下でなした消息として、

浄軍蔵主遊方。

叢林荒落水雲寒、風味辛酸話轉難、隱隱一枝天外去、不知何地折人安。

という偈頌が存している。これも門下で蔵主を勤めていた浄軍が行脚遊方のためにその下を去る際、智愚が餞別に与えたものであることが知られ、智愚は「隱隱たる一枝、天外に去る、知らず何れの地にて人を折んで安んぜん」と述べて浄軍の行く末に期待を込めている。無著道忠は『虚堂和尚語録梨辨』卷三「真贊」においても、

浄軍蔵主請。前六偈頌。廿七文右。有浄軍蔵主遊方偈。忠曰、浄軍号葛廬、嗣虚堂。

と記しており、伝記面の詳細は何ら記していないものの、浄軍を明確に智愚の法嗣として扱っている。

葛廬。

霖雨起巖阿、斯民擊壤歌、自從三顧後、枝蔓怎生多。

虚堂叟書。「虚堂」(方印)

玉仲ノ印、宗琇平、休々平、字不分明。

という墨蹟の写しが伝えられている。この偈頌は残念ながら、『虚堂和尚語録』には収められていないものであり、ここにいう葛蘆が浄覃の道号を意味するのであれば、この墨蹟は浄覃に与えた道号頌の類いといつことにならう。

また松源派の滅翁文礼(天目樵者、一一六七—二五〇)の法嗣である石林行肇(一一三〇—一二八〇)は景定五年(一二六四)三月三日に湖州(浙江省)帰安県の思溪法宝資福禪寺(古くは思溪円覚禪院)に住持しているが、『石林和尚語録』巻上「思溪法宝資福禪寺語録」によれば、

謝古澤・葛蘆・竹潤・芝田孚首座・上堂。澤之上、潤之阿、有二曲凌清波。彷彿佛梅花引、依依條條紫芝歌。拍禪床、二下云、
知音不在葛藤窠。

という上堂が収められている。行肇は咸淳五年(一二六九)頃に隆興府(江西省)武寧県西一八〇里の黄龍山崇恩禪寺に遷住しているから、この上堂はそれ以前になされたものである。かつて行肇は同門に当たる冰谷衍(？、一二六七)や横川如珙(行珙とも、一一三三—一二八九)とともに杭州錢塘県の靈隱寺の鷲峰庵に閑居中であった智愚のもとを訪れた因縁が存しており、当時からすでに浄覃とも交遊が存したものであるうか。ただ、残念ながらこのとき浄覃とともに法宝資福禪寺の行肇のもとに集っていた古澤・竹潤および芝田孚首座らについては如何なる素性の禪者なのか定かでない。

ところで、『正誤系派図』では浄覃に関して「東山」の地名を冠しているが、ここにいう東山が如何なる禪寺を指しているのかは明確でない。あるいは智愚の東山閑居期とも関わる寺かも知れず、明州鄞県東南四〇里の東山慧福禪寺とも見られるが、おそらく閑極法雲の項でも触れた越州(紹興府)上虞県西南五四里の東山国慶禪院のことを指しているのではないかと推測される。

つぎに問題とすべきは浄覃のことではあるが、『増集統伝燈録』巻五「葛蘆覃禪師」の章には、

頌(傳大士講經公案)。双林大士太無端、又向梁朝露一斑、經旨未分玄路絶、一揮案上動龍顔。

という「傳大士講經」の古則に対する七言の頌古一則のみが収められているにすぎず、上堂語などは載せられていない。

ところが、幸いに宋元代の禅僧の頌古を集大成した『禅宗頌古聯珠通集』には、紹興路(浙江省)山陰県の天衣万寿禪寺の曇庵普会が增收した部分に「葛蘆覃」の作として浄覃のなした頌古をいくつか収録している。すなわち、巻三「菩薩機縁」には、

双林善慧大士、因梁武帝請講經、士升座、以尺拊案一下、便下座。武帝愕然、詰公乃問、陛下会摩。帝云、不_レ会。詰云、大士講經竟。

双林大士太無端、又向梁朝露一斑、經旨未分玄路絶、一揮案上動龍顏。

という頌古が収められているが、これは先の『増集統伝燈録』に所収されているものと同一である。

また巻六「祖師機縁」の「東土諸祖」には、

達磨大師曰、吾法於三千年後、未_レ曾移_レ易_レ一絲毫許。

東西縱目乾坤闊、玉露澄秋氣宇高、山是山兮水是水、何曾移_レ易_レ一絲毫。

が収められており、菩提達磨が伝えた仏法が三〇〇〇年後も何ら変わることなくつづくという法の普遍性を示している。

巻七「祖師機縁」の「東土諸祖」には、

六祖慧能大師（中略）因五祖示衆索_レ偈、欲_レ付_レ衣法。堂中上座神秀大師、呈_レ偈曰、身是菩提樹、心如明鏡臺、時時勤_レ拭、莫_レ遣_レ有_レ塵埃。師和_レ偈曰、菩提本無樹、心鏡亦非臺、本來無_レ一物、何假_レ私_レ塵埃。祖默而識_レ之、夜呼入_レ室、密示_レ心宗法眼、伝_レ付衣鉢、令_レ渡_レ江。過_レ大庾嶺、南歸_レ曹溪、開_レ東山法門。

師資縁有_レ来由、明鏡非_レ臺語暗投、壞_レ却少林窮_レ活計、機声揺_レ月過_レ滄洲。

という頌古が収められており、これは五祖弘忍のもとで六祖慧能が神秀（大通禪師、？七〇六）との間で詩偈の作成により伝法を得た消息を語るものである。

巻一七「祖師機縁」の「六祖下第四世之四」には、

秀州華亭船子德誠禪師（中略）山（夾山）乃散_レ衆、直造_レ華亭。船子纔見便問、大德住_レ甚麼寺。山曰、寺即不_レ住、住即不_レ似。師曰、不_レ似、似_レ箇甚麼。山曰、不_レ是目前法。師曰、甚処学得来。山曰、非_レ耳目之所_レ到。師曰、一句合頭語、万劫繫_レ枷。師又問、垂_レ糸千尺、意在_レ深潭、離_レ鈎三寸、子何_レ不_レ道。山擬_レ開_レ口、被_レ師一橈打_レ落水中。山纔上_レ船、師又曰、道道。山擬_レ開_レ口。師便打。山豁然大悟、乃點頭三下。師曰、竿頭糸線從_レ君弄、不_レ犯_レ清波意自殊。山遂問、抛_レ綸擲_レ釣、師意如何。師曰、糸懸_レ淥水、浮定_レ有_レ無_レ之意。山曰、語帶_レ玄而無_レ路、舌頭談而不_レ談。師曰、釣_レ尽_レ江波錦鱗始_レ馮、山乃掩_レ耳。師曰、如是如是。

朱涇深处泛_レ扁舟、伶俐闍黎上_レ直鈎、劈_レ口一橈空宇宙、遠_レ山疊疊水悠悠。

という頌古が収められており、これは青原下の夾山善会（伝明大師、八〇五—八八一）が船子徳誠のもとに参じて法を得た「夾山大悟」の因縁を賛したものである。

卷一九「祖師機縁」の「六祖下第四世之六」には、

趙州因僧問、狗子還有「仏性」也無、師曰、無

狗子仏性趙州無、呂公一箇葉胡盧、接來医却人間病、大死一回方見渠。

として南嶽下の趙州從諗の「趙州狗子」の古則すなわち「趙州無字」の公案に対する頌古が存している。

卷二三「祖師機縁」の「六祖下第五世之三」には、

福州靈雲志勳禪師、初在「瀉山」。因見「桃花」悟道、有偈曰、三十年來尋劍客、幾回落葉又抽枝、自從「見桃花」後、直至「如今」更不疑。瀉曰、從「縁悟達」、永無「退失」、善自護持。

紅入「芳蹊」錦色鮮、酌然「一点不」相讓、物歸「元主」自投合、誰謂靈雲著「眼看」。

として瀉山下の靈雲志勳による「靈雲見桃花」の古則に対する頌古が存している。

卷三七「祖師機縁」の「六祖下第十世之余」には、

雪竇頌「革轍二門」曰、劫火曾洞然、木人淚先落、可憐傳大士、処処失「樓閣」。徳雲開古錘、幾下「妙峯頂」、喚「它癡聖人」、擔「雪共填」井。祖仏未「生前」、已震「塗毒鼓」、如今誰案「聞」、請試分「回互」。宛転復宛転、真金休「百鍊」、喪「却那耶離」、無人解看「箭」。

風卷浮雲尽、青天絶「点埃」、山川俱在「目」、何必上「高臺」。

として雲門宗の雪竇重顕の「革轍二門頌」に対する頌古が存している。

卷四〇「祖師機縁」の「六祖下第十六世」には、

臨安府径山宗杲大慧普覺禪師、師至「天寧」。一日聞「悟陞」堂拈、僧問「雲門」、如何是諸仏出身処。門曰、東山水上行。若是天寧即不然。忽有「人問」、如何是諸仏出身処、只向「他道」、薫風自「南來」、殿閣生「微涼」。師於「言下」忽然前後際断。

諸仏東山水上行、閑中無事日偏長、薫風私私來無「已」、無「意」涼人人自涼。

として楊岐派の大慧宗杲（普覺禪師、一〇八九—一一六三）が「東山水上行」の話頭によって大悟した機縁を頌賛している。

同じく卷四〇「祖師機縁」の「六祖下第二十二世」には、

臨安府径山石溪心月仏海禪師、僧問、如何是仏。師曰、矮子看戲。

魏巍丈六紫金容、百戲場中有變通、矮子看来眉卓豎、鏡鎚無孔舞春風。

という頌古が載せられている。おそらく浄軍は智愚に参学していた前後に同じ松源派の石溪心月（仏海禪師、一二五六）にも径山にて参学する機会が存したのではないかと推測される。

同じく卷四〇「祖師機縁」の「六祖下第二十二世」には、

臨安府径山虚堂智愚禪師、垂語曰、己眼未明底、因甚麼將虚空作布袴著。画地为牢、因甚透者箇不過。入海算沙底、因甚向針鋒頭上翹足。

解把虚空作袴单、地牢画出透還難、針鋒頭上翹双足、猶对春風話歲寒。

という頌古が載せられている。これは閑極法雲の頌古と共に載せられており、師の智愚の「虚堂三転語」の古則を頌賛したものであり、浄軍が明確に智愚の法嗣であったことを示す内容といつてよい。

同じく卷四〇「祖師機縁」の「未詳承嗣」には、

潭州茶陵郁山主、不曾行脚。因廬山有化土至、論及宗門中事、教令看、僧問法燈、百尺竿頭如何進步。法燈曰、噫。凡三年、一日乘驢度橋、一踏橋板而墮、忽然大悟。遂有頌曰、我有神珠一顆、久被諸塵封鎖、今朝塵尽光生、照見山河万朵。因此更不游方。

一懶成狼藉、茶州路転迂、却将泥彈子、認作夜明珠。

という茶陵郁山主が一化主をして大悟に到らしめた機縁に対する頌古が存している。このように『禅宗頌古聯珠通集』によれば、浄軍の作として実に一一もの頌古が知られるわけであり、同門の閑極法雲や宝葉妙源とともに浄軍もまた詩偈にすぐれた詩僧であったことが知られる。

ところで、『円通大応国師語録』の末尾に載る松源派の明極楚俊が寄せた跋文の中に、

堂之下、葉葉有光、如宝葉源公・竹窓喜公・閑極雲公・葛廬曇公・靈石芝公、皆有語行於世者。

という記事が存している。ここに「葛廬曇公」とあるのは明らかに「葛廬暈公」の誤りであるが、主な智慧の高弟らとともに浄暈にもそのことはをまとめた語録の類いが存したらしいことが知られる。おそらく『葛廬和尚語録』といった表題であったものと見られるが、先に示したごとく現今に伝えられる浄暈の頌古がかなりの分量に及んでいることから、これらの頌古はともに『葛廬和尚語録』に収録されていたものから引用されたと思われる。浄暈の上堂・小参が全く現今に知られないのは惜しまれるが、あるいは楚俊なども『葛廬和尚語録』を目の当たりにしていたのかも知れない。

(1) ただ、明末清初に曹洞正宗の位中浄符によつて編纂された「祖燈大統」卷七七「葛廬暈禪師」の章によれば、北宋末期に活躍した楊岐派の五祖法演(？、一一〇四)の系統で、天目斎・懶牛和・竹林宝・竹林常・海西庵庵海と次第する禪者として同じく葛廬暈の名が存していることである。すなわち、「祖燈大統」の「葛廬暈禪師」の章には、

葛廬暈禪師、拳下僧問「石溪」、如何是仏。溪曰、矮子看レ戲話。頌曰、巍巍丈六紫金容、百戲場中有二變通一、矮子看来眉卓豎、鉄鎚無レ孔舞二春風一。

とあり、松源派の石溪心月が一僧と交した問答に因む一頌が載せられている。ただ、この頌古は『禪宗頌古聯珠通集』に載る葛廬暈の頌古の一つであり、そこでは明らかに葛廬暈は智慧の法嗣であることが確認されることから、おそらく『祖燈大統』の編者である位中浄符が何らかの事情で誤つて容庵海の法嗣として葛廬暈を載せてしまったものと推測される。

(2) 竹内尚次「江月宗玩 墨蹟之写 禅林墨蹟鑑定日録」の研究では「元和二丙辰下」の箇所(三一九頁と三二一頁の両所)に「葛廬之偶頌」(ただし、一つは葛廬とある)として、この墨蹟が記されている。なお、ここに「玉仲ノ印、宗琇乎、休々乎、字不分明」と注される玉仲とは、おそらく大徳寺第一二二世の玉仲宗琇(休々子、仏機大雄禪師、一五三二—一六〇四)のことであろうが、この墨蹟と宗琇との関わりについては定かでない。

『正誤宗派図』に載る法嗣

つぎに『正誤宗派図』に挙げられている智慧の法嗣で、『増集統伝燈録』に載せられている禪者を除く残りの人々について、それぞれ記事を整理してみることにしたい。ただし、報恩晋芝妙源と定州宝業道源はすでに指摘したごとく明らかに宝葉妙源(晋之)ひとりのことであるうから考察からは除くものとする。したがって、ここで取り上げるのは象先可観・

妙相字菴（ただし、考察では寂庵妙相）・南浦紹明・友常禪会・秋岩徳新・東州惟俊・此軒如足・虚菴実・潜溪妙広・晦叟法光・無示可宣・平山本立・東洲瑞蔵主という併せて一三人の法嗣である。

(7) 象先可観

法諱が可観であり、道号を象先と称している。『正誤宗派図』四には「資福象先可観」と記されている。この人については『虚堂和尚語録』にまつたく該当する記事が見い出せない。わずかに咸淳三年の冬に南浦紹明が帰国する際に中国の道友が饒別に贈った詩偈をまとめた『一帆風』には、

又（送南浦明公還本国）。象山可観。

烟波尽处見青山、的々南方有路還、仏法固知無彼此、普天風雪一般寒。

という可観が贈った作が伝えられている。ここにいう象山とは地名であり、可観が智愚と同じ明州象山県の出身であったことを示すものあり、出身地の象山にちなんで道号を象先と称したものであろう。おそらく可観は同郷の智愚を慕ってその門に投じたものと見られ、径山において日本僧の紹明とも交友を持っていたわけである。その住持地とされる資福とは、おそらく湖州武康県東南三五里の翔鳳山資福顯忠禅寺のことを指しているものと見られる。ちなみに同治一三年（一八七四）に刊行された『湖州府志』巻二八「輿地略 寺観下」の「武康県」には、

顯忠崇孝資福寺、在県東南三十五里。宋紹興二十六年、楊和王沂中建。高宗賜御書寺額。元至正八年重建。明永樂間燬。崇禎末僧曇機結茅於此、恢復寺址。国朝康熙五年、殿堂廊宇告成。備極宏麗。県志、寺有御書楼・洗馬池・鳳山閣・禹泉亭・鉢孟案・万工池。

とあつて資福寺の沿革が知られる。また『扶桑五山記』一「大宋国諸寺位次」の「甲刹」によれば、

資福 湖州 浙江 顯忠禅寺、開山如宝禅師。忠興破菴禅師。翔鳳山、愚泉亭。

と記されており、資福寺が虎丘派（破庵派祖）の破庵祖先（密印、一一三六—一一二一）を中興開山とし、当時、湖州の甲刹に列していたことが知られているだけに、可観がそうした名刹に住持しているのは注目される。

(1) 『破菴和尚語録』に「湖州鳳山資福禪院語録」が収められており、破庵祖先が晩年に資福寺に入寺していることが知られる。このためか資福寺には破庵派の禪者として、東巖淨日(一一二二—一一三〇八)の法嗣である無言承宣や、方山文宝の法嗣である一源靈が元代に住持している。

(8) 寂庵妙相(妙相字庵)

この人についても『虚堂和尚語録』にまったく該当する記事が見い出せない。『正誤宗派図』四には「妙相字菴」と記されるのみである。ただ、妙相字庵という表記は不自然にも見え、あるいは道号と法諱が逆であって、字庵妙相とすべきであるうか。一方、同じ『正誤宗派図』三には「径山偃溪広闡」の法嗣としてきわめて類似した「連雲寂菴 相」の名が載せられている^①。

この点、興味深いのは咸淳三年の冬に南浦紹明が日本に帰国する際、中国の道友が饒別に贈った詩偈をまとめた『一帆風』^②、

又(送南浦明公還本国)。

叙南妙相。

十年末国自奔馳、識得奔馳人便帰、碧落之碑無贗本、鉢華囊浦泛杯時。

という妙相がなした作が伝えられていることである。叙南については一に劍南(福建省)の誤写ではないかとも見られるが、おそらく叙州(四川省)の南部を意味しているものと解しておきたい。これによれば、妙相は四川出身のいわゆる川僧ないし蜀僧であったことになろう。しかも『一帆風』では妙相を道号ではなく明確に法諱として用いており、当時、叙南の出身であった妙相が確實に径山の智愚の席下において紹明とも交友をなしていた事実が知られる。

また『墨蹟之写』一九「元和六、二冊之内下」には、

迷時行脚渠因我、悟後還家我累渠、溢浦水明霜夜月、担頭不帶別人書。

送三人之廬山。

寂菴妙相和尚之作。

大慈広照禪師真蹟也。宗印証焉。「長方印」「方印」

という寂菴妙相という禪者の偈頌が伝えられている。これは江西の廬山に赴く人を送る偈頌であるが、妙相の直筆が伝わ

つていたのではなく、安土桃山期に大徳寺派の古溪宗陳（蒲菴、大慈広照禪師、一五三二—一五九七）が妙相の作を筆写した真蹟であり、そのことを同じ大徳寺派の月岑宗印（片菴、大興円光禪師、一五六—一六二）が江戸初期に証明したというものである。しかも、この墨蹟でも法諱が妙相であり、道号は字庵ではなく寂庵となっている。

ところで、杭州錢塘県西の上天竺天臺感観音教寺（上天竺寺）の住持であった天台宗の我庵本無（仏護言覚憲慈匡道大師、一一八六—一三四三）が撰した「大日本国特賜仏燈国師約翁和尚無相之塔銘並序」には、

乃更遊_レ宋、初達_二台之九山_一、首見_二寂窓照於育王_一。一時宗匠、天童石帆衍・淨慈東叟頴・靈隱虚舟度・径山蔵叟珍・簡翁敬・覚庵真、咸推器重。于_レ時名勝、照晦機・万一山・本末宗・相寂庵、皆案_レ与_レ之遊。

とあって、大覚派の蘭溪道隆の門人である約翁徳俊（仏燈国師、一二四五—一三二〇）が入宋して交流した禅者の中に妙相の名が見い出せる。この点は、『延宝伝燈録』巻一六「京兆南禅約翁徳俊国師」の章でも、

辞入_二支那_一、謁_二寂窓照・石帆衍・東双頴・虚舟度・蔵双珍・簡翁敬・覚庵真_一。与_二晦機照・一山万・末宗本・寂庵相_一友。經_二八年_一帰。

とあり、また、『本朝高僧伝』巻二四「京兆南禅寺沙門徳俊伝」でも、

欲_レ遊_二支那_一、駕_レ舶径達_二台之九山_一。首見_二寂窓照公於育王_一、尋謁_二天童石帆衍・淨慈東叟頴・靈隱虚舟度・径山蔵叟珍・簡翁敬・覚庵真_一、咸推器重。又一時大宗匠晦機照・一山万・末宗本・寂庵相等、皆案_レ与_レ之遊。往_二来呉越_一者八年、所_レ聞滋勝、所_レ詣益遠、属乎宋末運_レ辺烽日警_レ禪刹擾紛、遂返_レ楫而東。

と記されている。徳俊は日本の文永年間（一二六四—一二七四）に入宋したものらしく、禅宗五山の住持のもとに歴参したことが伝えられている。台州から明州鄞県に到った徳俊は阿育王山広利禅寺において虎丘派の寂窓有照に相見し、ついで天童山景德禅寺において松源派の石帆惟衍に参じており、さらに杭州錢塘県に赴いて南屏山淨慈報恩光孝禅寺において大慧派の東叟仲頴（？、一二七六）に、北山景德靈隠禅寺において松源派の虚舟普度（一一九九—一二八〇）に、そして杭州余杭県の径山興聖万寿禅寺において大慧派の蔵叟善珍（一一九四—一二七七）らに参学している。このとき徳俊は在宋中に名声を馳せ、多くの禅者と道交を結んだものらしく、勝友として妙相の名も載せられている。徳俊はほかに大慧派の晦機元照（仏智、一二三八—一二三九）や一山了万（無意、一二四一—一三二二）さらに松源派の末宗徳本らとも道交をなしていたこ

とが知られるから、妙相は元熙や万らとほぼ同世代であったものと見られる。徳俊が南宋の地に留まっていたのは八年間であったとされ、南宋末期の混乱に禅宗叢林も紛擾に墮したため帰国したとされる。徳俊と交遊していた当時、おそろく妙相はいまだ諸寺に住持していなかったものと見られ、五山などの大刹で叢林の要職を歴任していたものであろう。

妙相が果たして智慧の法を嗣いだ門人であったのか、広聞の法を嗣いだ門人であったのか、あるいは妙相字庵と寂庵妙相がまったくの別人であったのか、明確には判断し難いものがある。しかしながら、少なくとも叙南の出身であった妙相が径山の智慧の席下に在って日本の紹明と交友を持っていたことは確実であり、おそらく妙相は広聞と智慧の両尊者のもとに参学していたものと見られ、とくに広聞が示寂して以降は親しく智慧のもとに在ったものであろう。後に妙相が開堂出世した際に、広聞と智慧の何れに嗣承香を炷いたのが明確でなかったのかも知れない。いずれにせよ、妙相は日本から赴いた紹明と智慧のもとで交遊を結び、さらに遅れて入宋した徳俊とも親しい交流をなす機会が存したことが知られるわけである。

その後、妙相は連雲寺という禅刹に住持したものらしいが、ここにいう連雲とはおそらく処州(浙江省)に存する連雲山を指しているものと見られる。すなわち、雍正十一年(一七三三)に刊行された『処州府志』巻一「封域志」の「山川 麗水県」の項には「大連雲山、一名沙溪尖。巖巖陡絶、与青田小連雲山相界」とあり、同じく「山川 青田県」の項には「小連雲山、延袤数十里、有洞二、嘗出白雲。東曰龍鬚、南曰韓山」と記されている。また光緒三年(一八七七)に刊行された『処州府志』巻二「封域志中」の「山川 麗水県」には、

大連雲山、県南四十里 名勝志、西南六十里。巖巖陡絶、上連雲霄、沙溪之出水焉 麗志。一名沙溪尖。与青田小連雲山相界。西南爲緑巖洞、懸流削壁、飛練飄珠、凡数十丈、曰陳溱禱雨處。

とあり、同じく「山川 青田県」には、

大連雲山、県西南百二十里。山高出雲故名。小連雲山、延袤数十里、連大連雲。上有洞二、嘗出雲。東曰龍鬚、南曰韓山。

と記されている。これらによれば、処州の麗水県南四〇里から青田県西南二二〇里にかけて大連雲山(沙溪尖)が存し、これに青田県の小連雲山が連なっていることが記されている。名の由来は山が高く雲が連なって湧き起ることに因んでおり、大連雲山には西南に緑巖洞が存し、小連雲山にも東に龍鬚洞、南に韓山洞が存していることが記されている。一方、

雍正一一年刊『処州府志』卷二「建置志」の「寺觀 青田県」や光緒三年刊『処州府志』卷九「古蹟志」の「寺院 青田県」には「連雲寺 県西二百里。唐乾寧間建」とあり、簡略ながら青田県西二〇〇里に存した連雲寺のことが記されている。処州青田県の連雲寺は唐の乾寧年間（八九四—八九八）に創建されたと伝えられるが、おそらくこの連雲寺こそ妙相が住持した裨刹に当たるものと推測される。実際に妙相の後にも元代に破庵派の無外履中や松源派の舜田明孜などが連雲寺に化導を敷いている。

ところで、妙相に関しては、実際に『江湖風月集』巻上に「叙南寂菴相和尚」として、

聽蛙。

雨余荒沼綠痕新、兩部嗚々徹曉鳴、枕上因思張學士、耳根輪我不聰明。

籃裡魚。

鬧裡和籃掇向人、腥風來自海門浜、時人知實不知價、換水忙々養錦鱗。

演史。

紛々平地起戈鋌、今古山河共一天、莫謂是誰功業大、恐妨林下野人眠。

聽琴。

妙音妙指究全功、絶岳蒼髯樹々風、一曲未終天似洗、希声聞在不聞中。

送人之廬山。

錯來行脚渠因我、悟後還家我累渠、溢浦水明霜夜月、担頭不帶別人書。

という五首の偈頌が伝えられている。『江湖風月集』においても「一帆風」と同じく妙相は叙南の出身とされており、寂庵を道号として載せている。蛙の鳴声、籃の中の魚、『史記』を演説する講談師、琴の音を聴くさまなどを詠じており、とくに最後の「人の廬山に之くを送る」の偈頌は若干ながら文字の相違が見られるものの、先の『墨蹟之写』に載る墨蹟にはかならない。

ところが、『新編江湖風月集略註』巻上では「叙南寂菴相和尚」について「連雲寂菴妙相、嗣『偃溪』住『連雲』。統伝燈聞偃溪派下、不載之」という注記をなしている。これによれば、寂庵妙相は智愚の法嗣ではなく、大慧派の偃溪広闡（仏智禪師、一一八九—一二六三）の法を嗣いだ門人ということになる。この点は『正誤宗派図』三においても偃溪広闡の

法嗣として「連雲菴相」の名が載せられており、同様の説に立っていることが知られる。

さらに『江湖風月集』の巻末には「別本増入之頌」といつかたちで「寂菴相和尚」の作として、

鉄面

八金剛杵力難摧、此相何曾墮母胎、堪笑嶺頭明上座、線針眼裡出頭來。

郁山主。

一「擲溪橋自起來、虛空供笑滿驢腮、破珠無復重求影、明日前村又有鶯。

という二首の偈頌が別本から増入されている。最初の偈頌は明上座という人に鉄面の道号を与えた際の作と見られ、六祖下に連なった蒙山道明の大庾嶺の故事を踏まえて示している。つぎの偈頌は茶陵郁山主が橋上より墮ちて大悟した故事を詠じたものである。したがって、妙相には全部で八首の偈頌が伝えられていることになり、この人が偈頌の名手として名高かったことが察せられる。

ところが、さらに日本でまとめられた『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻上の「讚仏祖 名賢附」にも、

魚籃 寂庵相 元人、嗣「虚堂」。

鬧裡和籃擲向人、腥風來自海門浜、時人知貴不知價、換水忙々養錦鱗。

という寂庵妙相の偈頌が載せられている。この偈頌は『江湖風月集』に収録されている「籃裡魚」の作と同じであるが、ここでは寂庵妙相を「元の人、虚堂に嗣ぐ」と注記しており、大慧派の偃溪広闡の法嗣ではなく、明確に智愚の法を嗣いだ門人と位置づけている点は注目される。

同じく『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻上の「讚仏祖 名賢附」には、

豐照女。 寂庵。

路逢過客問龐公、曠劫箕裘一欸通、重振家風千仞險、節分都在蔗籬中。

豐照女。 寂庵。

公是心空及第婦、女能依樣畫娥眉、一家只了千家事、誰有閑錢買蔗籬。

という二首の偈頌を載せている。豐照女とは馬祖下の龐蘊（字は道玄、？ 八〇八）の娘であり、この仏祖贊は「豐照菜籃」

の公案に因むものである。

また『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻上の「亭宇 作造附」には、

含暉亭。 寂庵。

危闌曲々度寒風、海嶼烟嵐接漢空、眼力自知窮不到、臙篋双袖夕陽中。

問來亭。 寂庵。

鷗白烏玄在眼頭、相逢寧免扣端由、楚王城畔東流水、黃鶴樓前鷗鷺洲。

吸江亭。 寂庵。

吸乾大海簸紅塵、討何河頭墮死人、笑撫闌干誰是主、草蕪尽処是沙汀。

という三首の偈頌が載せられており、この中で「含暉亭」と「吸江亭」の偈頌は『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻三の「居処」にも収められている。含暉亭とは広闡や智愚が住持した径山興聖万寿禅寺に存する含暉亭のことであろうし、吸江亭とは鎮江府（江蘇省）丹徒県の焦山普濟禅寺に存した吸江亭のことであるが、問來亭については何れの禅刹に存しているのか定かでない。

『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻上の「寺観 峰嶺泉石岩湖橋附」には、

鉢孟峯。 元人、嗣虚堂。 寂庵相。

老盧颯下勢嵯峨、遞代相承著柄多、是我老來無氣力、從教風雨自揩磨。

という偈頌が載せられており、ここでも注記として妙相を智愚の法嗣として扱っている。鉢孟峯という名の景勝は諸地に存するが、おそらく径山興聖万寿禅寺に存する鉢孟峯のことであろうから、妙相が径山の智愚のもとに参隨していたとき作であろう。この偈頌は『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻三の「地理」にも収められており、やはり「寂庵 巻下、一本有相元人嗣虚堂六字」とあつて智愚の法嗣と註している。

『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻上の「節序 雨雪水月附」には、

除夜。 寂庵。

鐘窓屈膝送年窮、猶訝燒錢王老翁、三百六旬杜伎倆、破除尽在曉樓鐘。

という偈頌が載せられているが、これは「因親」青王諸兄弟頌「虚堂和尚歳夜示衆」成も軸、亦隨喜述之四頌」という破庵派の無学祖元（子元）の偈頌とともになされたものと見られ、ほかに松源派の水谷衍（？ 一二六七）と破庵派の月澗文明（永明、広行燈禪師、一二三八）がなした作も収められている。これは智愚の歳夜の示衆に対して四禪者が和韻した作の一つであり、軸装されていたことが知られるとともに、妙相が無学祖元らと交友していたことが知られる。

『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻上の「師弟」には、

送人之葬師。

寂庵。

爺死全無些慘顔、金毛伏爪虎威斑、重尋鬼窟通家耗、深挿一鍬雲外山。

という偈頌が載せられており、これは『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻一〇の「哀悼」にも収められている。

『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻中の「送行」には、

同事。

寂庵。

觀面明々万勿塵、才論去住便成乖、難磨共見拈花日、面皺只因陪笑來。

という偈頌が載せられており、これは『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻五の「法普 叔姪附」にも「送同事」として「菴相」の名で収められている。同事とは共に事をなす意であるから、おそらく得度などを共にした同参の者が行脚に赴くの見送った作であろう。

『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻中の「化士」には、

化士。

寂庵。

高擎鉄鉢出松関、一路風埃撲面顔、七仏已前儀式在、千家門掩万重山。

という偈頌が載せられており、これは勸募（勸化）のために諸地を巡る化主に与えたものであり、『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻五の「化士」にも収められている。

『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻中の「伎術」には、

浄書五戒。

寂庵。

子以書名識字無、定応不学嶺南廬、進歩前退後高叉手、此是唐書是梵書。

という偈頌が載せられており、これは文字を読めない者に対して嶺南の盧行者（慧能）に準えて五戒を浄書して与えたものであり、『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻四の「伎芸」にも「寂菴」の作としても収められている。同じく『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻中の「伎術」には、

印匠求。 寂庵。

不_レ与_レ尋常_二点劃_一同、亦非_二彫琢_一上論_レ功、看_二梁文彩_一全影_レ処、印_レ水_レ印_レ江_レ還_レ印_レ空。

淨道者。 寂庵。

謫降何年下_二九天_一、苜蓿布褐影_レ翻々、人間歴尽無_二仙骨_一、瓢裏金丹_レ転直_レ鉢。

という偈頌が伝えられている。印匠とは版を彫る職人と見られ、道者とは道教の道士のことであって、そうした伎術を具えた人に与えた作である。

また『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻下の「器用」に、

失_二鉢孟_一。 寂庵源。

黄梅宝鉢老盧_レ偷、狂被_二塗糊_一不_二到頭_一、今日莫_レ言_レ將_レ底_レ用、我儂元自飽_レ餉々。

とあるのも寂庵源ではなく寂庵相の作であって、『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻八の「道具」にも「寂菴」の作として収められている。これも六祖慧能が黄梅山で鉢孟を伝持した故事に基づく作である。

さらに『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻五の「道号」には、

拙翁。 寂菴。

言_二近_一実頭_二存_一古_二朴_一、機_二如_一木_二偶_一見_二淳風_一、挑_レ灰_レ弄_レ土_二東山_一老、却_二道_一先_二師_一語_レ不_レ工。

という偈頌が収められている。これは妙相がある禪者に拙翁という道号頌を付与した際のものであるが、具体的に如何なる禪者なのかは定かでない。ただ、破庵派無準下の靈山道隱（仏慧禪師、一二五五—一三三五）が日本に渡来する以前の詩文を集めた『業識団』の中にも「拙翁和尚問_二兜率_一三_レ関、継_二答_一之」の偈頌が収められていることから、拙翁という人は道隱と交流して「兜率三関」の公案をやり取りし合う仲であったことが知られる。あるいは妙相のもとに投じて道号頌を請うたのであれば、妙相の門人であった可能性も存しよう。

このように、『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』と『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』を通して実に二六首に及ぶ偈頌が妙相の作として載せられているわけであり、この人の偈頌が後の日本禅林にかなり珍重されていたらしい消息が判明する。すでに触れたごとく明極楚俊は『円通大応国師語録』の末尾に跋文を寄せた中で、

堂之下、葉葉有_レ光、如_レ宝葉源公・竹窓喜公・閑極雲公・葛屢曇公・靈石芝公、皆有_レ語行_二於世_一者。

と記しており、智愚の法を嗣いだ五人の禅者に語録が存したことを伝えているが、あるいはこのほかに妙相にも何らかのかたちで『寂庵和尚語録』といった表題の語録ないし偈頌集が編集され、南北朝期の日本禅林にも将来されていたのかも知れない。いずれにせよ、夢窓派の義堂周信は妙相を智愚の法嗣として位置付け、その偈頌の収集に意を注いでいたわけであり、仮に『寂庵和尚語録』が残されていれば妙相が広闡や智愚とどのように関わったのか、日本僧の紹明や徳俊らと如何に交遊したのか、あるいは連雲寺を始めとした住持地の上堂語その他も知られたことである。』

(1) ただし、『偃溪和尚語録』二巻には寂庵妙相とおぼしき禅者の記事は見られない。

(2) 竹内尚次『江月宗玩 墨蹟之写 禅林墨蹟鑑定日録』の研究』では、『元和六、二冊之内下』の箇所(八四三頁)には古溪宗陳「寂菴妙相和尚偈」として載せられている。

(3) 『龍宝山大徳禅寺世譜』によれば、古溪宗陳は大徳寺の第一一七世であり、月岑宗印は大徳寺の第一四二世である。少なくとも宗陳が存命の頃までは妙相の墨蹟の真蹟が大徳寺かその周辺に伝存していたものと思われる。

(4) 『景德伝燈録』巻二の目録に、『嘉泰普燈録』巻一九の目録には楊岐派の蓬庵端裕(仏智禅師、大悟禅師、一〇八五—一一五〇)の法嗣として、処州連雲行敦禅師の名が存し、また、『統伝燈録』巻三には、処州連雲道能禅師の章が存しており、端裕と同門の大観宗泉(牧喜、普覚禅師、一〇八九—一一六三)の法嗣である連雲道能も連雲山に住持している。

(5) 破庵派の天隱円至(牧隱)の『牧潜集』巻三「碑記」には元貞元年(一一九五)五月に記した「処州連雲寺中興記」が収められており、ここでは寺が創建されたのを唐の大中年間(八四七—八五九)とし、北宋の初めに禅刹となったとしているが、元代の住持としてはわずかに月臺・独峰・仁傑の名を挙げるのみである。また『黄学士文集』巻一三「記」の「経蔵広福院記」によれば、破庵派の虚谷希陵(西白、仏鑑禅師、一一四七—一三三二)の法を嗣いだ無外履中が元代中期に連雲寺に住持した後、婺州(浙江省)府城東一三五歩の蘭溪経蔵広福院に入院して経蔵を一新したことが知られる。『補統高僧伝』巻一三「習禅篇」の「明

虚堂智愚の嗣法門人について（佐藤）

六一

孜伝」によれば、

泰定初、始領_レ陀、如_二天台之淨惠・仙居之広度・処州之連山、皆師敷_レ座処。

とあるから、松源派の竺西妙坦（一二四五—一三二五）の法を嗣いだ舜田明孜も元代中期に連雲寺（連山）に住持していることが知られる。

(6) 『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』の「拙翁」の内容からすると、妙相は東山老すなわち虎丘紹隆のことや先師すなわち智愚のことを持ち出しているから、門人に与えた偈頌であったものと見られる。『業識団』の記載からすると、道隱は拙翁を和尚の肩書きで尊称しているから、道隱が来日する以前に拙翁は何れかの禅刹で住持を勤めていたのであろう。

(7) ちなみに「禅林墨蹟拾遺」五九に三井本家の所蔵として、

古_二朴江湖姓字郷、幾_二莖華鬢髮_一辺生、要_レ知_二事、無_レ能_レ処、玄路多_二從_二鳥道_一行。

龍嶼_二幸山賢_一禅徳、徽号拙翁請、虚堂智愚説_二半偈_一、表_レ而書_レ之。

景定壬戌春三月、書_二于柏岩獅子峯下_一。「智愚」息耕叟「虚堂」

という墨蹟が伝えられている。これは虚堂智愚が景定三年三月に金文山慧照寺（柏巖）の住持として龍嶼幸山の賢禅徳に拙翁の道号頌を書き与えた際のものであるが、ここにいう拙翁賢がここにいう拙翁である可能性も存する。『虚堂和尚語録』巻一〇「偈頌」には別に「賢侍者号木翁」という偈頌が伝えられているが、拙翁賢禅徳と木翁賢侍者が別人なのか否かは定かでない。また『虚堂和尚語録』巻八「臨安府淨慈報恩光孝禅寺後録」の編者の一人に参学紹賢があり、巻九「臨安府径山興聖万寿禅寺後録」の編者の一人に参学尚賢が存している。

(9) 南浦紹明

南浦紹明（円通大応国師、一二三五—一三三八）は駿河（静岡県）の藤原氏の出身であり、松源派（大覚派祖）の關溪道隆（大覚禅師、一二二三—一二七八）の門下として入宋し、智愚の法を嗣いで帰国している。その門流はやがて大応派として日本禅林の一大動脈として展開し、白隠禅を経て現今の日本の臨済宗に継承されている。紹明の存在は日本禅宗史上きわめて重要な位置にあり、この人が在宋中に智愚と関わった消息は取り分け重要なものがある。紹明の在宋中の動静については煩瑣にわたることから、別に論ずるものとし、本稿ではその事跡を省略しておきたい。

(1) 南浦紹明の入宋求法については拙稿「虚堂智愚と南浦紹明 日本僧紹明の在宋中の動静について」(花園大学『禅文化研究所紀要』第二八号 加藤正俊先生喜寿記念論集 に所収)を参照されたい。

(10) 友常禮会

この人は法諱が禮会であり、道号を友常と称している。江戸初期の『正誤宗派図』四においては「慈源友常禮会」とあって、慈源という住持地が付されている。『虚堂和尚語録』巻八「臨安府淨慈報恩光孝禅寺後録」には「参学道準・禮会・紹賢編」とあって、禮会が道準や紹賢とともに編者の一人になっているから、智愚への参学はかなり遅かった人らしい。無著道忠は『虚堂和尚語録梨耕』巻二五「淨慈後録」において、

道準、後七後録偈頌 三文 有_レ準侍者_レ帰省偈。禮会、未詳。紹賢、後七後録偈頌 三文 有_レ賢侍者_レ号_二木翁_一頌_上。

とあり、道準については『虚堂和尚語録』巻一〇「偈頌」の「準侍者帰省」を挙げ、紹賢についても同「偈頌」の「賢侍者号_二木翁_一」を踏まえて木翁紹賢と見定めているが、禮会に関しては未詳として何らの考察もなしていない。ちなみに咸淳三年に南浦紹明が日本に帰国する際に中国の道友が餞別に贈った詩偈をまとめた『一帆風』には、

又(送_二南浦明公還_二本国_一)。天台禮会。

高禪家近_二扶桑國_一、巨海遐征_レ驗_レ知識、年後生涯_レ自許長、孰知寸短難_レ知_レ尺。東西曠索六七年、兩華雲葉固瀟漫、鉄心一_レ触連機脱、玻璃盪面春芳妍。丸味果然非_二草々_一、如_二人飲_レ水_レ応_レ難_レ道、取_レ之_レ不_レ足用_レ有_レ余、地産_レ黄金_レ奚足_レ宝。了了了_レ了_レ没_レ可_レ尋、乘_レ時_レ歸去_レ蔵_二家林_一、胸中新語慎_レ勿_レ吐、故鄉易_レ動行人_レ心。

として禮会がなした比較的長編の詩偈が伝えられている。これによれば、天台の禮会とあるから、禮会は台州天台県の出身であったものらしく、淨慈寺から径山において智愚に参随し、紹明とも交流を持っていたものである。したがって、禮会は虚堂門下でもかなり後期の嗣法門人であったと見てよいであろう。

禮会の住持地として『正誤宗派図』や『虚堂和尚語録梨耕』の「嗣法十数人」では慈源と記しているが、この慈源寺についてはいまだその所在地を確定し得ない。あるいは天台山の近辺とすれば『嘉定赤城志』巻二九「寺觀門三」の「寺院」の「寧海 禅院」に、

虚堂智愚の嗣法門人について（佐藤）

六四

慈源院、在「県東南一百五十里。旧名「龍泉」。晋天福七年建。国朝治平三年、改今額。

とある台州寧海県東南一五〇里に存した龍泉山の慈源院（古くは龍泉院）ないし慈源寺がこれに当たるのではなからうか。『金華黄先生文集』巻四二、「崑山薦巖竺三元禪師塔銘」によれば、寧海県の慈源寺には寧海県出身の松源派の竺三元妙道（東海慕翁、定慧円明禪師、一一五七—一三四五）なども元代に開堂出世している。

① 東京大学史料編纂所が一九九二年七月に調査撮影した『東福寺靈雲院所藏典籍』三九には、『諸祖録撮要』として、大歇和尚語録、「即庵覚和尚語録」、「竺三元和尚語録」、「石山和尚語録」が収められているが、『竺三元和尚語録』（『竺三元和尚四会語録』とも）には妙道の初住地の語録として、台州龍泉山慈源禪寺語録「が存している。また、『黄学士文集』巻四二、「塔銘」の「崑山薦巖寺竺三元禪師塔銘」に、

至元己丑、用峯者、出世于本邑之慈源寺、説法嗣横川。居六年、法席鼎盛。

と記されており、妙道は至元二六年（一二八九）に慈源寺に出世開堂して如珙に嗣承香を炷き、六年間にわたって住持していたことが知られる。おそらく年齢的に禮会は妙道よりも先に慈源寺に化導を敷いたものと推測される。

(1) 秋岩徳新

法諱が徳新であり、道号を秋岩または秋巖と称しているが、この人についてはほかにまったく史料が見い出せず、『虚堂和尚語録』にも該当する名が存していない。わずかに『正誤宗派図』四に「南明秋岩徳新」と記されるのみである。徳新の住持地とされる南明とは処州（浙江省）の南明山のことであり、雍正十一年（一七三三）に刊行された『処州府志』巻二「寺観」の「処州府麗水県」の項には、「仏日仁寿寺、南明山。宋乾徳三年建、廢」とあり、光緒三年（一八七七）に刊行された『処州府志』巻九「寺観」の「処州府麗水県」の項にも、

仏日仁寿寺、南明山。宋乾徳三年建。県志 元至元中燬於火、大徳中重建。歳久傾圮、僧達識繼完修葺、復成崇構。范銅、為鐘撞之声。

と記されているから、処州麗水県の南明山には仏日仁寿禅寺が存していたことが知られる。この寺は古く北宋の乾徳三年（九六五）に建てられ、南明山仏日報恩禅寺と称したのもらしく、後には南明山仁寿禅寺と称されている。徳新より先に破

庵派無準下の雪巖祖欽（慧朗禪師、？一二八七）なども住持している。すでに触れたごとく同じ処州青田県の小連雲山に存した連雲寺には同門に当たる寂庵妙相が住持していることから、徳新も近隣の南明山の仏日仁寿寺にあって化導を敷いたことになる。

(1) 雍正一一年（一七三三）刊『処州府志』巻一三「人物志 仙釈」の「明慧」によれば、曹洞宗の宏智正覺の法嗣である明慧（？一六六）が南明山に住持している。また「正誤宗派図」四には「靈隱松源崇嶽」の法嗣として「南明不菴了悟」とあり、松源派の不菴了悟が南明山に住持している。また『雪巖和尚語録』巻一に「処州南明仏日禪寺語録」を収めている。

(12) 東州惟俊

法諱は惟俊といい、道号を東州と称しており、『正誤宗派図』四には「万年東州惟俊」と記されている。すでに『虚堂和尚語録』巻二「婺州雲黄山宝林禅寺語録」には「侍者惟俊・法雲編」とあるから、惟俊は師の智愚が婺州（浙江省）金華の義烏県南二五里に存する雲黄山宝林禅寺（単に双林寺とも）に住持していた際にその上堂語録を侍者として閑極法雲とともに編集していることが知られる。景聡興島は『虚堂録假名鈔』（単に『虚堂録抄』とも）巻二「婺州雲黄山宝林禅寺語録」において、

台州万年之東州惟俊、師ノ弟子也。（中略）惟俊八師ノ法嗣也。（中略）江湖集二、東州瑞蔵主、嗣虚堂、住天台万年、或云、諱惟俊。

と記しており、無著道忠も『虚堂和尚語録梨耕』巻五「宝林語録」において、

惟俊。溪曰、偶頌部 十二文 有「冬夜示俊侍者」偈。又七後録真實 一文 有「慶遠俊長老請」贊。恐此人乎。又曰、江湖集東洲瑞蔵主註曰、嗣虚堂、住天台万年、或云、諱惟俊。

という註記をなしている。いずれも『江湖風月集』にいう東洲瑞蔵主との混乱が見られるものの、惟俊に関して若干の考察がなされている。少なくとも惟俊は宝林寺の智愚のもとに在る頃から惟俊という法諱を用いていたわけであるから、東洲瑞蔵主と混同しているのは明らかな誤りであろう。

『虚堂和尚語録』巻七「偶頌」には惟俊が智愚のもとで侍者を勤めていたときの消息を伝えるものとして、

冬夜示_二俊侍者。

守_二得烏薪_一暖氣回、夜深寒重易_レ成_レ灰、因思百丈重挑撥、転使_二瀉山眼不_レ開。

という偈頌が載せられている。おそらく宝林寺において智愚が冬夜に侍者であった惟俊に対して与えたものであろうが、内容は百丈懐海と瀉山靈佑の間で交わされた「百丈夾火」の古則にちなんで侍者のあり方が詠じられている。その後、しばらく惟俊が如何なる活動をなしていたのかは定かでないが、おそらく智愚のもとに留まって参禅学道に努めていたものと推測される。

また『無象照公夢遊天台偈軸并序』によれば、景定三年（一二六二）九月に天台山の石橋に登った日本僧の無象静照（法海禅师、一二三四—一二〇六）がなした詩偈に寄せた作として、

雲居、東州惟俊。

雲宿_二橋東_一酌_二皸茶_一、枕寒夢冷賦_二秋霞_一、豁然心寂渾無_レ有、恰似_二傾分_二蓮裏花_一。

錫杖凌空探一回、曉風已約片雲開、危闌_二嶮処_一平如_レ砥、自_レ是行人不_二到来_一。

という惟俊による一首の偈頌が伝えられている。惟俊は在宋中の静照と交流を持っていたことが知られ、静照も智愚に参学して後に帰国の途に着いている。道号の東州とは別に「雲居」とあるのは住持地と見られるから、当時、惟俊は天台山中の雲居と称する寺院に住持していたものと見られる。『嘉定赤城志』巻二八「寺觀門二」の「寺院」の「天台 禅院」によれば、

慈雲院、在_二県西北三十五里_一。旧名_二安国雲居_一。晋天福元年建。蓋僧德韶第二道場。国朝大中祥符元年、改_二今額_一。隆興初、併入_二護国_一。今復興。有_二双松亭_一。

として天台県西北三十五里に存した慈雲院の消息を伝えているが、その中でこの寺が古く後晋の天福元年（九三六）に創建されて安国雲居院と称し、法眼宗の天台徳韶（八九一—九七二）の第二道場であったことを伝えている。雲居院は大中祥符元年（一〇〇八）に慈雲院と額が改められているが、惟俊の住持していた当時も旧称が通用していたものである。

さらに注目すべきは松源派の蘭溪道隆（大覚禅师、一二二三—一二七八）の『大覚禅师語録』（古くは『蘭谿和尚語録』）巻下の末尾に、浄慈寺の智愚が景定五年（一二六四）二月に書した跋文につづいて、

幹当開板比丘智侃・祖伝

北京山城州東山建寧禪寺監寺比丘祖忍 施財刊行。

天台山万年報恩光孝禪寺首座比丘惟俊、点对入板。

大宋天台山万年報恩光孝禪寺住持嗣祖比丘妙弘、点正施梓。

大宋紹興府南明孫源同刻川石岱刊。

という刊記が存しており、その中に天台山万年報恩光孝禪寺の首座比丘として惟俊の名が存していることである。^① 蘭溪道隆はいうまでもなく南宋から日本に渡来し、鎌倉の巨福山建長寺の開山となった禅者であり、法系上は智愚の法從弟に当たっている。刊記によれば、智愚が道隆の語録を校訂して景定五年二月に跋文を付した頃、惟俊は台州天台県の天台山中に存する平田の万年報恩光孝禪寺の載流妙弘の席下で首座を勤め、道隆の語録を刊行するのに尽力したことが知られる。これによれば、道隆の語録はおそらく台州府内の何れかで木版に刻まれ、万年寺の妙弘や惟俊らが尽力して宋版として刊行されているものと見られる。このとき財を施して語録を刊行したのは京都東山建仁寺（当時建寧寺）の道隆のもとで監寺を勤めて入宋した祖忍（禅忍のことか）であり、開板に尽力した智侃と祖伝のうちで、智侃とは道隆の門人として入宋し、帰国後に聖一派に転ずることになった直翁智侃（仏印禪師、一二四五—一三三二）のことであるから、このとき惟俊は住持の妙弘とともに祖忍・智侃・祖伝ら日本僧と積極的に交友をなし、宋版『蘭谿和尚語録』の刊行を完遂していることになる。したがって、このとき惟俊は小刹である雲居寺の住持を退いて大刹の万年寺で妙弘に招かれて首座を勤めていたことになるうか。万年寺住持の妙弘についてはその嗣承が定かでないものの、やはり『無象照公夢遊天台偈軸并序』に二首の偈頌を寄せている。

また咸淳三年の秋に南浦紹明が日本に帰国する際に中国の道友が饑別に贈った詩偈をまとめた『一帆風』には智愚の偈頌についで、

前題（送南浦明公還本国）。

天台惟俊。

空手東來已十霜、依然空手趁回樞、
明々一片祖師意、莫作唐朝學掬。

という惟俊がなした作も伝えられている。天台の惟俊とあるが、これは地名と見られるから、惟俊はもともと台州天台県

の出身であつたらしいことが知られ、当時、径山の智愚の席下に戻つて紹明とも交友を持つていたものであるうか。惟俊は空手にして入宋求法した紹明が一〇年の歳月を経て空手にして郷に還るさまを称え、紹明の日本における活動に期待を寄せている。

ところで、『虚堂和尚語録』巻九「臨安府径山興聖万寿禅寺後録」に、

閏正月望為「新慶遠長老」上堂。不知歳之余閏、不知月之大小、懵懵懂懂、如是者三十年、一旦眼睛活、便見朝旨、門趨歸慶遠。衲僧家、潜行密用、得与麼靈驗。且上馬見路一句、作麼生。卓主文。江南春信早、紫葳已伸拳。

という上堂があり、また同じく『虚堂和尚語録』巻一〇（後録）「真贊」にも、

慶遠俊長老請

老不_レ死、心未_レ灰。触着惡発、青天怒雷。引_レ得虎頭燕頰、競_レ起叢林禍胎。点着便領、何其俊哉。

という真贊が伝えられている。上堂は新たに慶遠寺に住持する惟俊のために智愚が示したことばであり、真贊は慶遠寺に住持した惟俊が智愚の頂相を持參して贊語を求めたのに対し、智愚が老齡に達した自らの姿を詠じて書き与えたものであつて、惟俊が智愚の接化に浴してから三〇年の歳月が経過していたことが知られる。「臨安府径山興聖万寿禅寺後録」の上堂の配列からすると、上堂は智愚の最晩年に当たる咸淳五年（一二六九）の閏正月一五日になされたものであり、このとき惟俊は朝旨を得て慶遠寺に開堂出世していることになるう。ただし、惟俊が住持した慶遠寺に関してはその所在地をいまだ明確にしていない。

また『正誤宗派図』に「万年」とあるのは、明らかに天台山の万年報恩光孝寺のことを指しているから、その後、惟俊は出身地である天台の地に戻り、かつて截流妙弘のもとで首座を勤めたこともある万年寺に実際に住持しているものと解される。『嘉定赤城志』巻二八「寺觀門」の「天台 禅院」の「万年報恩光孝寺」の項によれば、

万年報恩光孝寺、在_レ渠西北五十里。唐太和七年、僧普岸建。旧經云、隋大業二年建。初晉興寧中、僧曇猷憩_レ此。四顧_レ八峯、迴抱_レ双澗合流、以為_レ真福田也。遂經始焉。會昌中廢。大中六年、号_レ鎮國平田。梁龔德中、改_レ福田。國朝雍熙二年、改_レ壽昌。建中靖國初火、崇寧三年重建、号_レ天寧万年。紹興九年、改_レ報恩広孝、後改_レ広孝、為_レ光孝。先是、太平天禧中、累賜_レ袈衣宝蓋及御袍展諸珍玩、甚衆故有_レ親到堂・妙蓮閣・覽衆亭。淳熙十四年、日本國僧來西、建_レ三門西廡、仍開_レ大池。香積有_レ釜極深広、世伝

闍提首那尊者所鑄 東南十里有嶺、曰羅漢。巨杉偃蹇、之六百間。凡供五百大士、必於是邀請云。

と記されており、その歴史の変遷が知られる。万年報恩光孝寺は天台山中にあって天台県西北五〇里に存し、唐の太和七年（八三三）に百丈下の平田普岸（七七〇—八四三）によって創建された禅寺であり、宋代には何度かの寺名の改変がなされている。とりわけ、淳熙十四年（一一八七）のできごととして日本の明庵宗西（千光法師、一一四一—一二二五）がこの寺で黄龍派の虚庵懐敏に参学していた折に、三門と西回廊を建立したことが特筆されている。

ところで、『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻上の「讚仏祖 名賢附」には、

五祖 東州俊 元人、嗣虚堂。

青峰々下種 青松、換歩重来夫旧蹤、富貴未忘貧苦事、三更月下送盧公。

という五祖弘忍（大滿禪師、裁松道者、六〇一—六七四）を称えた惟俊の仏祖贊が伝えられており、わずか一首ながら智愚の法嗣として惟俊がなした貴重な偈頌といえよう。しかも『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』では惟俊を「元の人、虚堂に嗣ぐ」と記しており、明確に智愚の法嗣として位置づけている。また元の人と伝えていることから、その活動期間が元代初期に及んだらしい消息が知られ、おそらく惟俊は南宋最末期から元初にかけて万年報恩光孝禅寺を中心に化導を敷いているものと推測される。いずれにせよ、惟俊は入宋僧の無象静照や南浦紹明らと交遊し、蘭溪道隆の語録の刊行にも加担していたわけであり、日本禅林とも密接な関連を持っていたことが知られる。

(1) 『蘭谿和尚語録』の刊行については拙稿「虚堂智愚と蘭溪道隆」とくに直翁智侃と『蘭谿和尚語録』の校訂をめぐる（花
園大学『禅文化研究所紀要』第一四号）を参照。

(2) 『無象照公夢遊天台偈軸并序』には、

万年截流妙弘。

莫辞迢遞供盃茶、香噴雲映映彩霞、雨雨夢中休説夢、覺来渾是夢中花。

尋幽覓勝至天台、觸目風光剪剪開、欲問曇猷旧遺迹、千山排闥送青来。

として万年寺の住持として妙弘がなした二首の偈頌を載せている。はじめの偈頌は天台山の石橋で羅漢に茶を献する消息を述べ

たものであり、つぎの偈頌は曇猷の旧遺跡すなわち万年寺を拜登したことに因むものである。

(13) 此軒如足

この人は法諱を如足といい、道号を此軒と称している。『正誤宗派図』四には「翠巖此軒如足」と記されている。景聰與勗は『虚堂録假名鈔』（単に『虚堂録抄』とも）巻七「偈頌」の「寄言實足首座」において「如足首座、嗣虚堂也。是此軒ノ事也。宗派図不載也」と記しており、無著道忠は『虚堂和尚語録梨耕』巻一「法語」において「如足首座。後六偈頌 十九丈 曰有寄言實足首座頌」と記し、同じく『虚堂和尚語録梨耕』巻二「偈頌三」においても、

此軒。名如足。此軒為号。前 十九丈右 有寄言實足首座頌。旧解曰、此指自己。忠曰、布袋稱契此翁、此字意同此。（後略）

と記している。如足の足跡などについては定かでないが、『虚堂和尚語録』巻四「法語」には、

示如足首座。

名実相当、行解兼備、以平等大心、待四方衲子、方可抛曲象牀、又須八面受敵臨機縱奪。邪正不可得而前、透到仏祖著眼不及处、使学者心死意消、便能勃然而興、凜然而变、方可称此題目。纔有毫末許与人领覽、則為仏法罪人矣。豈况限限穉穉半死半活、被二十四氣輓得、七転八倒做主不成。似者般底、欲使叢林茂盛標準後学、得非難乎。古徳道、達磨大師空手来空手去、已是揚塵簸土、曲為今時。黄梅七百高僧、箇箇希求仏法、惟盧行者一人、眼不識字、專事供養。所以西土衣鉢、密而授之。蓋此門不易湊泊。若夙有靈骨、不待揚眉瞬目曲巧方便、直下蹈翻從上老凍臍窠窟、全身担荷空手来空手去底一著子、豈不快哉。何患名实行解不昭著於時也。

という法語が存しており、智愚が首座の如足に示した内容が知られる。ここでは名実・行解ともに備わった首座として如足が四方の雲衲を自在に接化することを願う智愚の心情が窺われる。ただし、如足が智愚のもとで首座を勤めたのが何れの寺院においてのことであったのかは定かでない。同じく『虚堂和尚語録』巻七「偈頌」にも、

寄言實足首座。

光範曾不著纖埃、私拭磨礬心已灰、秋夜不禁猿嘯月、与誰同上妙高臺。

という偈頌が存している。これによれば、如足は智慧の席下で首座を勤めているほか、明州奉化県西の雪竇山資聖禪寺においても首座を勤めていたことになる。また此軒がこの人の道号であるならば、同じ巻七「偈頌」に、

此軒

一梁对二柱、綽綽自横陳、誰擬復誰即、温然無故新。

として此軒と題する偈頌が存するのも、智慧が如足に与えた道号偈であることになる。此軒とは自己(此)を一つの軒(小庵)に譬えたものであり、一梁・一柱がそれぞれ相対し、一つの家屋を形成しているように、如足が自分の自己に安住してこれに満足しているさまを詠じているのである。

また『禪家叢書』所収本の『無象照公夢遊天台偈軸并序』によれば、景定三年(一二六二)九月に天台山の石橋に登った日本僧の無象静照(法海禪師、一一三四—一三〇六)がなした詩偈に寄せた作として、

橋南箇一隊癡歌、面孔鄒搜擊弗開、不待見伊先勸破、昨宵曾入夢中一來。

此軒、如芝。

という偈頌が伝えられている。如芝とあるのは筆写の段階で同門の靈石如芝(仏鑑禪師、一一四六?)との混同があったためと見られ、年齢的にいっても明らかに如足の誤記であろうが、これが真に如足の作であるならば、如足は在宋中の静照と道交を結んでいたことになるわけである。ただし、他の写本ではこの偈頌は梓州(四川省)の希革という禅者の作とされていることから、如足の作であるのか否かは明確でない。

『正誤宗派図』によれば「翠巖此軒如足」とあるから、その後、如足は翠巖と称する寺院に住持したことが知られる。翠巖と称せられる禅寺は洪州(江西省)府城西四〇里の西山翠巖広化禪寺なども存しているが、如足の住持した翠巖寺とはおそらく明州鄞県西南七〇里に存した翠巖山移忠資福禪寺のことを指しているものと推測される。『延祐四明志』巻一七「釈道致中」の「鄞県寺院 禅院」によれば、

翠巖山移忠資福寺、県西南七十里。旧号「翠巖境明院」、唐乾寧元年建。宋大中祥符元年、賜名宝積禅院。嘉泰四年、前張参政請

院為「功德寺」、賜給「今額」。

と示されており、その伽藍の変遷が大まかに知られる。とりわけ、この寺は唐末五代に青原下の雪峰義存の高弟のひとりである翠巖令參（永明大師）が住持した地として名高い。後世、この寺の寺志として『翠山志略』が編集されているが、そこには如足に関するような記載は見られない。

(1) 『五山文学新集』第六卷に所収される『無象照公夢遊天台偈軸并序』の「解題」によれば、灌田英二氏の所蔵本として『禅家叢書』第一巻として所収されている。『禅家叢書』は尾張藩の儒者であった細野忠陳（要斎、一八一—一八七八）が禅宗の法語、偈頌の類いを見るに随って筆録したものである。

(2) 『中国仏寺史志彙刊』第三輯に所収される『翠山志略』、『四明翠山禅寺志略』とも（巻三）「先覚」には住持したとされる禅者の名を挙げておるが、きわめて誤りの多い寺志であって、実際に南宋代に翠巖寺に住持した禅者としては、曹洞宗宏智派の闍庵嗣宗（宗白頭、一〇八五—一一五三）や翠巖宗静、さらに松源派の翠巖守真などに限られるであろう。

(14) 虚庵 実

虚庵 実については虚庵が道号であるが、法諱については下字の「実」しか定かでない。『江湖風月集』に「四明虚菴実和尚」としてこの人の偈頌が伝えられているから、虚庵実は四明すなわち師の智愚と同じ明州慶元府の出身であったことが知られる。『正誤宗派図』四においても単に「四明虚菴実」と記されるにすぎず、住持した寺院名も記されていない。『虚堂和尚語録』巻七「偈頌」に、

実禅者帰省

靈山禅起未温席、却問潮陽過海船、咨省寿堂春日静、究心応記白雲辺。

という偈頌が存しているが、おそらく虚庵実に示したものであり、このとき虚庵実は郷里に帰って両親に省親したのである。景聡興島は『虚堂録假名鈔』（単に『虚堂録抄』とも）巻七「偈頌」の「実禅者販省」において、

大済云、虚菴実不上也、江湖集下卷、四明虚菴実不上、嗣「半堂」也。宗派図不載之。

と記しており、無著道忠は『虚堂和尚語録梨耕』巻三「偈頌四」の「実禅者帰省」において、

忠曰、実失^{上字}、号^二虚菴、嗣^一虚堂。忠曰、宗派図 百九丈 虚堂下、四明虚菴実。帰省、忠曰、帰^二郷里省^一老親也。
靈山禅起未^レ温席。忠曰、靈山靈隠、蓋師在^二驚菴菴^一時、実來從、少時又去向^二潮州也^一。禅起者、自^二禅床^一起行也。

と註している。靈山とは靈隠のこと、すなわち杭州錢塘県の北山(靈隠山)景德靈隠禅寺のことを指しているから、虚庵実は智愚が淳祐年間(一二四一—一二五二)の後期に靈隠寺の驚峰庵に閑居していた頃には隨身していた人であろうと推測している。また偈文の中に「潮陽」と記されていることから、虚庵実はあるいは潮陽(広東省)と何らかの関わりが存したと解されようか。

さらに松源派の恕中無愠(空室、一三〇九—一三八六)が述した『山菴雜録』巻下に、

育王虚菴実首座、寄^二臥雲菴主^一偈云、黄金圍裏馬交馳、径寸多成^レ按^レ劍疑、月晒^二梅花^一千樹雪、臥雲^一一枕夢回時。天童幻菴住首座
拜^二応菴塔^一偈云、(中略)黙中唯西堂、詠^二蚕^一偈云、(中略)仏隴宜行可、聴^二雨^一偈云、(中略)噫、四人学者偈語雖^レ工、在^二当時^一已^レ混
混無^レ聞。余故録^レ之、以示^二後学^一焉。

という興味深い記事が存しており、虚庵実が明州鄞県東の阿育王山弘利禅寺において首座を勤めていたことが知られる。おそらく驚峰庵での隠閑を終えて阿育王山に住持した智愚に引きつづき参随し、そのもとで首座を勤めていたのであろう。虚庵実が詠じた作として「寄^二臥雲菴主^一偈」という一偈頌を掲載している。『山菴雜録』では阿育王山の首座であった虚庵実の作とともに、同じ鄞県東の天童山景德禅寺の首座であった幻庵住がなした「拜^二応菴塔^一」の偈頌、同じく天童山の西堂であった黙中唯がなした「詠^二蚕^一」の偈頌、および鄞県東六〇里の仏隴山積慶顯親禅院(仏隴禅寺)の住持であった宜行可すなわち行可 宜がなした「聴^二雨^一」の偈頌が載せられている。この四禅者は偈頌に巧みであったが、早くからのその作は散逸していたものらしく、これを憂いた無愠が辛うじて彼らの作をここに載せ、後学のために残したものであることが窺われる。この中で行可宜とは松源派の竺西妙坦(一二四五—一二五五)の法を嗣いだ高弟のひとりであったことが知られるが、他の幻庵住と黙中唯については嗣承が定かでない。ただ、虚庵実と行可宜とは活動時期がかなり相違しているから、彼ら四人が必ずしも交友関係にあったとは見がたい。

さらに幸いにも『江湖風月集』巻下の「四明虚菴実和尚」の項には、虚庵実の作として「虚堂語」と「寄^二大雲^一」と

「人之仰山」という三首の偈頌が伝えられている。

虚堂語

七宝鑄成三転語、百年東海鉄崖庵、天荒地老無青眼、万仞龍門鎖墨雲。

この第一の偈頌は師の智愚にちなむ「虚堂三転語」または径山下の化城寺の西に存した天沢庵の「虚堂塔」に対するものであり、虚庵実が智愚の法を嗣いだ高弟であることが確かめられる内容といつてよい。

寄大雲

黄金圍裡馬交馳、径寸多成按劍疑、月上梅花千樹雪、臥雲一枕夢回時。

この第二の偈頌は先に述べた『山菴雜錄』に載る「寄臥雲菴主偈」にほかならず、大雲とは越州（浙江省）に存したとされる大雲寺のことを指しているものと見られ、臥雲庵主がこれに在ったものであるうか。ここにいう大雲寺とは唐代に『頓悟要門』を選じたことで名高い馬祖下の大珠慧海が住持したとされる寺であるうが、大雲寺および臥雲庵の詳細については定かでない。

人之仰山

脚頭無処_レ覓_レ行蹤、没_レ馬黃塵起_二黑風_一、九十七重_二円相_一外、春花開遍_二集雲峯_一。

この第三の偈頌は門下の禅者が袁州（江西省）宜春県の仰山太平興国禅寺に遍参遊方するのに示し与えた作であり、唐末の仰山慧寂（小釈迦、智通大師、八〇七—八八三）の「九十七円相」にちなむ表現がなされている。

このほか『剣関和尚語録』、福州西禅怡山長慶禅寺語録』に「謝虚庵首座兼弘上堂」が収められているが、ここいう虚庵首座が虚庵実のことを指しているのであれば、破庵派の無準師範の高弟である剣関子益が咸淳元年（一二六五）五月に福州（福建省）侯官県西一五里の怡山長慶禅寺（西禅寺）に住持して間もない頃に、虚庵実が子益の化導を補佐して首座（第一座）として兼弘を勤めていたことになろう。

一方、日本でまとめられた『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻上の「祖塔」には、

虎丘塔

虚庵実 元人、嗣虚堂。

層門夢見肉如山、今日來分虎口浪、万里吳疆歸百越、碧桃無主自爛斑。

という礼祖塔の偶頌が残されている。これは虚庵実が蘇州吳興西北七里の虎丘山雲巖禪寺の海湧峰に存した虎丘派祖の虎丘紹隆（瞞睡虎、一〇七七—一一三六）の墓塔を拝した際の作であり、『新撰貞和分類古今尊宿偶頌集』においても虚庵実を明確に「元の人、虚堂に嗣ぐ」と記しており、智愚の法を嗣いだ門人であったことと、その活躍期間が元代に及んだことを伝えている。しかも同じく『新撰貞和分類古今尊宿偶頌集』巻上の「祖塔」には、

虚堂塔 在径山。 虚庵。

七宝鑄成三転語、百年東海鉄崑崙、天荒地老無青眼、万仞龍門鎖黑雲。

とあり、虚庵実が径山下の天沢庵にあつた智愚の墓塔を礼した際の偶頌をも伝えている。この偶頌は先の『江湖風月集』の「虚堂語」の偶頌と同じであり、おそらく虚庵実が智愚が示寂した咸淳五年（一二六九）一〇月以降にその墓塔を拝登してなしたものであり、智愚の「虚堂三転語」の接化を踏まえて詠じられている。この「虎丘塔」と「虚堂塔」の礼祖塔の偶頌はともに若干ながら字句の異同も見られるものの、『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻一の「礼塔」にも載せられている^④。すでに述べたごとく四明とは四明山のある明州の鄞県から奉化県の辺りを示しているものと見られ、おそらくこの人の地名であろうが、虚庵実の具体的な住持地に関しては諸史料は何も伝えていない。あるいは虚庵実は生涯にわたり首座位など叢林の職位に終わり、住持などに就くことがなかったとも解されよう。

ただ、『至元嘉禾志』巻一八「碑碣三」に浙東安撫司の周方（字は義翁、一二二七？）が撰した「重修興聖寺記」が収められているが、その文中に、

明年景定庚申、復以元賜命主僧淨志任責、從嗣王与沢請也。申錫無疆、及爾斯所加編頌、當儔以烈祖之述商者。淨志当
事自方丈法堂、以內規以立。咸淳己巳、特選主首、以僧惟実当事。期年、而廡山門以外、工以備矣。癸酉春、旨奉安神御、
又從主祀与沢請也。新廟奕奕、寢成孔安、一如祖宗制、安居粒食、優游閑暇、亦便浮屠教。夫孔曼且碩万民、是若理之常也。
乃如之人兮、西方之人兮、同事釈氏、同師偃溪。今乃能同力、以事君。惟実嘗興寺洪都、謂叶唐五百年仏讖。今乃前作後述、
復百二十年、潜邸盛典。至此知、人心之天、即天心之天也。惟徳勳天、無遠弗届。如編書、正当驗之、以益實於禹者、
謹擇手記本末、以俟編之詩書之策。朝奉郎添浙東安撫司主管機宜文字兼福王府教導官周方記。

とあり、嘉興府嘉禾の流虹興聖寺に住持した禅者として浄志と惟実という両禅者が存したことを伝えている。智愚もかつて嘉興府嘉禾の興聖寺に住持しており、虚庵実と同門に当たたる法弟の靈石如芝も後に興聖寺に出世開堂していることから、ここにいう惟実が時期的に虚庵実のことを指している可能性も高い。ただし、「重修興聖寺記」によれば、浄志・惟実とも大憲派の偃溪広聞（仏智禅師、一一八九—一二六三）に師事したことが記されるのみで、智愚との関わりについては触れられていない。浄志が興聖寺に住持したのは景定元年（一二六〇）のことであり、方丈と法堂を建立したことが知られる。また惟実が智愚が示寂した咸淳五年（一二六九）に興聖寺に住持し、廻廊と山門以外の堂宇を整えたことが記されており、さらに四年を経た咸淳九年（一二七三）の春においても住持として活動していた状況が記されている。あるいは惟実が南宋最末期に久しく興聖寺に住持した後、同門の如芝がその後席を継ぐかたちで興聖寺に開堂出世しているのかも知れない。

① 『山菴雜錄』に載る虚庵実の偈頌は、清代に臨濟正宗の迦陵性音（円通妙智禅師、？—一七二六）が重編した『維壽海』巻三「留贈」に七、

寄臥雲菴。黄金園裏馬交馳、径寸多成按劍疑、月曬梅花千樹裏、臥雲一枕夢回時。 虚菴実

として載せられており、かなり知られた作であったものらしい。

② 行可直とは、『増集統伝燈録』巻六「四明仏隴行可直禅師」の章として載る行可直のことであり、同目録には「仏隴行可直禅師」とあって、松源派の竺西妙坦（一二四五—一三二五）の法を嗣いだことが知られる。

③ 『劍閣和尚語録』福州西禅怡山長慶禅寺語録』には、

謝虚庵首座兼弘上堂。語底默底不是、非語非默亦非。虚庵有二転語、用处絶、毫絶、厘。衆中或有箇漢出来、以指夾鼻。又作麼生支遣。只向它道、三十年後、清平渡水。

とあり、語黙にわたらない虚庵実の二転語が称えられている。

④ 『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻一の「礼塔」には、

虎丘塔。 虚菴実 実下一本注有「元人嗣虚堂六字」上。

屠門羞見肉如山、今日来分虎口痕、万里呉疆歸百越、碧桃無主自爛斑。

虚堂塔 塔下一本注有「在径山三字」上。 虚菴。

七宝鑄成三転語、百年東海産「崑崙」、天荒地老無「青眼」、万勿龍門鎖「黒雲」。

とそれぞれ記されており、若干ながら語句の相違が見られる。

(5) 『偃溪和尚語録』巻下「普説」は「門人惟実・妙高編」と記されており、ここにいる惟実が虚庵実と同一人物であるならば、この人はかつて大憲派の偃溪広闡のもとで雲峰妙高(一一二九—一一九三)とともに普説を編集し、その後智愚に参学したことになる。ただし、「普説」より以降の「法語」「偈頌」「仏祖讚」「自讚」「小仏事」「題跋」がすべて惟実と妙高によつて編集されたとすれば、広闡の門人惟実と智愚の門人の虚庵実を同人と解することには問題もある。一方、淨志についても『偃溪和尚語録』巻上「住臨安府淨慈報恩光孝禅寺語録」が「侍者元清・淨志編」とあることから、元清(法嗣の月湖清か)とともに淨慈寺の語録を編していることが知られる。

(15) 潜溪妙広

法諱が妙広であり、道号を潜溪と称している。この人についても『虚堂和尚語録』その他にまったく史料が見い出せず、わずかに『正誤宗派図』四に「万寿潜溪妙広」と記されるにすぎない。その住持地の万寿とは一般的には蘇州呉県の万寿報恩光孝禅寺のことを示す場合が多いが、あるいは明州府城の万寿禅寺その他を指す可能性も存しよう。ただ、問題なのは同じ『正誤宗派図』一に「靈隱東谷妙光」の法嗣として「万寿潜溪了広」とあり、曹洞宗宏智派の東谷妙光(一一二五—一一三)の法を嗣いだ門人として潜溪了広という、きわめて類似している上に、同じ万寿寺に住したと見られる禅者が別存していることである。智愚と妙光は道交が深かったことから、あるいは門人の名に混乱が生じているのかも知れない。

(1) 宏智派の潜溪了広については、拙稿「南宋末曹洞禅僧列伝」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第五〇号)の「潜溪了広」の項を参照。

(16) 晦叟法光

この人は法諱を法光といい、道号を晦叟と称しているが、その事跡の詳細については定かでなく、わずかに『正誤宗派図』四に「仰山晦叟法光」と記されているにすぎない。『虚堂和尚語録』巻八「虚堂和尚統輯」には「参学以文・無補・法光編」とあるから、法光が以文や壞衲無補とともに「虚堂和尚統輯」を編集していることが知られる。景聡興勗は『虚堂

録假名抄』（単に『虚堂録抄』とも）巻七「虚堂和尚統轄」において「法光、号『晦叟』、住『仰山』。嗣『師也』」と記し、無著道忠も『虚堂和尚語録梨耕』巻二四「統轄」において、

法光、後七真贊、三丈、有光侍者請真贊。旧解曰、法光号『晦叟』、嗣『虚堂』、住『仰山』。忠曰、宗派図、百九丈、虚堂下載。

と記しており、ともに法光に関する簡略な考察を残している。智愚の法を嗣いだ門人であつたと伝えている。『虚堂和尚語録』巻一「真贊」に、

光禅者請。

初而欣、久而厭、明月夜光、多逢按劍、但信得及、自有靈驗。

という真贊が存し、この真贊はおそらく智愚が浄慈寺か径山に住持していた時期の作と見られるから、当時、法光が智愚の頂相に贊を請うたものである。同じく『虚堂和尚語録』巻七「偈頌」にも、

法光藏主之南徐。

三呼棒下、愧、靈襟、湖海叢林已徧尋、忘却飛猿旧時路、到頭曾不厭初心。

という偈頌が存しており、法光が智愚のもとで藏主を勤めていたことが知られる。道忠は『虚堂和尚語録梨耕』巻二三「偈頌四」の「法光藏主之南徐」の註において、

忠曰、法光号『晦叟』、嗣『虚堂』、編『統轄』者。忠曰、宗派図、百九丈、虚堂下、仰山『晦叟法光』（中略）溪曰、光侍師於宝林、故統轄中拾『宝林語所』逸者多矣。（中略）忠曰、（中略）蓋光公生緣在福建、旧時出『飛猿嶺』、參『尋諸方』、又来『宝林』、參『虚堂』。然不厭歸郷里、却又向北方、徧參鎮江府也、称『美之』。

というかなり詳しい考察をなしている。道忠が考証するところによれば、法光はもともと福州（福建省）近辺の出身で飛猿嶺を出て遊方し、婺州（金華）義烏県の雲黄山宝林禅寺に到って智愚に参学し、その後、郷里に南下せず北上して南徐すなわち鎮江府（江蘇省）に赴いたと推測しているわけである。ただ、「虚堂和尚統轄」は実際には大半が智愚の阿育王山住持期の上堂を収めたものであることから、法光は宝林寺で智愚に参じて侍者を勤めた後、智愚が杭州靈隱寺の鷲峰庵に閑居した頃にそのもとを辞して南徐に赴き、智愚が明州鄞県の阿育王山弘利禅寺に住した際に再びその席下に投じて以文や無補とともに智愚の上堂語を統轄したものであろうか。

この点、注目されるのが『虚堂和尚語録』巻九「臨安府径山興聖万寿禅寺後録」に、

謝福州光首座兼弘上堂。夫愚者最豐通、不_レ期而會、不_レ約而同。撈著崖崩石裂、抛出金圈栗蓬。驚_レ倒露柱、嚇_レ煞燈籠。不_レ知何処毒種、元來門裏有_レ龜。

という福州の光首座の兼弘を謝する上堂が存していることである。この上堂についても『虚堂録假名鈔』巻九「径山興聖万寿禅寺後録」の「謝福州光首座」において、

此上堂八光首座ノ兼弘提唱ヲ一段ト贊歎也。愚ヲ用得テ說法也。福州ヲ愚毒郷ト云也。法光首座八閩人也。虚堂之子也。前偈頌ノ部ニ、法光蔵主之_二南徐_一ノ頌有_レル也。(中略)法光蔵主、号_二晦叟_一、嗣_二虚堂_一也。

とあり、『虚堂和尚語録梨耕』巻二七「径山後録中」の「謝福州光首座兼弘」の註においても、

旧解曰、光首座者、偈頌中有_二法光蔵主之_二南徐_一偈_一。前六、廿六丈。是也。閩人、号_二晦叟_一、嗣_二法_一虚堂。忠曰、宗派圖 百九丈 虚堂下曰、仰山海叟法光。

と記されている。ここにいう光首座が道忠のいつごとく法光のことであるならば、法光は明確に福州の出身であり、杭州の径山において晩年の智慧を補佐して首座を勤めていたことになる。ここでは法光を福州出身に因んで山門内に蟠る閩(福州)の毒蠱に譬えている。上堂語の配列からすると、この上堂がなされたのは智慧の最晩年に当たる咸淳五年(一二六九)の結夏(四月二五日)から端午(五月五日)の時期であるから、法光はこの年の夏安居に首座として兼弘したことが知られ、智慧の席下での最後の首座を勤めた禅者であったことになる。

智慧が示寂して後の法光の活動については明確でないが、その住持地とされる仰山とは、いうまでもなく袁州(江西省)宜春県南六〇里の仰山太平興国禅寺のことであり、当時、甲刹の一つに列していた禅刹である。清の康熙四七年(一七〇八)に刊行された『宜春県志』巻二「寺觀」には、

太平興国禅寺、邑城南大仰山下。二神捐地、与_二小釈迦_一、結_二菴之所_一、塔尚存。唐会昌賜_二名樓隱_一、宋改_二今名_一。山水奇勝、石逕繁廻、飛瀑湍駛、泉流瀟瀟、鳴殿庭下、叢_二巽_一入_二境_一。唐宋賜_二經御書碑碣_一、甚多俱燬。今有_二元碑程鉅夫撰記_一。

とあり、日本の『扶桑五山記』一「大宋国諸寺位次」の「甲刹」によれば、

仰山。袁州宜春県太平興国禅寺。開山通智禅师。集雲峯・龍会橋・挿鉄井・獺径橋・梵錫泉・龍淵・一音演説・歇馬厂・流雪亭・雪

谷・卍字堂・推枕軒・四藤閣・雷音堂。

と記されているから、この寺は唐末に瀉山下の仰山慧寂（澄虚大師・智通大師、小釈迦、八〇七—八八三）ゆかりの仰山樓隠禅寺として発足し、北宋代に仰山太平興国禅寺と改められている。南宋末期から元代初期にかけては破庵派無準下の環溪惟一（一一〇二—一一八二）や雪巖祖欽（慧朗禅师、？—一一八七）などが仰山に住持して寺門の隆盛を図ったことが知られており、¹⁾ そうした江西の名刹に法光も住持しているだけに注目される。²⁾

(1) 『環溪和尚語録』巻上に、「住袁州仰山太平興国禅寺語録」を収めており、環溪惟一が咸淳元年（一一六五）五月一七日に仰山に入院し、五年間にわたって住持したことが知られる。また『雪巖和尚語録』巻一に、「袁州仰山禅寺語録」を収めており、雪巖祖欽が晩年を仰山に化導を敷いたことが知られる。

(2) 惟一や祖欽あるいは法光のほか、南宋末期から元代初期にかけて仰山に住持した禅者としては、大慧派では無了派（一一四九—一二三四）の法嗣の無境印徹、妙峰之善（一一五一—一二三五）の法嗣の仰山慧清、松源派では谷源至道の法嗣の無禅信心、破庵派では雪巖祖欽の法嗣の虚谷希陵（西白、仏鑑禅师、一一四七—一一三二）と古心誠、希陵の法嗣の了堂円昭などが挙げられる。

(17) 無示可宣

この人は法諱が可宣であり、道号を無示または無爾・無尔と称しており、¹⁾ 『正誤宗派図』四には「明州無示可宣」と記されている。ただ、師の智愚より若干ながら先哲に楊岐派の石橋可宣という禅者があり、無示可宣と混同される場合もあるが、両者はまったくの別人である。石橋可宣は圓悟克勤（仏果禅师、一〇六三—一一三五）の高弟である密印安民に法を嗣いでおり、無示可宣の師である智愚よりもかなり年輩に当たっている。²⁾

すでに『虚堂和尚語録』巻一「嘉興府報恩光孝禅寺語録」には「參学可宣編」とあるから、智愚が端平二年（一一三五）に嘉興府嘉興（嘉禾）城内北の天寧報恩光孝禅寺に住持した頃には早くも可宣が参随して上堂語を編集していることが知られる。したがって、可宣は智愚の門下でも初期の高弟であったと見られ、随待していた期間もかなり久しかったものと推測される。景聰輿馬は『虚堂録假名鈔』（単に『虚堂録抄』とも）巻一「嘉興府報恩光孝禅寺語録」において、

可宣、号八無示禅师、明州象山県人也。嗣師、住蓬萊及東山香山、後住首山延寿、云々。蓬萊宣長老是也。先師語ヲ編スルホト

二 参学ト云也。

と記し、同じく卷四「法語」においても、

宣長老八、編輯恩光孝寺語録人也。可宣、号無示、嗣師。住明州象山一人也。住蓬萊及東山香山、後住首山延壽。示蓬萊宣長老、老虚堂之法嗣也、詳前。

と記している。これらによれば、可宣は智愚と同じ明州象山の出身であったとされるが、輿馬が如何なる伝承に基づいて可宣を象山県の人と記しているのかは定かでない。ただ、可宣が象山県の出身であったとすれば、開堂出世して数年を経た同郷の智愚を慕い、遠く嘉興府の報恩光孝禅寺に智愚を訪ねて門下に投じていることになる。

また無著道忠も『虚堂和尚語録梨耕』卷二「報恩語録」において、

可宣。新添中 廿八卷四丈 有答「蓬萊宣長老書」曰、啓復蓬萊堂頭無示禅師、云々。見其所言、虚堂法子也。又法語 十一卷一丈 有「示蓬萊宣長老語」真讚 十二卷三丈 有「蓬萊宣長老請」。

と『虚堂和尚語録』の中より可宣に関する記述をさらに三ヶ所ほど抽出して考察をなしている。そこでいま可宣に関わる内容のものを順次に挙げて考察して見ることにしたい。はじめに『虚堂和尚語録』卷七「偈頌」には可宣が智愚のもとに参学していた期間の消息を伝えるものとして、

宣知客帰江心。

風帽雲巾歴所期、問津何似到家時、曲闌半倚垂楊外、潮落潮生祇自知。

という偈頌が存している。その内容は席下で知客を勤めていた可宣が江心に帰るのに際して智愚が饒別のために一偈を与えたものである。これによれば、可宣はもともと温州（浙江省）永嘉県北の歐江の中洲に建つ江心山龍翔禅寺と関わり存した禅者であったらしいことが知られ、あるいは象山県ではなく温州付近の出身であったのではないかと推測される。ただし、江心山龍翔寺は十刹第六位に列する名刹であるから、それまで知客を勤めていた可宣はおそらくこのとき龍翔寺から招かれてより重要な職位に就任したものではないかと見られる。

その後、可宣は蓬萊と称する寺院に住持していたことが知られ、『虚堂和尚語録』卷四「法語」には、

示蓬萊宣長老。

本色衲僧、具透関眼、風驚草動、悉辨来機。盖他做処穩密、不落声前句後、得処既妙用出来、自然蓋天盖地。豈可_レ与_レ依草附木、擊_レ同日而語_レ哉。济北瞎驢、初到_レ高安灘頭、既不_レ能_レ踢踏、却遇_レ黄檗山中、探頭露_レ影。看他老漢驗_レ人眼目、一見便抛_レ出_レ断_レ真_レ道、来来去去、有_レ甚_レ了_レ期。雖_レ未_レ展_レ毒手、早是去死十分、便通_レ箇_レ欵_レ子_レ道、只為_レ老婆心切。猶恐_レ不_レ実、向_レ險_レ處_レ更_レ与_レ一_レ撈_レ道、大恩饒舌、待_レ見_レ与_レ他_レ一_レ頓。箇_レ些_レ子_レ、過_レ如_レ滴_レ油_レ箭、稍自眼力不_レ到、喪身失命無_レ疑_レ矣。然步驟既高、徒設_レ陷_レ弄。反_レ与_レ黄檗一_レ掌_レ云、說_レ甚_レ待_レ見、即今便打。已是將_レ驢_レ鞍_レ橋_レ作_レ阿_レ爺_レ下_レ額、父子投機、既無_レ縫_レ罅。方且言、引_レ者_レ風_レ顛_レ漢_レ參_レ堂_レ去。彼此落_レ便_レ宜、豈比_レ今_レ時_レ濫_レ拋_レ師_レ席、以_レ実_レ法_レ籠_レ單_レ来_レ学、以_レ寮_レ舍_レ穩_レ便_レ養_レ育_レ人_レ才、以_レ推_レ衣_レ讓_レ食、苟_レ圖_レ縫_レ罅、以_レ通_レ相_レ援_レ引_レ欲_レ盛_レ本_レ宗。苦哉苦哉、正音絶_レ矣。古_レ来_レ尊_レ宿、動_レ於_レ劍_レ刀_レ上_レ求_レ人、尚_レ不_レ得_レ二_レ半_レ、何_レ況_レ繩_レ墨_レ之_レ法_レ耶。若是_レ真_レ正_レ本_レ色_レ衲_レ僧、具_レ透_レ関_レ眼、未_レ必_レ甘_レ心_レ死_レ在_レ黄_レ檗_レ臨_レ際_レ句_レ下_レ。

という蓬萊の長老可宣に与えた法語が収められており、おそらく可宣が蓬萊寺に新たに開堂出世するのの際して饒別に贈ったものであろう。智愚はこのとき「臨濟大悟」の因縁をもって可宣に説示し、透関の眼を具して学人接化に努めるべきことを求めている。道忠は『虚堂和尚語録梨耕』巻一一「法語」の「示蓬萊宣長老」の註において、

蓬萊宣、名可宣、号_二無示_一。編_二報_レ恩_レ録_一者。忠曰、正誤宗派図 百九丈 虚堂下曰、明州無示可宣。後七新添 七丈 答_二蓬萊宣長老_一。書曰、蓬萊海上名山、前輩行道之地。

という考証をなしている。これによれば、道忠は可宣が明確に智愚の法嗣であることを、『正誤宗派図』の記述と法語の内容から理解していたことが知られる。

ところで、可宣が住持したとされる蓬萊とは、智愚の郷里である明州象山県に存した禅寺であつて、『宝慶四明志』巻一一「象山県志」の「寺院 禅院」に、

蓬萊山広福院、県西南三十里。旧名_二蓬萊院_一。漢乾祐元年置。皇朝熙寧元年、改名_二寿聖_一。權發州永康県劉清記。紹興三十二年、改賜_二今額_一。常住田四百八畝、山一千八百九畝。

とあり、『延祐四明志』巻一八「釈道攷下」の「象山県寺院」にも、

蓬萊山広福寺、県西南三十里。旧名_二蓬萊院_一。漢乾祐初置。宋熙寧初、改_二寿聖_一。紹興間、改_二今額_一。權發州永康県劉清記曰、（中略）。

と記されており、伽藍の大まかな変遷が知られる。可宣が住持したのは明州象山県西南三〇里に存した蓬萊山広福禅寺の

ことであり、この寺は後漢（五代）の乾祐元年（九四八）に蓬萊院として創建され、北宋の熙寧元年（一〇六八）に寿聖院と改められ、さらに南宋の紹興三二年（一一六二）に蓬萊山広福寺の額を賜っている。

同じく『虚堂和尚語録』巻四「真贊」にも、

蓬萊宣長老請

碎咏之機、臨崖一撈、虎嘯龍吟、二九十八。宣禅自是惡冤家、学伊豈止頂門睛。

という蓬萊山の可宣に与えた自贊のことばが載せられており、これはおそらく可宣が蓬萊山広福寺に開堂出世した際、師の智愚の頂相を呈して智愚より贊を得たときのものであり、「二九十八」というのは可宣がそれまで智愚に随侍していた期間を記しているものと見られ、仮に智愚が報恩光孝禅寺に住持した端平二年（一二三五）から可宣が侍者として随侍したとすれば、一八年後の開堂は淳祐二年（一二五二）であったことになるが、状況的にはこれより若干は早かったものと見られる。また悪冤家とは生冤家ともいい、心の怨みのもとになる人、長年の仇敵のことであるが、転じて他を顧みず専心純一に仏道を求める人のことであって、可宣がきわめて求道心に燃え、激しい志気をもっていたことを意味している。

同じく『虚堂和尚語録』巻一〇「新添」にも、

答蓬萊宣長老書

智愚、啓復蓬萊堂頭無示禅師。二月初十、僕来収所惠書、且審住持縁法、増勝為耐。所言之心腹宣勞之人、時節使然、当体古風。地藏道、諸方說禪浩浩、争如我種田搏飯。者般說話、大有田地。風穴見破屋數間、單丁者七年。馮山喫椶斗子九載。此皆吾人事業、光明後世如此。但恐無久遠之心。今則利道交行、不可譽目也。況蓬萊海上名山、前輩行道之地。自當退步讓。以叢林為念、以衆人為心。自然般若之縁勝起、香風四吹、何患無宣勞者、勉旃。是請承惠紫。茹函月、不甚佳想、交通如此。靈隱已脱、還相伴而已。光老、恐三月初進院、移單歸松源塔所去。庶耳根清淨、又得江湖兄弟相伴飲茶道話。足矣。寄來提唱、已二点校付、則師封去。縁方郎母信、搭住幾時、凡後惜辭遣言、子細維割古今、詳尽大意、下勿処較。莫似諸方泥中洗土。春暄善宜調撰。至祝不尽。二月二十八日、智愚啓復。

という蓬萊山の可宣に宛てた書簡が載せられている。「答蓬萊宣長老書」の中に「光老」とあるのは曹洞宗宏智派の東谷妙光（？一二五三）のことであり、妙光が杭州錢塘県の北山景德靈隠禅寺に入寺する直前の宝祐元年（一二五三）二月二八日の日付が見られるから、その頃にすでに可宣は蓬萊山広福寺に住持していたことが知られ、先の説とも矛盾しない。お

そらく可宣はその出世開堂が虚堂門下でももつとも早かつた禅者であつたといえよう。智愚もまた門下の最長老格である可宣を尊崇し、特別に遇していたらしい消息が窺われるわけである。

また『無象照公夢遊天台偈軸并序』によれば、景定三年（一二六二）九月に天台山の石橋に登つた日本僧の無象静照（法海禅師、一一三四—一三〇六）がなした詩偈に寄せた作として、

龍山、可宣。

纔有「神通」便喫茶、半肩陰霧擁「晴霞」、莫教「蓋子」撲「落地」、夢境分明尽「七花」。
 厖眉雪頂歩「蒼苔」、山色空濛眼未開、謂是石橋親「躡倒」、急飯再打「鉄船」來。

という二首の偈頌が伝えられている。ここにいう龍山の可宣が無示可宣であるとするれば、可宣は在宋中の無象静照とも交流を持っていたことになる。静照は入宋して松源派の石深心月の法を嗣いだ人であるが、心月の示寂後は同じ松源派の智愚のもとに身を寄せて研鑽に努めており、その静照に智愚の高弟である可宣も関わりを持っていたことになる。龍山とはおそらく地名か寺名（山号）を指すものと見られ、仮に地名であるとすれば、可宣の出身地が判明することになるが、具体的な地域についてはいまだ確定し得ていない。この二偈を撰して静照に与えた当時の可宣が、いずれに在つたのかは定かでないが、静照と関わりを持ち得る状況にいたことが知られ、あるいはつぎに述べるがごとく金文山に住持していた師の智愚のもとに在つて化導の助化をなしていたのかも知れない。

ところで、田山方南編『禅林墨蹟』四四に大阪府の湯木員一氏所蔵の墨蹟（後に神奈川県の鈴木富太郎氏の所蔵となる）として、

南屏明知客訪別、復憶「日本故国」、護以「廿八字」錢「行」、宋鄭金文住山可宣。

玻際蓋子驗「同盟」、誰向「錢唐」敢進「程」、千里同風「一句子」、明々拳似到「山城」。

咸淳戊辰夏孟下浣、書于大円鏡。

「無爾」（方印） 「可宣」（方印）

（方印）

という作が伝えられており、これは国の重要文化財に指定されている。内容としては南屏山浄慈報恩光孝寺で知客を勤めた南浦紹明が径山の智愚の席下を辞して日本に帰るのに際して、可宣が親しく書して紹明に贈つた送別の詩偈にほかならない。ただし、この墨蹟は智愚をはじめとする中国禅者が帰国する紹明に書き与えた偈頌を一書にした『一帆風』には収

められていない。

なお、このとき可宣が住持していた鄞の金文とは、かつて智愚も住持したことが存する明州鄞県の金文山栢巖慧照禅寺のことを指している。金文山慧照寺については『宝慶四明志』卷一三「鄞県志」の「寺院 禅院」に、

金文山惠照院、県東南七十里。旧号金文憺院、唐乾寧二年建。皇朝治平元年、賜今額。常住田二百七十畝、山二千三百三十畝。

とあり、『延祐四明志』卷一七「釈道攷中」の「鄞県寺院 禅院」にも、

金文山惠照寺、県東南七十里。旧号金文憺院、唐乾寧二年建。宋治平元年、賜額。

と記されていることから、簡略ながら伽藍の変遷が知られる。これらによれば、金文山は鄞県東南七〇里に存し、古く唐末の乾寧二年（八九五）に伽藍が創建されて金文憺院と称せられていたが、北宋の治平元年（一〇六四）に惠照院または惠照寺の額を賜っている。師の智愚も可宣が住持する数年前にこの寺に化導を敷いたことが知られており、おそらく可宣は師の智愚の後席を継ぐかたちで、象山県の蓬萊山広福寺から鄞県の金文山慧照寺に入院しているものと見られる。

ところで、可宣の墨蹟で問題なのは「咸淳戊辰夏孟下泝」とあることであって、これは咸淳四年（一二六八）に当たり、夏孟は孟夏（四月）であり、下泝は下旬のことである。一般に紹明が智愚の席下を辞して日本に帰ったのはその前年の咸淳三年の冬であったとされている。では、これは単純に可宣が干支を錯誤したものと解せざるを得ないのであるうか。

しかしながら、咸淳四年の夏孟下泝が四月下旬とすれば、杭州の径山から明州の地に至り、さらに日本に向かう商船の都合などから、その間、紹明が金文山に赴いて法兄の可宣の席下を訪ねることがあったとしても不思議ではない。とすれば、この墨蹟は紹明が帰国する消息を知る上でも重要なものということになる。ちなみにこのとき可宣が送別偈を記した大円鏡とは、加賀（石川県）の大乗寺などに所蔵される『大宋名藍図』（『五山十刹図』とも）の「前方丈額」の項目に「大円鏡 金文」とあるから、金文山慧照寺の前方丈の名称であったことが判明し、この墨蹟の信憑性を窺わしめる。可宣が書して紹明に与えた錢別の偈頌は、紹明の帰国に際して四三人の中国禅者が贈った送別偈を集めた『一帆風』には収められておらず、その面でも貴重な作といつてよい。

『正誤宗派図』四には「明州無示可宣」とあるのみで、住持した禅刹の名は記されていないが、可宣は蓬萊山と金文山の二刹に住持したことが知られるわけである。紹明を見送って以降、可宣が如何なる活動をなしたのかは定かでないが、智愚の法嗣でも長老格であったことを踏まえれば、その後まもなく示寂しているものと推測される。

さらに注目されるのは景聡興岳が『虚堂録假名鈔』において「住蓬萊及東山香山、後住首山延寿」と記していることであつて、これによれば可宣は蓬萊山に住持した後、東山と香山に遷住し、最後に首山延寿に住したといふのである。これが如何なる伝承に基づいて著わされているのかは定かでないが、状況的には十分に認められるものではないかと推測される。東山とはおそらく明州鄞県東南四〇里に位置する東山慧福禅寺のことか、越州紹興府上虞縣西南五四里の東山国慶禅院のいずれかを指すものと見られ、かつて阿育王山を退いた智愚が金文山に住持するまでの間しばしば東山に閑居していたことが知られる。おそらく可宣はそつした縁故から東山にも住持する機会を得たものであろう。

つぎに挙げられている香山とは、地理的に見て明州慈溪県に存した香山智度禅寺のことを指しているものと見られる。『宝慶四明志』巻一六「慈溪県志卷第一」の「山」に、

香山、旧名大蓬山、又名蓬蓬山。県東北三十五里。山峯有巖、高四五丈、状如削成、有石穴、深三丈。其巖有三仏跡、或云上多香草、故以爲名。又云秦始皇至此、欲自此人蓬山、故号蓬蓬。山下有智度寺。石湖范居士、嘗有詩云、抖擞軒裳一閑屣、任教空翠滴烏巾、老身已到籃輿上、処処青山是故人。

とあり、同じく巻一七「慈溪県志卷第二」の「寺院 禅院」にも、

香山智度寺、県東三十五里。山旧名蓬蓬、以其自此可達蓬萊。真応大師惟宝道場也。（中略）皇朝天聖元年、賜寺額。元豊三年、守王誨以禱雨有驗、聞於朝、更常寂之号曰真隠。常住田一千二百三十二畝、山二千一百畝。

と記されている。また『延祐四明志』巻一八「釈道攷下」の「慈溪県寺院」にも、

香山智度禅寺、県東三十里。唐天宝中、僧惟実結庵。広徳初建寺、大歴中請額。

と簡略に記されている。これらによれば香山は慈溪県東北（または東）三五里ないし三〇里に存し、山名は大蓬山または蓬蓬山とも称したことが知られ、この山も蓬萊信仰に基づく発想が見られる。香山の山下には唐代に惟宝（惟実とも、真応大師？七八六）が創建したとされる智度禅寺が存しており、南宋代から元代にかけては明州の甲刹の一つに列せられて住持した禅者もかなり知られるから、可宣もこの寺に住持する因縁に恵まれたものである。

また可宣が最後に住持したと見られる首山延寿については定かでないが、『宝慶四明志』巻二二「象山県志全」の「寺院 禅院」に、

瑞雲峯延寿院、県北七里。旧名龍寿院。漢乾祐二年置。王説記。皇朝治平二年、改賜今額。常住田九百一十四畝、山二百七十畝。

とあり、『延祐四明志』卷一八「釈道攷下」の「象山県寺院」に、
延寿寺、東北七里。旧名龍壽。漢乾祐初置、治平初改今額。
と記されている明州象山東北七里に存した瑞雲峯延寿院(延寿禪寺)のことではないかと推測される。とすれば、可宣は晩年に郷里と目される象山県の禪寺に退隠し、余生を故郷の山野に終えたことになるうか。このように可宣は智愚と同郷の出身で、ほぼ郷里である明州地内の禪寺において久しく化導を敷いていたものと解してよいであろう。

- (1) 智愚の法嗣である無示可宣については、すでに西尾賢隆氏が「無爾可宣」筆墨蹟」、『中世の日中交流と禪宗』に所収)として論考をなしているので、これを踏まえながら考察を展開しておきたい。
- (2) 『増集続伝燈録』に付録される「五燈会元補遺」の「径山石橋可宣禪師」の章によれば、楊岐派の石橋可宣は蜀(四川省)嘉定の許氏の出身であり、華藏安民(密印禪師)の法を嗣いでおり、同門の別峰宝印(慈辯禪師、一一〇九—一一九〇)や大慧派の橘洲宝曇(少雲、一一一九—一一九七)と交遊したことが知られる。嘉定三年(一一二〇)に杭州の径山に住持し、仏日禪師の勅号を賜っている。根津美術館編『南宋絵画 才情雅致の世界』(二〇〇四年)によれば、「伝梁楷筆」豊干図」と伝馬麟筆「寒山拾得図」にそれぞれ可宣が径山住持として賛を付している。
- (3) 蓬萊山広福寺に住持した禪者としては、黄龍派に天童普交(一〇四八—一一二四)の法嗣である蓬萊智円があり、楊岐派に太平慧敷(仏鑑禪師、一〇五九—一一一七)の法嗣である蓬萊脚があり、また可宣と同じ南宋末元初には大慧派の東叟仲穎(？—一二七六)の法嗣である南圃似藻も住持している。ちなみに『虚堂和尚語録』卷三「栢巖慧照禪寺語録」は侍者似藻編であり、この似藻が南圃似藻と同一人物であるならば、似藻はもと金文山慧照寺の智愚のもとで侍者を勤め、その後、仲穎の法を嗣いで蓬萊山に住持していることになる。
- (4) 金文山慧照寺に住持した禪者としては、楊岐派に圓悟克勤(仏果禪師、一〇六三—一一三五)の法嗣である金文照と、息庵達観(一一三八—一二二二)の法嗣である栢巖凝があり、大慧派にも智愚と関わり深い笑翁妙堪(一一七七—一二四八)が住持しており、元代には玉溪思珉(仏心明妙禪師、？—一三三七)も住持したことが知られている。
- (5) 曹洞宗の徹通義介(義鑑、一一二九—一三〇九)が将来したとされる加賀(石川県)大乘寺所蔵「大宋名藍図」(『五山十刹図』)とも)の「諸山類集」には、「中門類」に「金文山 明州」とあり、「正門類」に「勅賜慧照禪院 明州」とあり、「前方文類」に「大円鏡 金文」と記されていることから、金文山慧照禪院の山門額や大円鏡の前方文額の名が残されており、可宣の墨蹟

とも合致していることが知られる。ちなみに慧介がこの寺に到ったのが景定元年（一二六〇）八月以降であったとすると、当時の住持は智愚であったことなる。

(6) 南宋末期に香山智度寺に住持した禅者としては、松源派に少室光睦があり、大慧派に偃溪広闡（仏智禅師、一一八九—一二六三）や介石智朋があり、また明初には使節として日本にも赴いた大慧派の仲猷祖闡（帰庵、？—一三八七）も住持している。

(7) 象山の延寿寺には『宝慶四明志』巻九「叙人中 仙釈」の「僧法平」によつて、大慧宗杲の法嗣である元衡法平が南宋初期に住持したことが知られる。また『雲外和尚語録』「偈頌」に「寄象山延寿無象和尚」が存するから、元代に曹洞宗宏智派の雲外雲岫と関わった無象和尚（松源派の無象易か）が住持したことも知られる。

(18) 平山本立

この人は法諱を本立といい、道号を平山と称している。『正誤宗派図』四には「平山本立」とあるのみで住持地は記されていない。『虚堂和尚語録』巻七「偈頌」に、

立禅人平山

依依遠勢接雲根、有路何曾氣急人、沢広既知蔵不得、異花靈草自生春。

という偈頌が存しているから、本立が平山という道号を用いていたことが明確に知られ、智愚も平山の道号に因んで偈頌を与えているわけである。また『虚堂和尚語録』巻七「偈頌」には、

立蔵主之三衢。

一会靈山已七年、寸心如鉄鼻遠天、無端歸去思前事、話到柯消石也穿。

という偈頌が存しており、これもやはり蔵主を勤めていた本立に与えたものであろう。その中で智愚が「一たび靈山に会いて已に七年」と記していることから、智愚が靈隠寺の鷲峰庵に閑居していた終わりの頃に本立は三衢すなわち衢州（浙江省）に赴いたことが知られる。

また『虚堂和尚語録』巻四「真贊」には、

本立蔵主諱

春山万疊 秋水一痕、凜然風彩、何処求真。大方出没兮全生全殺、叢林徘徊兮独角一麟。

という蔵主の本立の請によって記した頂相の眞贋が載せられている。この自贋については無著道忠が『虚堂和尚語録梨耕』巻一一「眞贋」の「本立蔵主請」において、

本立蔵主請。溪曰、偶頌部 後六、十七文 有立禪人平山道号頌、蓋此人乎。又此眞贋蹟画像、現在正法山妙心寺。

という記載をなしており、智愚が蔵主の本立に与えた贋を載せる画像が京都花園の正法山妙心寺に現存していたことを伝えている。実際に妙心寺には、

春山万曇 春水一痕、凜然風彩、何処求真、大方出没兮全生全煞、叢林排排兮独角一麟。

本立蔵主、絵 老僧陋質一請、眞。

宝祐戊午三月、虚堂叟知愚、書于育王明月堂。 「智愚」(方印) 「虚堂」(方印)

という自贋頂相が現在も所蔵されている。これによれば、この贋が著わされたのは宝祐六年(一二五八)三月のことであり、明州(浙江省)鄞県東の阿育王山弘利禅寺の住持であった智愚が寺内の明月堂において記したものであることが判明する。ときあたかも智愚が宰相の呉潜との不和から下獄される直前のことであり、本立はこのとき阿育王山で蔵主として智愚に随侍していたわけである。この頂相が如何なる事情で日本に伝来し、妙心寺に所蔵されることになったのかは定かでないが、おそらく所持していた本立が示寂した後、所蔵者を変えて転々し、やがて日本僧の手に渡って日本禅林に将来され、有縁の妙心寺に贗されているものであると推測される。

ただ、残念なことにこの人に関してはその住持地が記されておらず、その後、本立が江南禅林で如何なる活動をなしたのか、その消息については定かでない。

(1) この妙心寺に所蔵される智愚の自贋頂相については、毎日新聞社刊『大徳寺墨蹟全集』第一巻に載せられており、若干の解説が付されている。

(19) 東洲曇瑞

『正誤宗派図』四には「東洲曇瑞蔵主」と記されており、法諱の下字のみが瑞と記され、道号を東洲と称している。『正誤宗派図』では住持地は記されておらず、何れかの禅刹において蔵主の職位を勤めたことが知られるのみである。ちなみに

無著道忠は『虚堂和尚語録梨耕』巻五「宝林語録」において、

惟俊。溪曰、偶頌部 十二文 有「冬夜示_レ俊侍者_レ偈」。又七後録真贊 一文 有「慶遠俊長老請_レ贊。恐此人乎。又曰、江湖集東洲瑞

蔵主註曰、嗣_レ虚堂、住_レ天台万年、或云_レ諱惟俊。と云う記事を残している。これは明らかに道忠が東州惟俊と東洲瑞蔵主を混乱したものであり、両者は嚴格に区別すべきであろうが、東洲瑞蔵主の消息を伝えている点でも注目される。

ところで、南浦紹明が日本に帰国するのの際してまとめられた『一帆風』には、

又 送_レ南浦明公還_レ本国。 鄞江曇瑞。

十載曾爲_レ宋地僧、青山無_レ鬻水無_レ塵、万年一念難_レ拋棄、海國誰分眼底青。

と云う鄞江の曇瑞がなした送別偈が載せられており、この人とは別に「天台惟俊」の作も載せられている。ここにいる曇瑞が東洲瑞蔵主のことを指すのであれば、この人は明州鄞県を流れる鄞江に沿った地の出身であったことが判明し、出身地に因んで東洲と号したものと見られ、日本に帰国する紹明とも交流を結んでいたことにならう。一応、ここでは東洲瑞を紹明と関わりが存した曇瑞その人のことであると解し、しかも東州惟俊とは全くの別人としておきたい。また『江湖風月集』巻下には「東洲瑞蔵主」の作として、つぎのとき三首の偈頌が伝えられている。

月江。

長天粘_レ水水粘_レ天、一片水輪上下円、千里清光流不_レ尽、曉風吹上_レ藏公船。

淨頭。

触_レ辺明_レ淨淨明_レ触、一種工夫實_レ肯人、苜蓿用來隨_レ日禿、塵埃難_レ上_レ藏箕唇。

天衣生縁。

長空雁影沈_レ寒水、老去病深無_レ奈何、土肉不_レ医_レ山骨瘦、鶴峯溪上夕陽多。

ここでも曇瑞は東洲瑞蔵主と記されており、やはり住持地の名は付されていない。また『新編江湖風月集略註』巻下の註にも東洲瑞蔵主について、

東洲瑞蔵主、嗣_レ虚堂、住_レ天台万年。或云_レ諱惟俊、宗派圖万年東洲惟俊、瑞後改_レ俊。

と記されており、ここでも東州惟俊との混同が見られ、天台山の万年寺との関わりが記されている。「月江」とは門人や後輩に与えた道号領であろうが、あるいは同じ松源派の月江正印（松月翁、仏心普鑑禪師、一一六七？）に授けたものである可能性も存しよう。「浄頭」とは寺内の東司を掌る職位であり、「天衣生縁」とは雲門宗の天衣義懷（振宗大師、九九三—一〇六四）の出生にまつわる因縁を詠じたものである。

東洲瑞は蔵主の職位を勤めていたことが知られるものの、智愚に嗣法した後、天台山の万年寺に住持したとされる。また一に「東洲惟俊」のこととされ、瑞の法諱を惟俊に改めたと解している。しかしながら、東洲惟俊と東洲瑞は同じく智愚の法嗣ではあっても、まったくの別人と解するべきであり、万年寺に住持したというのも惟俊のことであるから、これも誤りではないかと見られる。

東洲瑞は生涯にわたって禪宗叢林の要職を勤めることで終わり、諸刹の住持には就かなかつたと解されるが、『江湖風月集』巻下には「蜀古帆慈和尚」の作として、

東洲

震旦源流見日長、未応容易共論量、誰知沙渚行人少、黃鶴樓高轉夕陽。

東洲出世定水。

千鈞繫重已難言、歎血盟從定水辺、錢陌是誰知省數、草深一丈法堂前。

という偈頌が載せられている。東洲を松源派の石林行輩（一説に横川如拱）の法嗣である東州寿永のことを指すのではないかとする説も存するが、東洲と東州の相違があり、同じ『江湖風月集』に「東洲瑞蔵主」の項が存している以上、ここにいう東洲とは東洲瑞すなわち曇瑞のことであろうと推測される。曇瑞が開堂出世したとされる定水とは、明州慈溪県西北五〇里に存した定水教忠報徳禪寺（定水寺）のことである。定水寺については『寶慶四明志』巻一七「慈溪県志第二」の「寺院 禪院」に、

定水寺、県西北五十里、近鳴鶴山。唐乾元二年建、名清泉。世以爲虞世南故宅。皇朝改今額。紹興七年、更爲禪刹。寺有泉甘、寒宜煎煮。暑月汲之、久停不腐。有大蔵經殿、唐京兆韓杼材記。常住田九百七十畝、山六百三十九畝。

とあり、『延祐四明志』巻一八「釈道攷下」の「慈溪県寺院」に、

定水教忠報徳禪寺、県西北五十里。唐乾元間、僧一華建、名清泉。宋嘉熙初、袁枢密増田建寺、請於朝、賜今額。

虚堂智愚の嗣法門人について（佐藤）

と記されており、その大まかな変遷が知られる。慈溪の定水寺にはすでに曇瑞に先立って同じく智愚の法嗣である宝葉妙源（晋之、二二〇七—二二八〇）が住持していることから、おそらく曇瑞は法兄の妙源の後席を継ぐかたちで定水寺に入院開堂しているものであろう。ただ、『江湖風月集』と『正誤宗派図』はともに「東洲瑞蔵主」として記しており、曇瑞はあくまで蔵主の肩書きであることから、実際に定水寺に化導を敷いた期間はきわめて短期に限られ、まもなく示寂したものはなかるうか。

(1) 蜀（四川省）出身の古帆慈が如何なる系統の禪者なのかは定かでないが、「古帆未掛因縁」に因む名称であることから、智愚や石帆惟衍なども関わり存した人ではなかるうか。古帆慈の「東洲出」世定水」の偈頌は『虚堂和尚語録』巻一〇「法語」の「雪峯釋林果禪師語録跋」に「大憲下尊宿、尚多足陌。虎丘下子孫、尚多省數。足陌使_レ之有限、省數用_レ之無窮」という発想を受けているものと見られ、智愚の法を伝えている点を強調したものでなかるうか。

(2) ただし、『清容居士集』巻四〇「疏」に「永禪師遺_二定水_一疏」が存し、東州寿永も定水寺に住持していることが知られるから、この推測は当たらないかも知れない。このほか曹洞宗宏智派の雲外雲岫（方巖、妙悟禪師、二二四二—二二三四）の『雲外和尚語録』「偈頌」には、

寄_二東洲和尚西圃菴居_一。

紫陌紅塵城子裏、清泉白石乱雲中、一般門戶無_二喧寂_一、花鳥不_レ來心境空。

答_二法華東洲和尚_一。

干戈倒用識_二安危_一、方便垂_レ慈接_二箇誰_一、每每見_レ僧陪_二面笑_一、祖師門戶放教_レ低。

と、いつ東洲和尚に寄せた一首の偈頌を載せているが、これが東洲瑞のことを指しているのか、東州寿永のことを指しているのかは定かでない。

『虚堂和尚語録梨耕』その他に載る法嗣

最後に無著道忠が『虚堂和尚語録梨耕』巻三「行状」の「嗣法十数人」の註において『正誤宗派図』に載る法嗣たちのほかに、さらに法嗣であると指摘している石門無隱・壞衲無補・巨山志源・雪蓬慧明という四禪者、および別個に法嗣

と目される静翁法臺について若干の考察をなしておきたい。

(20) 石門無隱

無隱は道号を石門と称したらしいが、その詳細は定かでない。ただ、『虚堂和尚語録』卷一「慶元府顯孝寺開山語録」に「侍者無隱編」とあるから、無隱が智愚に參隨したのはかなり早い時期であったものと見られ、智愚が明州慶元府内の顯孝寺（所在地が未詳）に開山として招かれた際に、すでに侍者として隨侍して上堂語録を編していたことが知られる。景聡興島は『虚堂録假名鈔』（単に『虚堂録抄』とも）卷一「慶元府顯孝寺開山語録」にて「無隱八師ノ小師也。不出世ノ人也」と記しており、無隱が智愚の小師（剃度の弟子）であり、出世開堂せずに終わった人と伝えている。また無著道忠は『虚堂和尚語録梨耕』卷三「顯孝語録」の「無隱」の註において、

無隱。溪曰、即師之門人。法語中有示無隱侍者。真讀有無隱請者。偶領有隱侍者遊乳峯。偶。

と記しており、智愚の門人と解して『虚堂和尚語録』の中から無隱に関する記事を抽出している。

実際に『虚堂和尚語録』卷四「法語」には、

示無隱侍者。

初機學道、如深山彌猴、被鉄索縛住、見人眼生、只管跳跳。得形衰氣索、然後教之以芸、或刺鎗使禪、担水打毬。弄得既熟、方可下去。此案子、風前月下、水際雲根、任之自然。驚忽叫一声、孫大你来。他便突出面前。及問他所習之芸、便如裏火飛。若如是体究、安得不妙。有般漢便道、虚堂年老心孤、殊不知、狗不护家貧。

という侍者の無隱に与えた法語も伝えられており、智愚は深山に居る猿を捕えてこれに芸を覚えさせるのに準じた学人接化をなしている。興島は『虚堂録假名鈔』卷四「法語」においても、

示無隱侍者。請師ノ真贊人也。法嗣トミエタ。初心ノ人也、又編師頌古人也。

と記しており、ここでは法嗣として位置づけている。ただし、このときの法語はその内容から初心の人に対する説示としてとらえている。

さうして『虚堂和尚語録』巻四「真贋」には、

無隠侍者請

斗斗_レ听_レ听、雷_レ駭_レ電_レ馳、垂_レ手_レ末_レ遊_レ象_レ外、虚空_レ突_レ出_レ臺_レ簾、目前_レ難_レ過_レ密、冷落_レ有_レ誰_レ知、父_レ攘_レ羊_レ子_レ証_レ之、從_レ教_レ方_レ古_レ黑_レ風_レ吹。

といふ智愚が侍者の無隠に与えた自贗が存している。また『虚堂和尚語録』巻五「頌古一百則」も「侍者無隠編」とあるから、やはり無隠が侍者として編集したものであることが知られ、つづく巻六「代別一百則」は編者名が記されていないもの、おそらく同じく侍者の無隠が編したものと推測される。したがって、無隠は智愚の著述でも頌古と代別という重要な作をまとめているという点できわめて興味深い存在といつてよい。

また同じく『虚堂和尚語録』巻七「偈頌」にも、

無隠侍者遊乳峯

寶_レ深_レ性_レ古_レ雪、霄_レ岸_レ列_レ危_レ巒、到_レ者_レ難_レ披_レ頂、尋_レ師_レ多_レ壳_レ單、無_レ時_レ雲_レ氣_レ重、長_レ帶_レ瀑_レ声_レ寒、換_レ得_レ入_レ門_レ句、歸_レ來_レ似_レ我_レ看。

といふ偈頌が存している。これは侍者の無隠が乳峰（乳賣山）すなわち明州奉化東西の雪賣山資聖禅寺に遊歴するのの際して智愚が与えた偈頌である。しかも注目すべきは興詠が『虚堂録假名鈔』巻七「偈頌」の「無隠侍者遊乳峯」において、

無隠侍者 号_二石門_一、嗣_二主堂_一也。嘗_二在天童石帆会_一、為_二都寺_一也。

と記していることであつて、道忠も『虚堂和尚語録梨耕』巻一「真贋」の「無隠侍者請」の註において、

無隠侍者、編_二顯_レ孝_レ錄_一者。又_レ後_レ六_レ偈_レ頌 廿八_レ丈_レ右 有_レ無隠侍者遊乳峯_レ偈。旧_レ解_レ曰、無隠侍者、号_二石門_一、嗣_二虚堂_一。嘗_二在天童石帆会_一下、為_二都寺_一。凡_レ侍者為_二都寺_一甚_レ希_レ矣。忠_レ曰、宗_レ派_レ因_レ虚堂_レ下_レ不_レ載、必_レ是_レ渡_レ唐_レ人_レ所_レ說_レ乎。

といふ興味深い内容を記している。これらによれば、道忠は『虚堂和尚語録』の旧解に、無隠が道号を石門と称し、智愚の法を嗣いだ門人とされていることを指摘しており、その後の無隠の消息として明州鄞県東六里の天童山景德禅寺において智愚の法弟である石帆惟衍に参じ、その席下で都寺の要職を勤めたことを明記している。これが如何なる伝承に因むものかは定かでないが、大日本国東海道相州路鎌倉県巨福山建長興国禅寺第十代勅諭大通禅師行実」によれば、惟衍が天童山に住持したのは咸淳六年（一二七〇）二月のこととされるから、おそらく無隠は咸淳五年一〇月に智愚が示寂して後、法叔の惟衍のもとに投じて都寺として化導を助化していることにならう。侍者が東序の都寺となる例が希である点が強調

されているが、おそらく無隠は寺の経営面にも堪能であったものと見られる。このとき西礪子曇（大通禪師、一二四九—三〇六）なども天童山で惟衍に参学していることから、無隠も若き子曇と交遊が存した可能性もあり、あるいは子曇を通じて日本禅林に齎された情報であったのかも知れない。

(1) 「大日本国東海道相州路鎌倉県巨福山建長興国禪寺第十代勅諭大通禪師行実」には、

六年庚午春二月、石帆有旨領天童。師隨侍行也。七年辛未、有本朝副元帥平公時宗鈞命。石帆和尚以法語一段勉其行。航海而來、即文永八年也。

とあり、一に「天童」が「天竜」に誤写されているものの、惟衍が天童山に住持した翌年に、子曇が惟衍の法語を持参して日本に到って執権の北条時宗（法光寺殿、道果、一二五一—一二八四）に呈していることが知られる。

(21) 壞衲無補

無補は道号を壞衲と称したらしいが、その詳細は定かでない。『虚堂和尚語録』卷八「虚堂和尚統輯」は「参学以文・無補・法光編」とあるから、無補が以文や法光とともに智愚の初住地である嘉興府の興聖禅寺より以降の上堂語録を増補編集してまとめたものであることが知られる。無著道忠は『虚堂和尚語録梨耕』卷二四「統輯」の「無補」に関する註において、

無補 忠曰、号壞衲、嗣虚堂。前四真贗 四丈右 無補侍者請 又前偈頌 廿八丈左 無補侍者遊方。

という記載を残しており、無補を智愚の法嗣として位置付けて、『虚堂和尚語録』から関連記事を抽出している。実際に『虚堂和尚語録』卷七「偈頌」には、

無補侍者遊方。

索索青鞋踏 晝霧、逢人屈指問 諸方、有無探討歸來日、糞火堆辺話 短長。

という無隠が諸方に歴遊するのに際して智愚が贈った偈頌が存しており、同じく『虚堂和尚語録』卷四「真贗」にも、

無補侍者請。

計較拙 於鳩、軒昂老而虎、聞必意消 見者難 覩。到頭不識實中主、黒漆竹篔 劈面揮、師資誰請無 禰補。

虚堂智愚の嗣法門人について（佐藤）

といつ無補の請で記した智愚の自賛が載せられている。景聡興助は『虚堂録假名鈔』（単に『虚堂録鈔』とも）卷七「偈頌」の「無補侍者遊方」において、

無号「懷衲」、住「興聖寺」也。嗣「丰堂」也。宗派「不載」之。

と記しており、道忠は『虚堂和尚語録梨耕』卷一一「真贊」の「無補侍者請」の註において、

無補。後六偈頌。廿八丈左。有「無補侍者遊方偈」。旧解曰、無補号「壞衲」、嗣「虚堂」、住「興聖寺」。宗派「不載」。忠曰、必是入唐人所「傳」也。

と記しており、ともに無補に関する簡略な註記をなしている。すなわち、ここでは旧解によるとして『正誤宗派図』には載せられていないが、無補は智愚の法嗣であり、しかも後に興聖寺に住持したと伝えている。ここにいづ興聖寺とは明らかに智愚やその法嗣の靈石如芝が住持した禅刹で、嘉興府郡治東北二〇〇歩に存した流虹興聖禅寺のことであろうから、史実であれば無補の活動として注目されよう。ただし、明確な史料があつたわけがなく、道忠としてもあくまで入宋した禅者が伝えたところの消息であるつと推測している。

(1) 以文についても『虚堂和尚語録』卷一〇「真贊」に「以文長老請」が存し、出世開堂したことが知られるから、晦叟法光や壞衲無補と同じく智愚の法嗣であつた可能性が高い。

(2) 巨山志源

法諱は志源であり、道号を巨山と称している。南浦紹明と同じく智愚の法を嗣いだ日本僧であるが、郷関や俗姓などは定かでない、生没年その他も明確でない。この人に関しては『延宝伝燈録』卷三「鎌倉禅興二世巨山志源禅師」の章が存しているが、

鎌倉禅興二世巨山志源禅師。歴「参華夷」、綜「覈内外」。又入「宋地」、参「侍虚堂和尚于浄慈双径間」、因「縁契」機、遂受「記荊」。辞覽「靈区」、及其遊「台厲」、堂付「偈曰」、師道「嚴明善応酬」。石橋「過了問」龍湫、「一華一艸人皆見」、是子知「機独點頭」。師歸「本朝」、住「相之禅興」、為「第二」代。「嘗遊」武之「東漸寺」、賦曰、「層欄危檻半江村」、海邊「山腰」樹影「昏」、目送「不」知餘「幾里」、孤烟「浅処」著「蟾痕」。

ときわめて簡略な記事が載せられているのみであり、その事跡には不明な点が多い。志源はその出身地や俗姓も定かでない、日本において如何なる遍参をなしたのかも知られないが、帰国後の活動などからすると、南浦紹明などと同じく松源派の渡來僧である蘭溪道隆のもとに投じた経験が存したものでないかと推測される。『延宝伝燈録』によれば、入宋して浄慈寺や径山において智愚に随侍したとされるから、南浦紹明や無象静照らとも同時期に智愚の提撕を受けた同参の間柄であったと見てよいであろう。もっとも実際には志源は智愚の浄慈寺住持期よりかなり以前からその門に投じていたものらしく、『虚堂和尚語録』卷七「偈頌」には、

日本源侍者游「台雁」。

師道嚴明善応酬、石橋過了問「龍湫」、一花一草人皆見、是子知「機独點頭」。

という偈頌が存している。『延宝伝燈録』に記された在宋中の記事もこの偈頌を基にしてまとめられた内容でしかない。ちなみに景聡興助は『虚堂録假名鈔』(単に『虚堂録抄』とも)卷七「偈頌」の「日本源侍者游「台雁」」において、

源侍者、号「巨山」、嗣「牛堂」、為「禅興第二代之長老」也。智弁過「人」為「長老」、雖「然」、不幸「短命」逝矣。

と記しており、無著道忠も『虚堂和尚語録梨耕』卷三「偈頌三」において、「日本源侍者游「台雁」」に註して、

旧解曰、源侍者、号「巨山」、嗣「虚堂」、為「日本禅興第二代之長老」。智辯過「人」、不幸「短命」而逝。忠曰、日本關東十刹第二福源山禅興禅寺、開山蘭溪隆禅师。或曰、禅興寺在相模州鎌倉建長寺裡。曰「明月菴」、十刹也。非「建長」之塔頭也。

という考察をなしている。「日本源侍者游「台雁」」の偈頌は智愚の会下にあった志源が台州天台県の天台山の石橋(石梁瀑布)や温州樂清県の雁蕩山の龍湫などに南遊するに際して、智愚が餞別として親しく付与したものである。その中で智愚はきわめて高く志源を評価しており、志源が紹明とともに智愚の法を嗣ぐに足る人物であったことが偈ばれる。ちなみに『虚堂和尚語録』卷三「臨安府浄慈報恩光孝禅寺語録」の編者のひとりに侍者至源の名が見られるが、この人が同時期に浄慈寺に在った日本僧の侍者志源と同一人物なのか否かは定かでない。

ところで、南浦紹明が咸淳三年(日本の文永四年、一二六七)の秋に智愚の席下を辞して日本に帰ることになるが、その間の消息を、『円通大応国師語録』卷末の「円通大応国師塔銘」はつぎの「ごとく」伝えている。

師辞皈「日本」、堂贈以「偈」曰、「敲「磬」門庭「細揣摩」、路頭「尽」处再經過、明明説与虚堂叟、東海兒孫日「転」多。復書「其後」曰、「明知客自「発

明後、欲告版日本。專照知客・通首座・源長老、聚頭説龍峯会裏家私、袖紙求法語。老僧今年八十三、無レ力二思察一、一偈隨行、万里水程、以レ道珍衛。

そして、これと呼応して実際に『虚堂和尚語録』巻一「虚堂和尚新添」には、

送二日本南浦知客一。

敲レ隘門庭、細揣磨、路頭尽処再經過、明明説与虚堂叟、東海児孫日転多。

明知客自一発明後、欲告日本。專照知客・通首座・源長老、聚頭説龍峯会裏家私、袖紙求法語。老僧今年八十三、無レ力二思察一、作二一偈以貧三行色一。万里水程、以レ道珍衛。

咸淳丁卯秋、住二大唐径山一智愚、書二于不動軒一。

という送別の偈頌が載せられており、「円通大応国師塔銘」の記事はこの偈頌に基づいて記されていることが分かる。この偈頌には、再び風波大難の大海を航して帰国せんとする紹明に対して、大いなる期待と慈誠をもって饑別を垂れ、その航海の無事を願わずにはいられない智愚の老婆心が込められている。このとき智愚はすでに八三歳の老齢に当たっているが、知客の紹明と関わりを持っていた照知客・通首座・源長老の三禅者とは誰なのか問題となる。三禅者が日本僧であったのか否かも明確でなく、照知客を無象静照のことと解する説も一概には領けない。「淨智第四世法海禅师無象和尚行状記」によれば、静照は在宋一四年を経て咸淳元年（一二六五）すなわち日本の文永二年に帰国したことであり、すでにこのときは帰国して二年あまりが経過している。つぎの通首座については定かでないが、問題は源長老であつて、これを同じ日本僧の志源のことを指しているかと解することができる。源長老とあることから、これを志源と解すれば、志源は智愚のもとに在るとき、すでに諸刹の住持を勤めた経験が存したことになる。しかしながら、当時すでに志源が南宋禅林で住持を勤めていたという可能性は低く、おそらくここにいる源長老とは智愚の高弟として開堂出世した後に径山で首座を勤めていた宝葉妙源（晋之、一二〇七—一二八〇）のことではないかと解される。

おそらく志源は智愚の法を嗣いで紹明と前後して帰国しているものと見られるが、その年時などは定かでない。『延宝伝燈録』によれば、帰国した後、志源は鎌倉山ノ内に存した福源山禅興禅寺の二世となったことが記されている。禅興寺は開基が執権の北条時宗（法光寺殿、道泉、一二五一—一二八四）であり、開山には蘭溪道隆が迎えられているが、文永五年（一二六八）かその翌年頃には創建されたものらしく、後には関東十刹の一つに列せられている。志源が道隆の後席

を継ぐかたちで禅興寺の第二世となつていとすれば、道隆の信認を受けて入寺しているものと見られ、智愚の法を嗣いだ禅者ないし智愚に参学した禅者としては道隆との繋がりを温存していたことにならう。

また破庵派の無学祖元（子元、仏光禪師、一一二六—一二八六）が武蔵（神奈川県）久良岐郡杉田（横浜市磯子区杉田）の豊桐山東漸寺の景勝を詠じた詩板が東漸寺に所蔵され、『五山文学新集』別巻一「詩軸集成」に「武蔵杉田東漸寺詩板」として収録されて一般に知られるが、その中に志源のものとして、

層欄危檻半江村、海邊山腰樹影昏、目送不知餘幾里、孤烟浅処著蟾痕。 巨山志源。

という偈頌が伝えられている。これは『延宝伝燈録』にも引用されており、祖元の作に和したものであり、現今に伝わる志源がなした貴重な偈頌である。祖元が来日したのは弘安二年（一二七九）のことであるから、志源は当時も健在で祖元とも親しく交流をなしていたことが知られる。

さらに注目されるのが祖元の『仏光国師語録』巻九「円覚開山仏光円満常照国師拾遺雜録」の「跋」に、

巨山和尚録序。

老虚堂、提破沙盆話、鬼神莫测其機、坐断千聖頂顛、肆口罵諸方、東山之道、為之再振、老拙三十年、往來其門、頗亦知本末、添兵減寇、背水囊砂、出沒於万人叢裏、皂纛旗子、略不曾露。巨山提唱、眼目活脱、亦有父風、四海禅流、宜自著眼。

という跋文が載せられていることである。これは祖元が志源の『巨山和尚録』（正しくは『巨山和尚語録』か）に対して「巨山和尚録序」を付したものである。この記事による限り、志源の語録は何らかのかたちで祖元が示寂する弘安九年（一一八六）より以前にはある程度まとめられており、志源の門人らが祖元に序文を請ったものと見られる。また祖元は志源を明確に智愚の法を嗣いだ高弟として位置づけて「巨山の提唱、眼目活脱として、亦た父の風有り、四海の禅流、宜らく自ら眼を著くべし」と述べており、志源の接化提唱に智愚の風光を仰ぎ見ている。志源の足跡を知る上でも祖元が「巨山和尚録序」で語っている内容は貴重な消息を伝えているわけである。

この点、祖元の法嗣である規庵祖円（南院国師、一一六一—一一三三）も『南院国師語録』巻下「南院国師住瑞龍山太平興国南禅寺語録下」において、

因刊『巨山語録』上堂。劃水刀痕取不_レ得、敲空槌跡絶_レ追尋、松源正派今猶在、無限平人被_レ陸沈。という上堂を残している。すなわち、無学祖元の序文を得て後、志源の語録が実際に刊行され、五山版の『巨山和尚語録』が存したことが知られる。この『巨山和尚語録』が南禅寺の規庵祖円の下にも贈られてきたので、祖円は上堂してその刊行を南禅寺一山の大衆に告げ、志源のありようを偲ぶとともに語録発刊の慶賀を共にしているわけである。祖円もまた志源の語録を目の当たりにして、「松源の正派、今猶お在り」と述べており、志源が松源崇嶽の法統を正しく嗣続した人であることを称えている。

道志は志源について「智辯、人に過ぐるも、不幸、短命にして逝く」と記しているから、志源は才智と良弁にすぐれ、かなり叢林に名の通った人であつたらしいが、不幸にして短命に終わったとされている。志源がいつ遷化したのかは明確でないが、祖元の序文からすると志源はいまだ健在であつたと見られるから、その後、おそらく祖円が上堂をなす以前までの間に逝去しているものと見られる。志源には法嗣の名も知られておらず、その系統は何ら後世に継承されることもなかったわけであるが、同門の紹明の影に隠れていたとはいえ、智愚の法を嗣いだ日本僧として鎌倉禅林に化導を敷いた消息は特筆されてよい。『巨山和尚語録』が現今に残されていれば、志源の事跡が克明に述べられていたはずであり、また在宋中の智愚との関わりや同門の紹明との道交も知られたはずであり、その散逸はまことに惜しまれてならない。

(1) 巨山志源については、すでに玉村竹二『五山禅僧伝記集成』（思文閣出版）に「巨山志源（きよざんしげん）」として考察がなされている。

(2) 『扶桑五山記』二、大日本国禅院諸山座位条々」によれば、禅興寺は暦応四年（一一三四）には十刹の第二位に列し、建武政権では十刹第一位となっており、康暦二年（一一三八）には再び十刹第二位となっている。また至徳三年（一一三八）の時点では関東十刹の第二位に列して、「禅興寺、相州、福源山、開山大覚禅師、檀那平時頼」と記されている。

(3) ただし、『大休和尚語録』『大休和尚住禅興寺語録』によれば、南宋より渡来した松源派（仏源派祖）の大休正念（仏源禅師、一一二五—一一八九）が文永六年（一一二九）一〇月九日に禅興寺に入院開堂を遂げていることから、志源が第二世であるならばそれ以前に住持していたことにならう。しかしながら、それでは志源の住持期間がきわめて短期に限られることになり、しかも帰国した直後の入寺となってしまうことから、状況的には肯いがたい。あるいは志源は正念の住持した後に禅興寺に開堂出世し、たと解する方が自然なのかも知れない。

(4) 智愚が志源に対して参究させたのは、『蓮華和尚語録』、『頌古』や『虚堂和尚語録』巻五「頌古」に載る虎丘派の密庵咸傑(一一八一—一一八六)の悟道に因む「密庵破沙盆」の古則であったことが知られる。破沙盆とは破れた摺り鉢のことであり、無用の長物を意味する。

(5) 南禅寺の寺名は乾元元年(一一〇二)の頃より使用されており、規庵祖円が示寂するのが正和二年(一一三三)四月のことであるから、『巨山和尚語録』はこの間に刊行されて南禅寺の祖円のもとに届けられていることとなる。

(6) 玉村竹二「五山禅林宗派図」(思文閣出版)の「臨濟宗楊岐派」虎丘下、松源派、巨山下」では「巨山志源」の法嗣として、「天真惟則」の名が記されているが、ここにいう天真惟則(一一〇三—一一七三)は無準師範・雪巖祖欽・無極志源と次第する元末明初の破庵派無準下の禅者であつて、巨山志源とは無関係である。

(7) このほかに大応派(妙心寺派祖)の関山慧玄(一一七二—一一六〇)の伝記史料の一つである「関山国師別伝」に、老祖順世之後、師親「次同門著信月谷・物外・巨山・栢庵等」二十年。

といふ記事が存しており、南浦紹明(老祖)が示寂した後、慧玄が二〇年間に参学した禅者の一人に巨山志源の名が挙げられている。ただし、「関山国師別伝」についてはすでにその信憑性が甚だ疑われており、紹明の示寂後に志源に参じたというのも史実としては認めがたいであらう。この史料で志源とともに名が挙げられている禅者は、月谷宗忠(一一三四—)・物外可什(真照大定禅師? 一一三五一)・栢庵宗意であるが、彼らはいずれも紹明の法嗣である。「関山国師別伝」については加藤正俊『関山慧玄と初期妙心寺』(思文閣出版)に詳しい。

(23) 雪蓬慧明

雪蓬慧明(友雲、一一三六?)については、無著道忠が智愚の法嗣のひとりとして名を挙げているものの、実際には智愚の法を嗣いだ門人というわけではない。しかしながら、この人は晩年の智愚との関わりにおいて興味深い消息を多く含んでいることから、諸史料を通してその足跡を整理することはそれなりの意義が存するであらう。

また後に触れるごとく、『一帆風』に載る慧明の序などによれば、この人は杭州(浙江省)臨安県の天目山にほど近い若谿の出身であつたと見られる。『禅籍志』巻上「宗門全史類」の「五燈会元」の項によれば、法諱の慧明のほかに、字を友雲、道号を雪蓬(または雪蓬)と称している。また後に触れるごとく慧明が出生したのは宝慶二年(一一二六)であつて、来日した破庵派(仏光派祖)の無学祖元(子元、仏光国師、一一二六—一一八六)と同年であつたとされる。

慧明が如何なる参学をなしたのか、その詳細などは定かでないが、『禅籍志』によれば、松源派の滅翁文礼(天目樵者

一一六七—一二五）に參じて法を嗣ぎ、松源崇嶽の法孫に名を連ねたとされる。なお、この点は『正誤宗派図』四においても「天童滅翁文礼 天目樵者」の法嗣として「雪蓬慧明 編『五灯会元』」と記されており、やはり文礼の法嗣に挙げられている。おそらく同じ杭州臨安県の天目山付近の出身であった文礼を慕つてその門に投じ、坐禅辦道の末に法を嗣いでいるものであろう。文礼は智愚の師である運庵普巖と同門であるから、系統的には智愚にとつて慧明は法從弟ということになる。文礼は晩年を明州鄞県東六〇里の天童山景德禪寺に化導を敷いていることから、慧明もおそらく天童山において文礼に參學しているものと見られるが、両者の間に交わされた問答などは伝えられていない。

ところで問題なのは、慧明が『五灯会元』の編集にかなりの働きをなしていたらしい事実である。一般に『五灯会元』といえは、大慧派の大川普濟（一一七九—一二五三）が杭州錢塘県の北山景德靈隱禪寺の住持として自ら編纂したものとくに解されている。ところが、『禅籍志』卷上「宗門全史類」の「五灯会元」の項には、

日本叢林、自_レ古伝、濟大川住_レ靈隱時、有_レ侍者慧明者、博涉_レ經史、以_レ文自負。一日語_レ諸道友曰、視_レ五燈之作、筆削不_レ精、吾將_レ補_レ綴罅漏、刪_レ除冗長、以_レ著_レ一書。公等其_レ勦_レ力乎。諸友皆諾。時虚堂愚和尚未_レ出世、偶在_レ靈隱、謂_レ明侍者曰、夫燈錄之書、皆從上宿德之撰也、公以_レ妙齡欲_レ自任、寧非_レ僭越_レ哉。請納_レ長者之言、且緩緩去。明不_レ從焉。遂造_レ斯五燈会元三十卷。余以_レ為_レ明雖_レ是_レ虚堂諫、伎痒禁不_レ得、遂滿_レ其志、而不_レ自宰、請_レ大川_レ為_レ撰者_レ也。不_レ然、何有_レ大川之名_レ乎。明字友雲、号_レ雪蓬、後嗣_レ礼滅翁、為_レ松源法孫。

といつ日本禅林に伝わる興味深い伝承を載せている。これによれば、靈隱寺の普濟の席下で侍者を勤めていた慧明は文才にかなりの自負があり、あるとき道友を集めて『景德伝燈錄』『天聖広燈錄』『建中靖国統燈錄』『宗門聯燈会要』『嘉泰普燈錄』の五燈を再編成して『五灯会元』を編集するという事業を企てたとされる。おそらく文礼が示寂した後、慧明は天童山を離れて杭州に舞い戻り、靈隱寺に掛搭して侍者として普濟に師事したものであろう。道友たちも慧明のこの企画に賛同し、慧明を陣頭に立てて靈隱寺で『五灯会元』の編纂が進められていったとされる。

ときに靈隱寺山内の鷲峰庵に閑居していた智愚が慧明の妙齡なさまを見て、「夫れ燈錄の書は、皆な從上宿德の撰なり。公、妙齡を以て自ら任ぜんと欲す、寧んぞ僭越に非ざらんや。請つ、長者の言を納れて、且緩緩にし去れ」と一旦は諫めるが、慧明はその忠告に従わず、ついに『五灯会元』三〇卷（實際は二〇卷）を編集し終えたというのである。

この伝承がかなり信憑性の高いものであることは、智愚が法祖松源崇嶽の塔頭である鷲峰庵に閑居していたのが『五燈会元』編集刊行の時期と重なっていることであり、五山版（覆宋版）の『五燈会元』の冒頭に宝祐元年（一二五三）の清明の日に王楙（通庵居士）が記した序が存しているが、その中で慧明に関して、

今慧明首座、萃五燈為一集、名曰五燈会元、便於觀覽。沈居士捐財鳩工、鏤梓於靈隱山、実大川老・盧都寺贊成之。

という記載が見られる点であろう。王楙の序文によれば、慧明という首座を陣頭に、靈隱寺での事業として諸禪人が集まって一書を集成し、安吉州（湖州）武康県崇仁郷禹山里の沈浄明らの捨財によってこれを版に興し、住持の大川普済と盧都寺という禪者がその事業を傍らで賛助したというのである。しかも宝祐元年に『五燈会元』が完成する時点では慧明はすでに侍者の職位から首座へと拔擢され、靈隱寺山内に重きをなしていたことが知られる。

では、『五燈会元』を編集し終えて以降、慧明は如何なる活動をなしていたのであろうか。『五燈会元』を編集した直後の慧明の消息を伝えるものとして、『仏光国師語録』巻九「拾遺雜録」の「跋」に、破庵派（仏光派祖）の無学祖元（子元）が来日以前に記した「送雲溪歌并序、諸老題跋附」という頌軸に題跋を寄せた老宿の一人として、

觀子元之言、麗而有則、豈特砥礪交道。至如屈宋班馬、弘雲之翼、若摩撫而入、人見而畏之。噫、子元与余同年、何其可畏之多耶。若溪慧明。

という慧明の題跋が載せられている。慧明がこの題跋を付した年時は記されていないが、これにつづく天台（浙江省）出身の徳垢の跋に、

二友交義如金、諸公吐詞如玉。余不敢贊、記歲月以附行卷。
時宝祐丙辰中秋日也。天台徳垢。

とあるから、ほぼ同じ頃になされたものと見られる。ちなみに天台の徳垢とはおそらく無準下の断橋妙倫（松山子、一一二〇—一二二六）の法嗣である古田徳屋（一一九二）のことであろうが、徳垢は宝祐四年（一二五六）中秋日すなわち八月一日に跋を寄せているから、慧明も若干ながらこれに先んじて跋を記しているものと見られる。とりわけ、注目すべきは慧明が祖元について「噫、子元は余と同年なるに、何ぞ其れ畏るべきの多きや」と述べていることであり、これによれば、慧明は子元すなわち祖元と同年の生まれであったことが知られ、宝慶二年（一二二六）の出生であったことが判明する。

とすれば、『五燈会元』を完成させた宝祐元年の時点ではいまだ二八歳であつたことになり、まさに『禅籍志』に言つてくゝ慧明が妙齡にして、『五燈会元』の編纂を企てた消息が知られるのである。

ところで、『仏光国師語録』巻九「拾遺禪録」に載る「告香普説」や、松源派の無象静照が状した「仏光禪師行状」と、智愚の法嗣である曇石如芝が状した「無学禪師行状」と、祖元の俗姪孫である曹洞宗宏智派の東陵永興（妙応光国憲海慈濟禪師、二八五—三六五）が撰した「大日本国山城州万年山真如禪寺開山仏光無学禪師正脈塔院碑銘」などによれば、祖元は淳祐二年（一二五二）に靈隠寺の鷲峯庵（松源塔下）に到つて隠閑中の智愚に参じ、秋には明州の天童山に赴いてゐることから、同年代の慧明と知り合つたのもこの頃と見られ、ともに智愚の接化に浴してゐたことになる。

また『虚堂和尚語録』巻一〇「法語」にはその後の慧明の消息を伝えるものとして、

雪蓬明長老赴禾興光孝。

雪蓬明考 相従有日、自育王過東山、客棚之下、温然如春、此老之力也。在南屏居第一座、忽灑湖有公選之。二年復勝集于双径、仍歸第一座、羣心歎如。今領朝命、退赴禾興光孝。臨岐聊據數語、以当祖行。卓錫無地、空余双眼、盖乾坤、鉄笛横吹、有氣不吞、雲夢沢、煙波渺渺、蘭棹依依。雪簷霜冷相宜、幾度揭開閑对月。鷲湖深处、不必垂糸、長水江頭、錦鱗自得。臨岐句子、如何分付。風飄飄兮吹衣、水冷冷兮声詩。

咸淳戊辰秋九月、虚堂老僧書于不動軒、是年八十四。

という法語が載せられている。ちなみに景聰興島は『虚堂録假名鈔』（単に『虚堂録抄』とも）巻一〇「法語」の「雪蓬」において、

雪八号、諱八惠明、嗣虚堂、住天寧也。禾興ノ光孝八、嘉興府報恩光孝寺也。虚堂モ、自嘉興府興聖寺、移嘉興府ノ報恩光孝寺也。

と記しており、無著道忠は『虚堂和尚語録梨耕』巻二九「法語」の「雪蓬明長老」において、

雪蓬明長老 前六偶頌 廿二文右 有明知客江心訪竺菴偶。忠曰、竺菴、靈隠北高峯也。虚堂退宝林、歸松源塔下。靈隠在七十歳前後。而此法語、咸淳四年作、師八十四歳也。見前偶有勸励語。構林句子千鈞重、江上帰來記得無、今云此老之力也。実与宝祐初相距十五年、其語異前不可怪。旧解曰、雪蓬諱慧明、嗣虚堂、住天寧。忠曰、旧解蓋唐人伝來之説、又蓬作蓮、尤是蓬恐訛。細字古刊亦作蓬非也。増統伝燈及正誤宗派、虚堂下不載雪蓬。

と慧明について註を付している。この法語によれば、その後、慧明は明州鄞東の阿育王山弘利禅寺に住持した智愚に随い、さらに智愚が世の讒言を受けて時の宰相吳潛によつて住持の座を追われて越州上虞縣西南の東山園慶禅院に隠閑した際にも同行し、智愚のもつとも不遇な時期をともに生きていることが知られる。智愚の忠告をあえて斥けて、『五燈会元』を編集した慧明が、やがてその智愚に随順するのはまことに奇しき因縁といつてよく、智愚が杭州の淨慈寺に住するや慧明は首座に迎えられている。

慧明と同門に当たたる松源派の石林行肇（一一三〇—一一八〇）は景定五年（一二六四）三月三日に湖州（浙江省）帰安県の思溪法宝資福禅寺（もと円覚禅院）に住持しているが、『石林和尚語録』巻上「思溪法宝資福禅寺語録」によれば、

謝雪蓬明首座_レ上堂。大衆、握_レ龜毛筆、攬_レ翻經翠、余波西湖、更無行路。拈_レ兎角杖、穿_レ聖臨濟、大樹頑石、不敢點頭。鎔_レ尽規模、裂_レ破今古。且道、是什麼人分上事。夜寒回_レ首清苔外、万頃蘆花雪_二一蓬。

という上堂が存し、その後しばらくした上堂に「理宗皇帝昇遐上堂」が収められている。昇遐とは崩御のことであり、理宗（初名は貴誠、名は昀、一二〇五—一二六四）が崩御したのは景定五年一〇月のことであり、それ以前に慧明は西湖南畔の淨慈寺の首座の肩書きで思溪法宝資福禅寺の行肇のもとを訪ねていることが知られ、行肇は慧明の出身地である苕溪と道号である雪蓬にちなんだことばを述べている。ちなみに同じ『石林和尚語録』巻下「偈頌」には、

忠州陳安撫、廬州夏宣慰、委慈侍者、印_二造五燈会元_一、因説_レ偈寄_レ之。
鷲嶺寥寥照_二夜燈_一、非_レ明非_レ暗見_レ非_レ親、千年令_二焰一吹滅、白日青天兩箇人。

と記されており、おそらく思溪法宝資福禅寺において僧俗の篤志によつて慧明編集の宋版『五燈会元』が刊行され、行肇がこれに因んで偈頌を寄せている事実が知られる。

また『虚堂和尚語録』巻一〇「仏事後録」に「侍者恵明（慧明）編」とあるが、その冒頭に、
咸淳元年三月十一日、恭奉_二聖旨_一宣入_二大内_一普説。先於_二几筵殿_一遷_二理宗皇帝靈輿_一、入_二正殿_一拈香。語録、師不_レ許_二刊行_一。

という記載が存している。度宗（名は禛、一二四〇—一二七四）が即位して改元された咸淳元年（一二六五）三月十一日に智愚は入内し、前年の一〇月に崩御した理宗の靈輿を遷す儀式の際に正殿で拈香しているが、このとき首座の慧明は淨慈寺の智愚のもとに戻っていたものらしく、智愚とともに侍者として入内しているのである。ただし、このときの拈香法語

は智愚の意向で刊行することを許さなかったとされるから、随侍した慧明のみが聴聞したことになるつか。

ところで、「雪蓬明長老赴禾興光孝」の法語によれば、慧明は淨慈寺において首座の職位を終えて後、一旦、智愚のもとを離れて松江府（江蘇省）の澱山に開堂出世しているものらしい。『至元嘉禾志』卷四「山阜」の「松江府」には澱山について、

澱山、在府北六十里薛澱湖中。周回三百五十步、高三十丈。考証、山形四出如鼈、上建浮圖、下有龍洞、屹立湖中、亦落星浮玉之類。傍有小山、初年僅兩席許、久之浸長。寺僧築亭、其上榜曰明極。

と記されており、同じく卷一〇「寺院」の「松江府」には山中の普光寺について、

普光寺、在府西北七十里薛澱湖。考証、寺在湖中山頂。宋建炎元年、請今額。

と簡略に記されている。また明の正徳七年（一五二二）に刊行された『松江府志』卷一八「寺觀上」によれば、

澱山禪寺、薛澱湖中山頂。宋建炎初建、紹興中、賜額普光王寺。元天曆中燬、郡人唐昱重建。国朝改今額。

と載せられている。これらの記述によれば、澱山は松江府北六〇里（または西北七〇里）の薛澱湖の湖中にある小山であり、山頂に澱山普光王寺（澱山禪寺）が存したことが知られる。おそらく慧明が澱山に開堂出世したのは咸淳元年のことと見られるが、住持を勤めたのはわずか二年にすぎなかったとされる。おそらく慧明は咸淳元年から翌二年まで住持職を勤めたにすぎず、住持を辞して杭州の径山に赴き、再び智愚の席下に投じて首座に再任していることになる。

おそらく慧明は淨慈寺の頃より日本僧の南浦紹明なども積極的に交流を持っていたものらしく、径山においても紹明と再び集つことになったものらしい。『一帆風』の冒頭には、

日本明禪師、留大唐十年、山川勝処、遊覽殆遍。泊見知識、典賣于鐘寺。原其所由、如善騎者、間不容髮、無端於凌霄峰頂、披認來踪、諸公雖巧為遮藏、畢竟片帆已在滄波之外。

咸淳三年冬、苕谿慧明題。

という慧明が記した序文ないし題語が載せられている。これによっても慧明が苕谿の出身であったことが確かめられ、咸淳三年（一二六七）の冬に紹明が日本に帰るために径山を辞するに際し、慧明は親しく『一帆風』に序文を題して饒別に

添えている。おそらく紹明は住持の智愚のほか諸禪者より饒別の偈頌を得て後、最後に首座の慧明のもとに出向いて序文を依頼したものであり、慧明もその申し出を快く受け入れて序文を撰し、去り行く紹明に書き与えているわけである。

咸淳四年（一二六八）秋九月に慧明はかつて智愚も住したところのある嘉興府嘉禾の天寧報恩光孝禅寺に住持することになり、径山の智愚の席下を辞している。八四歳の智愚も山内の方丈である不動軒において先の法語を書し、饒別として慧明に付与している。慧明が住持した天寧寺については、明の万曆二八年刊『嘉興府志』卷四「寺観」の「郡城」に、

天寧禅寺、在郡治北一里。唐為施水庵。宋治平間、慕容殿丞請于朝、至熙寧元年、賜名壽聖院。崇寧二年、賜名天寧寺。政和六年、改名天寧万寿院。紹興七年、改名広孝院。十三年、改名光孝禅院、賜田二千畝。洪武二十四年、定為今額。内有漢風閣・毘盧閣、後有嚴助墓・嚴將軍井・宋徽宗御書。屏在僧舍。

とあり、また清の光緒五年刊『嘉興府志』卷一八「寺観一」の「秀水泉」に、

天寧禅寺、在治北里許。漢嚴助宅也。旧為施水庵。唐咸通中、改為院。宋治平中、郡人慕容殿丞請于朝、更為十方禅刹。熙寧元年、賜名壽聖院。崇寧二年、賜名天寧寺。政和六年、改名天寧万寿院。殿西池上、建臨清軒。紹興七年、改名広孝院。十三年、以孝宗誕毓是地、改報恩光孝禅院。賜田二千畝。元至元初、為天寧万寿禅寺。至正中、僧良念重修、又建靜淥軒于殿左。僧力金、建深雪軒于殿右。

と記されており、寺の変遷沿革が知られる。これによれば、天寧報恩光孝禅寺は嘉興府治北一里に存した禅寺であり、流虹興聖禅寺とともに宋室ゆかりの禅寺として重きをなしていたものらしい。慧明がいつまで天寧報恩光孝禅寺に住持したのかは定かでなく、その後、如何なる活動をなしたのかも知られていない。『五燈会元』の編集を成し遂げた慧明は、その後、智愚のもとに参じたことで辛うじてその消息を辿ることができたわけであるが、智愚のもとを離れて後、再び歴史の彼方にその消息を絶っている。

(1) 王楠（通庵居士）については、『大川和尚語録』「跋」に、「通庵居士頌・維摩經」が存し、『偃溪和尚語録』卷下「題跋」にも「跋・通菴王太尉維摩經頌」が存しているから、大憲派の大川普濟や偃溪広聞と交遊が存したことが知られるが、詳しい消息は定かでない。

(2) 『増集統伝燈録』卷五に、「杭州淨慈古田屋禅師」の章が存しており、『仏祖宗派図』には「淨慈断橋妙倫」の法嗣として「淨慈古田徳屋」と記されている。徳祐は元の至元二九年（一二九二）四月一四日に杭州淨慈寺の方丈で示寂しており、世寿は知られ

ていないものの、おそらく年齢的には慧明や祖元と同世代であったものと推測される。

- (3) 大應派の淮海元肇（一一八九—一二六五）の『淮海外集』巻下に「嘉興府澗山普光王禅寺免丁田記」が収められており、また径山で智愚にも参学した経験が存する楊岐派の蒙山徳異（古筠比丘、一二三一—一三〇八）も後に澗山に住持し、至元二十七年（一二九〇）に徳異本『六祖壇經』を編しており、また「仏祖三經」に序を寄せていることが知られる。さらに「月江和尚語録」巻上に「月江和尚住松江澗山禅寺語録」と「月江和尚再住澗山禅寺語録」が収められているから、元代に松源派の月江正印（松月翁・仏心普鑑禅師、一二六七—？）も一度にわたり澗山に住持していることが知られる。

(24) 静翁法塞

このほかにいずれの史料にも智愚の法嗣としては名が挙げられていないものの、智愚晩年の法嗣ではないかと目される人に法塞という禅者が存している。福岡市博多の石城山妙楽寺に所蔵される『石城遺宝』と、京都の東福寺靈雲院に所蔵される『集古録』などに、それぞれ所収される智愚の「虎丘十詠」には、

又跋虎丘十詠。法塞。

笑翁和尚主虎阜、先師典世墳、擁彼十勝為十詠。約翁腫門、軸而示之。然語墨俱真、不與版行。將恐刺荊於大方之眼、以惑來者。平。個指百余載、豈不肖子隨世高下、証其攘羊。合掌而帰請。

徳辰臘 法塞拜書。

という法塞が書いた跋文が載せられている。法塞がこの跋文を付したのは「徳辰臘」のことであるが、これは元の大徳年間（一二九七—一三〇七）の辰年の臘月の意であって、大徳八年（一三〇四）甲辰の歳の二月に相当している。

法塞については事跡が全く知られないが、跋文の中で智愚のことを「先師」と称し、自ら「不肖子」と述べていることから、おそらく智愚の晩年の法嗣ではなかったかと推測される。このとき法塞がいずれの地にあったのか、住持していた寺名も記されていないが、「虎丘十詠」の所持者であった約翁礼蔵主は、同じ大徳八年一二月初めに靈石如芝のもとを訪れて跋文を得ているから、当時、如芝が住持していた寺と法塞が住持していた寺とは距離的にかなり近い地になければならぬであろう。おそらく法塞も如芝と同じように智愚の晩年にその門に投じて法を嗣いだ門人であり、約翁礼はそうした事情を知って法塞と如芝を同時期に訪ねて跋文を得ているものであろう。

では、このとき法塞は具体的に何れの地の禪刹に住持していたのであるつか、この点について考察を試みておきたい。法塞の跋文につづく如芝の跋文は、

約翁礼藏司、自呉門「来遊」台厲、携「径山先師蘇尚処衆時虎丘十詠、出以為示。展閱未既、心折涕零。且需下注脚。先師無

此語、注脚向「什麼処」下。遂再拜歸之。若過「雁山」謁「静翁」、慎勿出此。恩深怨深、翁必諱見。

徳辰履初、如芝拜手。「如芝」(朱方印)

といつものであるが、約翁礼藏主はこのとき呉門おそらく蘇州呉県西北の虎丘山雲巖禅寺から台雁すなわち台州天台県の天台山や温州樂清県の北雁蕩山に來遊していることが知られる。大徳八年一二月初めに如芝を訪ねて跋文を得ていることから、おそらく約翁礼はこのとき台州臨海県東南の湧泉禅寺(延恩院)に住持していた如芝を訪ねて跋文を得たものと見られ、跋文の如芝のことばとして「若し雁山を過ぎて静翁に謁せば、慎んで此れを出だすこと勿れ。恩深くして怨み深し、翁、必ず見ることを諱まん」とあるから、その後、約翁礼はさらに温州樂清県東九〇里の北雁蕩山に赴いて静翁といつ禅者からも跋文を得ようとしていたことが知られる。如芝と法塞の跋文がほぼ同時期に著わされていることからすると、如芝のいう静翁こそ法塞のことを指しているものと見られ、当時、法塞が北雁蕩山の能仁普濟禅寺か靈峰禅寺あたりに住持していた可能性が高い。状況からすると、約翁礼は蘇州から台州湧泉寺に到って如芝より跋文を得、さらにそのまま雁蕩山に赴いて静翁法塞より跋文を得ているのである。しかも如芝は法塞に対して老師や和尚などの尊称を用いておらず、あくまで「静翁」と道号のみで表現していることから、ほぼ同時期に智愚に字んだ道友であった可能性が高い。法塞が智愚の「虎丘十詠」に跋文を付したのは智愚が示寂して四六年もの歳月を経た時期に当たっており、当時、如芝がすでに五八歳か五九歳であったことを思えば、法塞も同じく六〇歳前後には達していたものと推測される。

法塞の消息はこの跋文以外には何ら知られておらず、『石城遺宝』に所収される「遺宝集中諸師略伝」においても「法塞、欠」とあって、その略伝が不詳とされている。その後、法塞が如何なる活動をなしたのか定かでないが、如芝の「こたく長命を保つて目覚ましい活動をなした形跡が見られないことから、おそらく間もなく生涯を終えているものと推測される。

ところが、幸いにもその間の事情を伝える史料として『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻七「懷友」には同じ松源派の断江覚恩(以仁、仏鏡文智禅師・独一道人)の作として、

虚堂智愚の嗣法門人について（佐藤）

一一〇

懷「靈峯寺靜翁上人」 断江

情来無_レ処_レ写_レ詩題、忽憶靈峰道者栖、一榻虚空塞似水、半岩烟雨黑如_レ鬚。松西高閣俄秋草、谷口平田是故溪、過了_レ黄花一_レ応_レ寂寞、霜天唯有_二野狼啼_一。

という偈頌が伝えられている。これによれば、静翁は靈峰寺に住持していたことが知られ、しかも偈のことはに「塞」の字も見られるから、先の推測と合致している。覚愚は古林清茂（金剛幢、仏性禪師、一二六一—一三三九）などと同じく松源派の横川如珙の法嗣であり、明州鄞東南の大梅山保福禪寺などに住持しているが、法塞と何らかの交遊が存したことになる。とりわけ、覚愚は法塞のことを「静翁上人」という尊称を用いて懐かしんでいることから、法塞の方が年齢がかなり上であったことになり、あるいは覚愚がかつて靈峯寺の法塞のもとに参じた経験が存したのかも知れない。

清の光緒二十七年（一九〇一）刊行の『榮清県志』巻一五「方外」の「寺観」によれば、法塞が住持した北雁蕩山の靈峯寺について、

靈峯寺、在_二東内谷靈峯下_一。宋天聖元年建。康定三年、賜_レ額。泉石奇怪、垂_二於靈巖_一。國朝康熙、乾隆間、再建。

と記されており、法塞が住持していた頃の靈峯寺の消息を伝えるものとして、

元陳剛游_二靈巖_一至_二靈峯院_一詩 曉行_二靈巖中_一、午入_二靈峯界_一、祭紆松逕長、突兀崖石大。泉生脈蟬聯、林立勢迫隘、雲低河漢隳、天側日車礙。恍如蓬島遊、迥出_二区宇外_一、惟此兩招提、巖樹古稱_レ最。吾觀_二伯仲_一耳、信亦擅_二奇怪_一、居僧殊厭觀、過客乃深愛。蕭然齋厨中、餽粥缺_二塩菜_一、苦云_二歲人微_一、常住久凋瘵。夜聞_二風雨聲_一、照_レ仏青燈晦。度_レ嶺游_二石梁_一、此興忽已_レ懈。卻尋_二黃塘_一歸、明月弄_二煙靄_一。

という温州平陽の陳剛（字は公潜、号は潜齋）が詠じた「游_二靈巖_一至_二靈峯院_一」の詩を伝えている。これによれば、元代においても靈峯寺はきわめて幽玄な中にあり、僧衆は窮乏に耐えながらも叢林を維持していた状況が語られている。おそらく法塞も靈峯寺の住持として南宋最末期から元代初期にかけて動乱期の厳しい状況を乗り越えて枯淡な宗風を振るっていたものと推測される。

(一) 『石城遺宝』に載る「跋虎丘十詠」の諸禪者の跋の中で、智愚のことを「先師」と尊称しているのは、開極法雲と靈石如芝と法塞の三禪者のみである。他の江南禪者はおおむね智愚を「虚堂老師」「老虚堂」「虚堂和尚」「天沢老人」「虚堂老人」といった表

現で尊称しており、決して先師の称を用いてはいない。開極法雲は智愚のことを「先師」「老和尚」と表現し、靈石如芝も「径山先師和尚」「先師」と表現しているが、同じように法塞も智愚のことを「先師」と表現している。法雲と如芝が明確に智愚の法嗣である点を踏まえるならば、当然のことながら、法塞も智愚の法を嗣いだ門人と解せざるを得ないわけである。

(2) 明の万曆二十九年(一六〇一)に刊行された朱謙撰『廬山志』巻二「寺院 十八刹建置沿革」には、

靈峯寺、在東内谷。宋天聖元年、僧文吉建。康定二年、賜額。寺傍泉石奇恠。至_レ於靈岩。而羅漢洞尤為勝絕。

と記されており、靈峯寺が雲門宗の五祖師戒の法を嗣いだ靈峯文吉によって北宋の天聖元年(一〇三三)に創建され、康定二年(一〇四一)に靈峯禅寺の勅額を賜ったことを伝えている。ただし、『廬山志』四巻を通じて法塞に関するような記事は見い出せない。ちなみに、『横川和尚語録』巻下「偈頌」に「送契首座住廬山靈峯」という偈頌が存しているから、石林行_レ葦の法嗣である東石師契が法塞より若干早く靈峯寺に住持していることが知られる。

おわりに

以上、史料的には曖昧な面を残す『正誤宗派図』や『虚堂和尚語録梨耕』などによるところが大きかったわけであるが、一応、智愚には二〇名前後の中国の嗣法門人が知られ、日本の嗣法門人としても南浦紹明と巨山志源の二名が存している。智愚の嗣法門人としては江西の仰山に住持した晦叟法光を除いて、ほぼ浙江・江蘇・福建を中心とした地域で活動していたことが知られる。その中で五山にまで陞住し得たのはわずかに淨慈寺の靈石如芝のみであり、十刹でも虎丘山の開極法雲と雪竇山の禹溪一了の二人でしかない。

智愚は遠く日本から到った紹明に自らの禅風の挙揚を託したわけであるが、そのことによって日本禅林に法統が導入され、やがてその門流は大きな発展を遂げて現今にまで及んでいる。智愚は晩年に一介の日本僧紹明を育成したことで、日本禅宗史上に不屈の名声を得ることができたわけである。これに反して、当の中国江南禅林においては、時代の転換期にあつて次世代につづく門人の育成に乗り切れなかつたためか、虚堂門下が躍進する原動力はすでに元朝治下の中国叢林においてほとんど望み得なかつたものらしい。禅宗燈史や宗派図を通して見るかぎり、中国禅林において智愚の系統はその法孫の世代まで存続したことが知られるのみであつて、大きな展開を見せることなく断絶している。南宋末元初の動乱期を経て後、元朝の治下に生きた虚堂門下の人々はすでに禅界の主流に上ることなく、意図むなく法統を断つていくこと

になろう。

ただ、本稿において考察したごとく智愚の法嗣には開極法雲・宝葉妙源・葛廬淨潭・靈石如芝など詩文の名手がかかなり存しており、それなりの活動をなしていたことが判明したのは一つの成果といえよう。また智愚の影響を受けた参学門人には破庵派の無学祖元や虎丘派の龍源介清（仏海性空禪師、一二三九—一三〇〇）さらに楊岐派の蒙山徳異といった禅者がおり、とりわけ祖元や徳異などは独自の活躍をなしたことで知られている。一方、日本僧としても実際に智愚の法を嗣いだ南浦紹明や巨山志源のほかに、松源派の無象静照と曹洞宗永平下の寒巖義尹（法王長老、一二二七—一三〇〇）それに聖一派の直翁智侃（仏印禪師、一二四五—一三三二）などは智愚の影響をかなり受けた禅者であつたと見られる。

ところで、福岡市妙楽寺所蔵『石城遺宝』と京都東福寺靈雲院所蔵『集古録』などにそれぞれ所収される智愚の「虎丘十詠」には、

又 跋「虎丘十詠」。 雪谷。

拝読虚堂老祖所作虎丘十詠、古今絶唱也。大元時、江南諸尊宿輩、皆羨跋于後、誠法門至宝。日東師恒中立翁・石隱瑛翁之二師念、先祖遺墨、欲寄歸本国、伝而盛事耳。今經八九十年、流落於瀆、不果所願。大明成化丁酉、遠孫比丘宗戒、偶獲一睹、方知先輩用心如此。所以古人片言隻字、莫非金玉、未敢輕棄也。一日、武定公子省齋郭君、歸金台之便、順携此卷還京。待日本朝觀僧詣闕、將此卷付之、持歸本国妙楽寺、以了先師之願。敬跋于卷末以俟。

瀆城五華、六十七歳、遠孫比丘雪谷宗戒、謹識。

という跋文が載せられている。しかも実際に福岡市博物館にはその原本が所蔵されており、その文面や落款を示すならば、

「白雲幽石」(白文長方印)

「雪松帰隱」(白文方印)

拝読虚堂老祖所作虎丘十詠、古今之絶唱也。大元時、江南諸尊宿輩、皆羨跋于後、誠法門至宝。日東師恒中立翁・石隱瑛翁二師念、先祖遺墨、欲寄歸本国、伝而盛事耳。今經八九十年、流落於瀆、不果所願。大明成化丁酉、遠孫比丘宗戒、偶獲一睹、方知先輩用心如此。所以古人片言隻字、莫非金玉、未敢輕棄也。一日、武定公子省齋郭君、歸金台之便、順携此卷還京。待日本朝觀僧詣闕、將此卷付之、持歸本国妙楽寺、以了先師之願。敬跋于後卷末以俟。

瀆城五華、六十七歳、遠孫比丘雪谷宗戒、謹識。

「雪谷」(白文方印)

「宗戒」(朱文方印)

「肯五華住山」(朱文方印)

となっている。この跋文は明の成化二三年（一四七七）に智愚の遠孫比丘と自称する雪谷宗戒（一四一一？）が滇城すなわち昆明（雲南省）の五華寺において記したものであり、南京（金台）に帰る官僚（省斎郭君）に託し、日本僧に博多の妙楽寺に持ち帰るべく取り計らったものらしい。このとき智愚の「虎丘十詠」が漸く明国に朝覲した日本僧によって妙楽寺に持ち帰られたわけであるが、宗戒が智愚の遠孫であるとする、その法統が中国禅林においても辛うじて維持され、明代中期まで雲南の地に存続していたことにならう。残念なのは宗戒の法系譜が辿れないことであって、智愚の法嗣の中で誰の系統に属していたのかも定かでない。ただ、智愚が示寂して二世紀以上を経過しており、末弟の靈石如芝が示寂してからも一世紀半近い歳月を隔てていることから、宗戒は智愚から数えて五代以上は離れた遠孫であつたものと推測される。いずれにせよ、日本で大徳寺・妙心寺を中心に大応派が隆盛に向かつていた時期に、雲南という中国でも辺境の地に智愚の法統を受け継ぐ禪者が存在していたことは興味深い事実といえるだろう。

以上、虚堂智愚に参じてその法を嗣いだ門人たちについて一通り考察をなしたわけであるが、なお筆者の未見の史料などで追補すべき記載が多々存することであろう。たとえば帰国する南浦紹明に虚堂門下の諸師が書き与えた送別偈を軸とした『一帆風』の原本はすでに存しないのか。また日本に齎されたことが知られながら、所在が確認されていない閑極法雲や禹深一了・静翁法塞らの墨蹟はいまも国内のどこかに秘蔵されているのか。あるいは明極楚俊が『円通大応国師語録』の跋文でその存在を語っている虚堂門下の主だった人々の語録はすでに歴史の彼方にすべて散逸してしまったのか。様々な尽きせぬ思いが浮かんでくるが、どれか一つでも判明するようなことがあれば、新たな事実も辿ることが可能となるであろう。

(1) この点については拙稿「虚堂智愚と日本僧」、『印度学仏教学研究』第三一巻第一号（一）の論考が存するが、若干ながら修正を要する状況となっている。

(2) 智愚の遠孫と自称する雪谷宗戒については、渡邊雄二「館蔵『雪谷宗戒墨蹟 虎丘十詠跋』について」、『福岡市博物館研究紀要』第二号（一）に考察が存している。ちなみに宗戒の墨蹟には、江戸初期に大徳寺の住持を勤めた玉室宗珀（惺眠子、直指心源禪師、一五七二—一六四一）と沢庵宗彭（秀喜、一五七三—一六四五）と江月宗玩（欠伸子、懺袋子、赫々子、大梁興宗禪師、一五七四—一六四三）という三禪者が連署するときのような点字一紙が付されている。

此一軸、所被跋「虚堂之遺墨」也。雪谷禪師者、宗系録古之中未見名実。雖然、親自被書「遠孫」、則虚堂末葉有何疑。殊

虚堂智愚の嗣法門人について（佐藤）

一一四

代在「大明」、曆在「成化」。未レ備「録部」、亦有「其理者乎。

玉室宗珣「玉室」

沢庵宗彭「沢庵」

江月宗珣「江月」

これによれば、雪谷宗戒については諸文献にその名が見られないことから、江戸初期においても如何なる法系なのか辿れなかったことが知られる。ただ、三者は宗戒が自ら遺孫と称している以上、智愚の末葉に連なる禅者であることに疑いの念を差し挟んでいない。

「中国の禅宗燈史・宗派図その他に載る虚堂智愚の法嗣」

数字はそれぞれの史料における掲載順序。

江湖風月集	佛祖宗派之図	増集統伝燈録	禅燈世譜	五燈会元統略 繼燈録	五燈嚴統	祖燈大統 統燈正統	五燈全書 統燈存彙 統指月録
3 四明閑極 雲	1 閑極 雲 2 宝葉 源 3 靈石 芝	1 虎丘閑極 雲 2 定水宝葉 源 3 淨慈靈石如芝 4 靈巖竹窓 喜 5 雪竇禹溪 予 <small>(了)</small> 6 葛廬 覃	1 間極 雲 3 宝葉 源 2 靈石 芝	2 閑極 雲 1 宝葉 源	1 閑極 雲 2 宝葉 源	1 虎丘間極 雲 2 定水宝葉妙源 3 靈石 芝	2 虎丘間極 雲 1 定水宝葉 源
1 叙南叔菴 相 2 東洲 瑞蔵主 5 四明虚菴 実							
4 越禹溪 了首座							

「日本の禅宗燈史・宗派図その他に載る虚堂智愚の法嗣」

大応語録跋	仏祖宗派図	正誤宗派図	虚堂録梨耕	延宝伝燈録	墨蹟祖師伝
<p>2 竹窓喜</p> <p>1 宝葉源</p> <p>6 南浦明</p> <p>3 閑極雲</p> <p>5 靈石芝</p> <p>4 葛廬曇</p>	<p>1 報恩宝業法源</p> <p>5 建長南浦紹明</p> <p>2 承天閑極法雲</p> <p>4 雪竇禹溪一了</p> <p>3 淨慈靈石芝</p>	<p>1 報恩晋芝妙源</p> <p>2 資福象先可観</p> <p>3 靈岩竹窓宗喜</p> <p>4 妙相字菴</p> <p>5 定州宝業道源</p> <p>6 建長南浦紹明</p> <p>7 虎丘閑極法雲</p> <p>8 雪竇禹溪一了</p> <p>9 淨慈靈石如芝</p> <p>10 東山葛廬淨草</p> <p>11 慈源友常禪会</p> <p>12 南明秋岩徳新</p> <p>13 万年東州惟俊</p> <p>14 翠巖此軒如足</p> <p>15 四明虚菴 実</p> <p>16 万寿潜溪妙広</p> <p>17 仰山晦叟法光</p> <p>18 明州無示可宣</p> <p>19 平山本立</p>	<p>1 報恩晋芝妙源</p> <p>2 資福象先可観</p> <p>3 靈岩竹窓宗喜</p> <p>4 妙相字菴</p> <p>5 定州宝業道源</p> <p>6 建長南浦紹明</p> <p>7 虎丘閑極法雲</p> <p>8 雪竇禹溪一了</p> <p>9 淨慈靈石如芝</p> <p>10 東山葛廬淨草</p> <p>11 慈源友常禪会</p> <p>12 南明秋岩徳新</p> <p>13 万年東州惟俊</p> <p>14 翠巖此軒如足</p> <p>15 四明虚菴 実</p> <p>16 万寿潜溪妙広</p> <p>17 仰山晦叟法光</p> <p>18 明州無示可宣</p> <p>19 平山本立</p>	<p>1 建長南浦紹明</p>	<p>3 建長南浦紹明</p> <p>1 虎丘閑極法雲</p> <p>2 淨慈靈石如芝</p>

	大心語錄跋
	仏祖宗派図
	正誤宗派図 20 東洲 瑞蔵主
24 天寧雪簷慧明 23 禅興巨山 源侍者 22 壊衲無補 21 石門無隱 20 東洲 瑞蔵主	虚堂録梨耕
2 禅興巨山志源	延宝伝燈録
	墨蹟祖師伝